

へば例へば *Das Reale* ぐらゐに取ればいゝ。現實の相などと碎いて云つてもいい。自然はロダンなどが生涯通つてのし力強く云つたあの意味でもいゝ。この自然の大體の意味を味ふのに和辻氏の文章が有益である。「私はこゝで自然の語を限定して置く必要を感じる。こゝに用ひる自然は人生と對立せしめた意味の、或は精神、文化などに對立せしめた意味の哲學的用語ではない。むしろ生せいと同義にさへ解せらる所の、ロダンが好んで用ふる所の、人生自然全體を色括した、我々の對象の世界の名である。我々の省察の對象となる限りれは吾々の感覺に訴へる總ての要素を含むと共にまたその奥に活躍してゐる生そのものをも含んで居る」から和辻氏は云ふ。予の謂ふ意味の自然もそれでいい。生は造化不窮の生氣、天地萬物生々の「生」で「いのち」の義である。「寫」の字は東洋畫論では細微の點にまでわたつて論じてゐるが、こゝでは表現もしくは實現位でいゝ。是は藝術の一般論に過ぎない。さうしたら寫生といふ特別の語を出さなくとも好いと難する人がゐるかも知れない。それはその通りで寫生の嫌な人は寫生を云はなくもいゝ。ただ予には寫生は極めて切實なのであつて、予は予の藝術の根本義を此の寫生におかうといふのである。予には寫實主義、自然主義、表現主義、理想主義、象徴主義、未來派、内心要素の原理云々では切實に響いて來ないといふのである。

歌ごころの街道に従つて、自由に、直接に、深く、確かに、その間に二次的の雜念を交へずに、中途でふらくと戯れることなしに、表はすものをば表はすのが寫生である。

象徴的、神祕的、宗教的、氣韻、富意、さういふことは眞に寫生をすれば、おのづからあらはれるものである。空に通つて象徴神祕などと幾ばく叫んでもそれはあらはれない。予が「寫生に縁つて神を見る」といふのも、寫生に縁つて、「神當に自ら來るべし」といふのも、作歌のうへに寫生を根本として時に自らを願ふとするのもこれがためである。予等の作にある深ふか祕は寫生に縁つておのづからあらはれたものである。(短歌寫生の説)

2 作品批評

北原白秋、齋藤茂吉選集序より

齋藤君の歌は力ある生命力(人間味)の顯現だと云はれてゐる。主觀の響が高い。自然觀照の場合に於てもどうかすると主客の圓融と云ふ事より客に向つて主たる自己の感覺を一本氣に性急にうち出す。これは子規の寫生とも芭蕉の觀想とも私のそれとも趣を異にしてゐる。

あかあかと一本の道とほりたりたまきはるわが命なりけり
此の下半を見ればわかる。これはともすると概念的になり易い。で長所でもあれば短所とも云へよう。然し、此のすばりと荒削りの木地のまゝ、一氣に詠み下ろす強氣は外には見られない。一刀流の太刀風である。私が青眼に構へるならば、此の人は多くは大上段に振りかぶつてゐる。剛勢な氣力である。張り切つてゐる。

癖の多いと云へばこれくらゐの癖の多い手筋は無からう。一首一首に就いて隙を見つけようとする、

随分隙がある、こゝなら打ち込めると思ふ隙は随分ある。然し、隙がハッキリと見えるのは、外に隙が無いからである、初めから成つてゐなくて隙だらけの歌は初めから隙を見る張り合が無い。齋藤君ほどに達人の隙を見せて呉れる人は少い。ここがえらいところだと思ふ。

齋藤君の歌にも、初めから終まで隙だらけのがある。これは容易に打ち込め無い。その實際が無いからである。その天然の稚拙な點は學んで得られない。

「たまきはる我が命なりけり」は私には打ち込め。然し打ち込んでサツと交されて一氣に打ち下して来るにちがひ無い。すると、此方で受け留めなければならぬ。氣力が弱いとやられる。

然しどちらかと云へば、私の好みは齋藤君がしつくりと青眼に構へて目動きもしない時の姿である。眞夏日の光澄み果て淺茅原にそよぎの音のきこえけるかも

かうなると主客圓融して眞にひとつのえならぬ心象を顯現する。象徴の域に達してゐる。

それから歌ひあまつて姿のゾクリと壊れた歌がある。破れが破れの儘になつてゐるのがある、かと思ふと、破れて一點の隙も無いのとある。破格の歌で後者に屬する方はいゝ歌と思つて抜いた。

長塚節、「赤光書入れ」より

めん鶏ら砂あび居たれひつそりと剃刀研人は過ぎ行きにけり

特色を見る。時間の無い單純な空間をよんだ然かも相互に何等關聯も無いものを取つて來た處、作者は只其時の閑寂な光景に感興を湧出したのである。例の癖がよく出たのである。めんどりの砂をあび居

る處が既に地味な閑寂な趣である。剃刀研人も亦如何にもぼさぼさした派手でない容子をしたものである。兩者にはそこに一縷の連絡を有してゐる。

電燈の球にたまりしほこり見ゆすなはち雪はなだれ果てたり

特色を見るべし。一見しては晝夜の區別がないやうで居ながら、電燈の球の埃といふので晝間のことであることが明瞭である。床上に仰臥して、日も既に高くなつたと思ふ頃、赤かつた電燈は消えて、見つめる球には埃が発見されるのみである。閑寂としてゐる室内である。さうして昨夜からの雪は日光のためになだれるだけはなだれてしまつて、これも閑寂の趣を添へてゐる。

秋のかぜ吹きてゐたれば遠かたの薄のなかに曼珠沙華赤し

特色を見る。二の句作者の苦心の存する處、語格の上より議すべきものあらんも、そのため却て一首落つきを得て、秋風の騒がしき感おほく、曼珠沙華のいやが上にも赤きを覺ゆる。然しながら一步を誤れば、只作者のいひ方を苦にする例の弊に陥るのである。二の句は實に危機を包藏してゐる句である。

ほのかなる若荷の花を看守の時わが思ふ子ははるかなるかも

特色を見る。作者はほのぼのといふ語を好んで使用するが、此歌の如き其ほのぼのとした處に好味を有してゐる。若荷の花は如何にもほのかなものである。さうして若荷の花は地味な目につかぬものである。だから作者は見守るといふ語を用ゐて居る。しみじみと見なければ目につかぬ花である。其のしみじみとして居る時に、わが思ふ子を思ひうかべた。其の子は自分に覺束ない感じを與へる。遙か作者

の位置を説明したのでなくて、感じを説明したものとしたい。

赤茄子の腐れてゐるところより幾程もなき歩みなりけり

特色を見る。俳句には只文字の解釋だけではわからぬものがある。此歌もさうである。一見しては、何のことか不明である然し呆然と何か考へて歩むことすら意識しないやうな場合があつたとして、さうして暫く時が経つたと思つて、ふと気がついて見ると、先刻は赤茄子の腐れて居た處に居てやがて其處を立つて來たのであつたが、まだ幾らも歩いては居ないのだつたと驚いた様子が表はれてゐると思へば如何にもさう見える。他人の作にかういふ例があるかないかは知らぬが、短歌に於て慥かに一生面を開いて居るものがあるので。

櫻

〔櫻〕 カシ。柏、榎。穀斗科の落葉喬木。高さ七米に達し、葉は廣く大きく、周邊に波の様な刻みがある。實は堅果、椀状の穀斗がある。材は薪となる外用途が少い。

〔とどろき〕 轟き。響きわたること、鳴り響くこと又その音。鳴動。櫻の實の落つるのをとどろきとしたのは小魚の氣持。

〔井〕 井戸。

〔タづつ〕 長庚と書く。金星のこと。宵の明星。萬

十「タ星も通ふ天路をいつまでか仰ぎて待たむ月人男」

〔神がき〕 神垣。神社の周圍の垣。

〔こまいぬ〕 狛犬。神社の前に、木又は石でその形を造り、獅子の像と向はせて据ゑ置く。鬼魅を避ける爲だといふ。

〔ふる寺〕 古寺。古刹。古めかしい、由緒ありげな

寺又は荒れはてた氣持。

〔萩〕 荳科胡枝子屬の多年生草本。莖の高さ一米半程。

叢生。下部木質。葉は羽狀複葉、各小葉は楕圓形全縁。花は總狀花序に排列し、秋季紅紫色、淡紫色又は白色の蝶形花を開く。秋の七草の一。各地に自生、又栽培される。

〔うつらふ〕 映るの延。(一)影がさす。映する。

(二)色、又は趣きが合ふ。

こゝは(一)。

〔小春日〕 小春の頃の暖い日。小春は陰曆十月の異稱。荊楚歳時記に「十月天氣和暖似春、故曰小春」とあるによる。

〔樹の實〕 コノミ。

〔手向け〕 タムケ。たむけること。神佛に幣物を捧げること。又そのもの。

〔おくつき〕 奥津城。奥津城所とも。墓のこと。萬「われも見つ人にもつげむ葛飾の眞間の手こながおくつきどころ」

〔銀杏〕 イテフ。銀杏科に屬する落葉喬木。三十米に達する。樹皮黄白色。葉は扇を開いた様で、秋

になると黄變落葉する。初夏莖頭に雌雄異株の花を附ける。實はぎんなんと呼び焼き又は煮て食べる。材は木理緻密で美しい。晩秋あくまで黄色の衣を全身にまとうて立つ姿は秋そのものである。

〔ひと葉〕 一葉(も動かない)

〔石たたみ〕 こゝでは市街電車の線路に敷いてある石たたみ。

〔清水〕 キヨミヅ。清水寺もしくは寺院一帯の地をいふ。寺は法相宗の名刹。京都東山清水坂の東端音羽山と號し、西國巡禮第十六番の札所。坂上田村麿を壇那とし、寶龜十一年大和小島寺の僧延鎮創建。寺中十一面四十臂の觀音を定置する。現在の本堂は寶永十年徳川氏の再建で、有名な清水の舞臺は懸崖に南面して京都市の西南部を一時に收めてゐる。奥の院の南崖には音羽の瀧が懸つてゐる。清水へは清水を指して、

〔祇園〕 ギオン。洛東八坂神社祇園祠邊の地。四條橋の東、圓山大谷の西。八坂神社の附近には櫻樹多く、花時になると花下に篝火を焚き、雅俗群集して夜色の幽艶を賞する。

〔よぎる〕 通り過ぎる。(もとは立寄らずに避きて

通るをいふ)

〔繪日傘〕 エヒガサ。日傘の模様を彩色したもの。
〔さびしき人〕 心にさびしさ又はうれひを感じた人。(性質として見ず、さういふ場合の人とするがよい)

〔かくしけん〕 かうしたであらう。

〔蓬生〕 ヨモギフ。蓬などの生ひ茂つた土地。荒れはてたさまにいふ。源桐壺「かかる御使のよもぎふの露わけ入り給ふ」

〔楊柳〕 ヤナギと訓む。「楊はかはやなぎ」

〔まさびし〕 「ま」は接頭語。

〔ひとり柳〕 獨り柳。一本立ちの柳。

〔たく〕 更く。長く。(一)十分になる、盛りになる。

(一)さかりが過ぎる。末になる。

こゝは(一)

〔ためらう〕 躊躇。(一)迷つて心が決しない。

(二)進退に迷つて一所を徘徊する。さまよふ。

こゝは(一)

〔晝ながら〕 晝ではあるが。ながらはとはいふものの。ではあるが。

〔晝〕 鞘翅類に屬する。光るのは酸化作用によるも

ので、雌雄相知るに供し、又警戒の用をする。

〔孟宗〕 マウソウ。孟宗竹のこと。江南竹ともかく

竹の一種、禾本科、苦竹屬に屬す。支那の原産。

我國の暖地では至る處で栽培。高さ十米から二十

米直径二十種に達し、よく箴を作る。節から二十

の枝を出し各枝の節からも一二本の小枝を出す。

節は食用となる。

〔入道雲〕 夏の雲の入道のやうに見えるもの。

〔ひんがし〕 東。

〔ほそぼそと〕 かすかに。小聲で。

〔童子〕 ヲラベ。子供。兒童。

〔ゆらゆら〕 (ゆらの重音) (一)ゆらを強めていふ。

ゆり動くさま。

(二)ゆるゆる。ゆらりゆらり。徐々。

こゝは(一)

〔朝日子〕 朝日に同じ。(古語)神樂「わが駒は早く

ゆかなんあきひこが八重さすをの玉笹の上に」

〔太笛〕 曉の空気を破つて聞えて來る。ボーツとい

ふドラの音を想像する。

〔こたま〕 木靈、木精。(一)樹木の靈魂。

(二)山彦。反響。

こゝは(一)

〔並みよろふ〕 「よろふ」は具足する、足り整ふの

意。こゝでは山が足り整うた姿で並びつゞいて居

ることをいふ。

〔ひさかた〕 久方。「天」にかけていふ枕詞「ひさか

たの」から出た語で、あめ、そら、ひ、月、雲、

都などを稱するに至つた語。

二元 五箇條の御誓文

一 教材研究

1 解題

本課は徳富蘇峰氏著「國民小訓」より採つた。

作者 徳富蘇峰。トクトミソホウ。名は猪一郎、文久三年正月肥後國葦水郡水俣村に生る。父は洪水といひ横井小楠の高弟であつた。初め熊本の英學校及び京都同志社に學んで、新島襄の感化を受けたこと多大、論文「將來の日本」一篇を懷にして東上し、文名頗に上がり、明治二十年雜誌「國民の友」を創刊し、次で明治二十三年國民新聞を創め、民友社を中心として操觚界に活動した。明治三十年、内務省參事官に任ぜられたが、後辭して歐洲に遊んだ。明治四十三年、寺内朝鮮總督の寄託を受けて、朝鮮の新聞經營のために盡力し、後貴族院議員に勅任せられた。昭和三年、故ありて、國民新聞社と縁を絶ち、今や東京日日新聞の客員として日々の紙上を賑はしてゐる。實に氏の豊富なる學識と、時文評論家として並びなき蒼勁の筆は、近時歐化的色彩を帯びて、政治・教育・經濟・文藝等行くとして可ならざるなしの評がある。特に近年筆を呵して積年の宿志たる「近世日本國民史」の著作に従ひ、老來筆力いよく旺盛の概がある。大正十二年該著によつて、我國最高名譽の帝國學士院恩賜賞を贈られた。操觚者としては誠によく無冠の

宰相の稱にそむかず、文章報國の名も實に氏に於てこれを見るといふことができる。著作としては、「吉川松陰」「國民叢書」(靜思餘錄等二十餘編)「將來の日本」「新日本の青年」「世界の變局」「時務一家言」「元田先生進講録」「政治家としての桂公」「山水隨緣記」「杜南と彌耳敦」「七十八日遊記」「大正の青年と帝國の前途」「兩京去留誌」「大戰後の世界と日本」「國民小訓」など頗る多い。

2 文意

維新の大精神として、五箇條の御誓文を解いた論說。

3 節意

第一節 五箇條の御誓文は維新改革の全國民的精神であること。(二二三頁八行)

第二節 五箇條の御誓文の解説。(終まで)

4 句意

(此の會議を起し、衆に諮るは、我が上代歴史に示す如く、祖宗以來の慣行である)

古事記上に「是以八百萬神。於天安之河神集集而」とあり、又神代紀には「千時八十神會合於天安川邊」とある。いづれも天照大神の天岩窟へかくられた時のことであつて、いつも神集ひに集うて談合

せられる。萬葉集卷二、人麿の歌には「天地の初の時し久方の天の河原に八百萬千萬神の神集ひ集ひいまして神計り計りし時に」とある。神々も上古より事を決定するには衆に計つたのである。

(各々其志を遂げ人心をして倦まざらしめんことを要す)

常に停滞なく各人が進んで人心をして倦怠せしめぬやうにせよといふ御趣旨であるがこれは五箇條中もつとも具體的に經世済民の事にふれてゐる名文句であり、生物の趣があり、革新事を起すときの興奮と希望とのこもつた箇條である。

(建國の大精神)

神武天皇が大和地方を御平定の後、畝傍山の東南橿原の地に於いて、新宮を經營せられた時に勅し給ひ、「當に山林を披き拂ひ宮室を經め營り、恭んで寶位に臨み、以て元元を鎮むべし。上は則ち天神の國を授け給ふの徳に答へ、下は則ち皇孫の正しき道を養ひ給ふの心を弘めん。然して後に六合を兼ねて以て都を開き、八紘を掩ひて宇とせんこと亦可からずや」と仰せになつた。「天神の國を授け給ふの徳に答へ」「皇孫の正しき道を養ひ給ふの心を弘め」「八紘を以て宇とせん」、皆々正大なる天地の公道に則る大精神である。

(維新の大精神に立返れ)

我國の政體の大變革は、藤原氏の貴族政治と、平民に始まる武人政治と、大政元君に還つた明治維新との三度であるが、建國の本體に立ち返り、二千餘年の弊政を矯めたのは實に明治維新である。かくて國

内は統一し、大君の御意志は直接に草民の上に及び得るやうになつた。かくて國民は類まれなる御治世の下に、其の生を定んじ得ることとなつたが、當今漸く惠ある國柄を忘れて、西歐の理智一點張りの思想に感化せられて、矯激なる行動を肯定する風が起つて來たが、この著者の維新の精神に立返れといふ辭に従つて五ヶ條の御誓文の精神を顧みたる者は、賢き明治大帝の叡慮の中に既に、西歐の思想よりなほ進歩的にして、純理的なる根本觀念の存することを知るのである。従つて我々は、五ヶ條の御誓文の精神の下に、即ち美しき御聖旨の下に、この國は守り、改むべき政治上の方法を改革してゆくべき使命を持つてゐることを自覺しなければならぬ。

二 指導研究

五箇條の御誓文にあらはれた精神は形式的な施設方針でなく、時代の一大志望であり學國の一大渴仰の心より生れた聲であり建國の精神の再現である。しかしこの御誓文は簡明であるからその精神のこもつた所を説明し教示するのはきはめて必要である。それにはこの蘇峰氏の蒼古遒勁の文字は實によくその役に當るものであり、論文として明快な筋のとほつた文章を味はせ度い。

この五箇條の御誓文は本文の末にもあるやうに吾國民の羅針盤であり案内標であるわけであるが、これは標自身が靈術の力あつて吾々を導くのでなく、飽く迄吾國民の自覺によつてこの標示に常に新しき精神を與へ、新しき精神を發見してゆくとところにその靈妙なるべき本質は發揮されるのである。これには最初

生れたる標語の文句を徒に一般化するよりは精神を忘れてはならないので時代をへだ、るとその解釋者も必要になつて来る。しかしその解釋が人心の深奥に滲透すべき力がなくてはならない。その解釋者の人格が自然に文章にあらはれ解釋に再現して人心を惹くものでなくてはならない。その反對になるときは非常な冒瀆となるのであるから聖典解釋の大切なることゝむづかしさがこゝに在る。本課は言葉少くしてなにか物足りなさがあるやうだが御誓文の解釋としては當然かくあるべきもので、この短句短章の中に國民として正に知るべきものを指示してあるのであつて、教授者は特に安易によみすぎないやうに生徒を導くべきであると思ふ。

三 參考資料

御誓文宣布の明治元年は徳川幕府倒れし翌年にあたり、政府に於ては外交内政の大改革のあつた折で革新的の氣に充ち満ちて居た。この御誓文に對する百官の奉答文はその消息を知らしめるものである。

勅意宏遠、誠に以て感銘に堪す。今日の急務、永世の基礎此の他に出づ可らず、臣等謹んで叢言を奉戴し、死を誓ひ、匪勉從事、翼くは以て宸襟を安んじ奉らん。

「死を誓ひ」とある。これは稀にみるつよい文句で當時の人心の切迫が知られ同時に御誓文がいかに切迫した要求の下に生れ出でたか察知せられるのである。

語 彙

〔維新〕 キシン。語義は萬事改まりて新たなること。詩經大雅に「文王在天、於昭于天」、周雖舊邦「其命維新」とあるに由る。こゝでは明治維新のこと。明治維新は江戸幕府末期黒船の渡來を直接の原因とし、從來上下に醗酵しつゝあつた開國、攘夷、勤王、佐幕の諸思想が相錯綜し、公武の衝突より轉じて公武合體の運動となり、再轉して討幕の機運となり、三轉して將軍の大政奉還によつて王政復古となり、版籍奉還、廢藩置縣によつて日本が全く近代國家の形態を備へるに至るまで時代及びその時代の經過をいふ。社會的に町人階級の擡頭と商工業の發達とが資本主義發展の前階段として經濟的に重大なる變化を來し、武士階級の衰頹を封建制度の崩壞とを促しつゝあつたところへ、内部には武家政治の不合理に對する國民の政治的覺醒と國粹思想的批判が高まり、外部的には諸海外勢力の東漸によつて、この劃期的情勢を現出したのである。そしてその結果は中央集團の行實となつた。かくして封建的君主政體と離れて再び官僚的君主政體に復し、しかも人民の間に於け

る階級の特權を打破して四民平等の原理に立ち、次いで立憲制度を樹立して立憲君主政體の國家たるに至つた。大化改新・鎌倉幕府の創設と共に世に日本史上三大改革といふ。(藤井甚太郎「明治維新史講話」井野邊茂雄「明治維新史」史學會「明治維新史の研究」岩波「世界思潮」及び富山房「家庭大百科事彙」改造社「社會科學大辭典」其他參照)

〔改革〕 カイカク。(一)改めかへること。(二)目的が國家の基礎に關せず、方法が憲法の範圍を超えず、且普通に行動の穩やかな政治上又は社會上の改革。

〔宣言書〕 個人若しくは團體が、思想なり行動なりの新しき態度・立場を天下に向つて發表する文書。古來大改革・大革命の行はれんとするや、必ず堂々たる理想の文字を連ねて廣く天下の人心に訴へてゐる。五ヶ條の御誓文は或意味に於て全く泰西の革命に見らるゝ宣言書とその性質を異にするものであるが、古き世界アンチキ・ワールドの根を斷つて、新しき殿堂を築かんとする生新鬱勃たる意氣と熱意に於ては、合衆國獨立當時の「獨立宣言」(一七七六)フ

フランス大革命の「人權宣言」(一七八九)と並べ讀むべきものであらう。

〔第一聲〕 最初の聲。

〔一括〕 イツカツ。一くゝりにする。

〔幾千載〕 イクセンザイ。幾千年の意。載はとし(夏では歳、商は祀、周は年、堯舜時代は載と) 書經 典典、朕在位七十載」

〔國是〕 コクゼ。舉國の是と認められた施政の方針。

一國の據つて以て指針とすべき大方針。

〔不磨の寶典〕 フマのホウテン。磨滅する事のない立派な書物。最も珍重すべき不朽の法則。後漢書 南匈奴傳「百世不磨」

〔起草者〕 草案の作成者。下書きを作つた人。

〔吟味〕 ギンミ。(一)よく調べ選ぶこと。詮議。調査。

〔二〕罪を調べ出す事。裁判。詮議。本朝三國志「うさんな風俗、敵方のしのびか、吟味せよ」

こゝは(一)

〔毫も〕 ガウモ。少しも。(毫は毛、微少をあらはす語)

〔渴仰〕 カツカウ。佛教で「渴者の水を欲するが如ざるやう計りなし、遂に億兆の君たるも唯名のみに成り果其が爲に今日、朝廷の尊重は古へに倍せしが如にて朝威は倍衰へ、上下相離るゝ事零壞の如し。かゝる形勢にて何を以て天下に君臨せんや。

今般朝政一新の時に膺り、天下億兆一人も其處を得ざる時は、皆朕が罪なれば、今日の事朕自身骨を勞し心志を苦め、艱難の先に立、古列祖の盡させ給ひし殿を履み、治蹟を勤めてこそ、初めて天職を奉じて億兆の君たる所に背かざるべし。

往昔列祖萬機を親らし、不臣のものあれば自ら將として之を征し玉ひ、朝廷の政總て簡易にして如此尊重ならざるゆへ、君臣相親しみて上下相愛し、德澤天下に洽く國威海外に輝きしなり。然るに近來宇内大に開け各國四方に相雄飛するの時に當り、獨我邦のみ世界の形勢に疎く、舊習を固守し一新の効を計らず。朕徒らに九重中に安居して、一日の安きを偷み百年の憂を忘るゝときは、遂に各國の凌侮を受け、上は列聖を辱しめ奉り下は億兆を苦しめん事を恐る。

く仰ぎ慕ふ」といふ語。深く信仰すること、あこがれたふこと、又その熱願。

〔明治天皇〕 次課参照。

〔神明〕 シンメイ。神。神祇。

〔誓はせ〕 はせは敬語。

〔詔書〕 セウシヨ。法律命令以外で天皇の國民に對する意志表示を詔勅といひ、それに詔書と勅書の別がある(詔書は法律ではないが、國務其の他に關する一種の規範となる) 詔書は皇室の大事又は大權の施行に關する勅旨で、文書によつて發し宣語即ち廣く國內に告げるもの、勅書は宣語せぬものをいふ。(尙勅旨發表の形式に勅語、勅諭。上諭がある。憲法五五條公式令の條参照)

〔維新の詔書〕 三月十四日の御宸翰を指す。

その内容御誓文と併せ學んで適當である。左の通り。

朕幼弱を以て猝に大統を紹ぎ、爾來何を以て萬國に對立し列祖に奉らんやと、朝夕恐懼に堪ざる也、尙に考るに中葉朝政衰てより武家權を専らにし、表は朝廷を推尊して實は敬して是を遠け、億兆の父母として絶て赤子の情を知る事能

故に朕茲に百官諸侯に廣く相誓ひ、列祖の御偉業を繼述し、一身の艱難辛苦を問はず、親ら四方を經營し億兆を安撫し、遂には萬里の波濤を拓開し、國威を四方に宣布し、天下を富岳の安きに置ん事を欲す。汝億兆舊來の陋習に慣れ、尊重のみを朝廷の事となし、神州の危急を知らず朕一度び足を舉れば非常に驚き、種々の疑惑を生じ、萬口紛紜として朕が志をなさざらしむる時は、是朕をして君たる道を失はしむるのみならず、從つて列祖の天下を失はしむるなり。汝億兆能々朕が志を體認し、相率て私見を去り公議を採り、朕が業を助て神州を保全し、列聖の神靈を慰し奉らしめば、生前の幸甚ならん。(神州社「明治新聖訓集」第一輯による)

〔明治元年〕 九月までは慶應の四年であつたので、御誓文の日附も明治ではない。

〔紫宸殿〕 シシイデン又はシシンデン。大内裏の正殿。もと朝賀・行事を行はれる殿舎であつたが、後世大極殿の頽廢後は御即位の大儀をも行はれる。承明殿内に在つて南面し、母屋の中央に玉座を設け、母舎と北廂の間に、聖賢の障子を立つ。南

階の前庭は儀式の行はれるところで、右に月華門左に日華門等の諸門がある。南殿、正殿ともいふ。

〔御す〕 ギョす。おでましになる意。

〔祖宗〕 ソソウ。始祖と中興の祖。又廣く現代以前の代々の君主をいふ。「東鑑」一、治承四年十月十二日「爲崇祖宗、點小林卿之北山、構宮廟、被奉還鶴岡宮於此所」

〔神靈〕 たましひ。靈魂。大戴禮「陽之精氣曰神、陰之精氣曰靈」

〔中外〕 内と外。轉じて國內と國外。史記 孝元「久結難連兵、中外國將何以自寧」

〔宣す〕 センす。のべる。告げる。

〔萬機〕 バンキ。(機はかなめ)。(一)種々の政務の樞機。政事上種々の要件。太平記「萬機百司の政不怠給」

(二)天下の政事。帝王の政務。朗詠「我后一日之澤萬機之餘」

ハハは(一)

〔公論に決すべし〕 天下の政事は輿論の歸趨するところに従つて決定せよ。因に輿論 (public opinion) とは社會の成員に生じた共通な意見や見解。但

し群衆心理の如く浮動的のものでなく、より公正な判断に基づくものとされる。輿論が問題となつて来たのは交通、通信機關が發達した近代社會に於てであつて、これは議會政治の發生と殊に新聞紙の發達に由來してゐる。而して、世往々にして猶、輿論の屢々不賢明なる事、又正確に反映し難き事を理由として、專制獨裁の昔を謳歌する者があるが、之は大いなる認識不足であつて、右の如きは、輿論を賢明ならしむべき教育の普及と、輿論の曲歪捏造を防止すべき言論・出版・結社の自由確立の絶對的必要以外の何もの理由ともなり得ない。

〔明治二十二年〕 二月十一日。

〔憲法〕 國家の組織及び作用を規定する根本規律である。これは國家最高の法律で、統治權の主體、客體、及び機關、作用の大原則を規定するもの故他の法律・命令を以て變更し得ない。日本の憲法は七章七十六箇條から成り、純然たる成文欽定憲法で、(一)天皇

(二)臣民の權利義務

(三)議會

(四)大臣・樞密顧問

(五)司法

(六)會計に關する諸規定及び

(七)補則から成つてゐる。

〔帝國議會〕 貴衆兩院より成り、貴族院は貴族院令の定むる所に依り、皇族、華族及び勅選議員を以て組織され、衆議院は選舉法によつて公選された議員を以て成立する。毎年召集され、その會期は三ヶ月を原則とする。凡て法律は帝國議會の協賛を経るを要し、兩議院の會議は公開する。

〔我が國の憲法發布並に議會召集までの経緯について〕 元年の御誓文にもかゝはらず國會開設までには種々なる経過があつた。初め明治七年副島種臣後藤象次郎、板垣大助、江藤新平等は民選議院設立の議を奉つたが、政府は時期尙早として許さなかつた。然し八年元老院を設けて立法院となし、大審院を置いて上告を許し、又地方官會議を開いた。十二年府縣會成立の頃から新聞紙漸く發達し民間の政治思想も次第に發達し、自由思想の發展と相俟つて、十三年には國會開設の請願となつた。越えて十四年、北海道官有物拂下に關する當

局の處置に對する民間の非難涌くが如く、遂に政府は輿論に従ひ、天皇は二十三年を期して議會を開設すべきを公にせられた。十五年伊藤博文は派せられて歐洲各國に憲法並びに諸制度を視察し、歸來長官として憲法起草の事に従つた。十八年には三條實美の辭職と共に太政官は廢せられ、博文を主班とする第一次内閣の成立。二十一年樞密院設置憲法草案審議。同年又、市町村令による地方自治制の樹立。二十二年、天皇は紀元節の佳辰をトして、萬民歡呼の中に帝國憲法を發布されたのである。翌年第一回の帝國議會の成立。日本はこゝに初めて近代國家の體制を備へて、東洋唯一の立憲國となつた。

〔帝國議會〕 テイコクギクワイ。

〔諮る〕 ハカル。意見をたゞくこと。相談。諮詢。

商議。〔此の會議を起し〕云々の「此の」は「諮る」までかゝる。

〔上代〕 上古ともいふ。國初より蘇我氏滅亡まで、即ち所謂大和時代にあたる。(一)大和平定、朝威の漸及

(二)儒教・佛教その他の大陸文物の輸入。

〔三〕聖徳太子の佛教文化、蘇我氏の専横及び没落
〔六四五〕と三期に考へ得る。――

但し本文では漠然と稱用してゐる様である。

〔祖宗以來の慣行〕 祝詞式大祓には「八百萬神等乎
神集集賜比神護護賜氏」とあり、聖徳太子憲法第
十七條には「大事は獨斷してはいけない、必ず衆
と興に論ぜよ」との意が記されてゐる。

〔上下〕 シヤウカ。上と下と。上に立つ者も下の者
も。

〔經綸〕 ケイリン。經も綸も治める、統治する。又
共に糸の意あり。糸を理めるに比して天下を營み
治めること。治國濟民。政治。易經上經「雲雷屯
君子以經綸」疏「經爲經緯、編爲綱編」

〔進歩〕 シンチョク。進みはかどる。

〔天職〕 天から命ぜられた職の意。天から與へられ
た使命。

〔官武一途〕 クワンブイット。

〔庶民〕 シ・ミン。もろもろの民。人民。衆民。書

經洪範
欽時五福、用敷錫厥庶民、また身分なき民。平
民。

あつて、酒の糟^{カス}。かす。轉じてよい部分を取り去
つた残り。

〔塵垢〕 チンコウ。ちりとあかと。有害汚穢なるも
のをいふ。

〔一洗〕 イッセン。すつかり洗ふ。又は一洗ひする。

〔乃至〕 ナイシ。(一)上下を擧げて中間を略する語
戰國策趙「天下之卿相人臣、乃至布衣之士」

(二)また。或ひは。且つ。

〔必須〕 ヒツス。是非必要なこと。

〔鎖國〕 國家が通商貿易其他一切の外國交通を禁止
して自營孤立の状態を嚴守する事で、いふまでも
なく江戸幕府三代將軍家光より幕末開港に及ぶ日
本の状態を指す。家光の鎖國令は島原亂後寛永十
六年(一六三九)に出で、要するにキリスト教弘
布を國勢に害ありと視た爲であつた。鎖國政策の
得失については、國運の進勢を阻害したといふ説
を、徳川三百年の泰平によつて眞の國民文化の醸
成に力があつたとする説があるが、之を大觀する
にその何れにも眞理ありといふべきである。然し
維新後新時代の日本が如何に泰西文明の輸入咀嚼
に狂奔せねばならなかつたかを顧みる時は、宗教

國文鑒 第二版 教授參考書 卷一……四〇三

〔主眼〕 主要點。眼目。めぼしい處。

〔それ〕 夫と書く。文章の始めに用ふる語。古事記
上「夫混元既凝、氣象未効」親輔集「それ人の才學
をみがき、文章を織れる家の集と名づけて世に傳
へたり」

〔日に就り月に將む〕 日日月月に進歩すること。日
進月歩。(就は成る、將は進む) 詩經周頌「維予小
子、不聰敬止、日就月將、學有緝熙于光明」

〔舊來〕 前からの。舊くからの。昔からある(悪い)
傳統などにいふ。

〔陋習〕 ロウシウ。いやしい習慣。(陋は見識が狭く
ていやしい) せせこましい舊套程の意。

〔公道〕 偏僻でない道。當然の理。公共の道理。

〔中樞點〕 チュウスイテン。中央の樞要なところ。
かなめの點。大事な箇處。

〔動もすれば〕 ヤヤもすれば。ともすれば。ややも
すると。枕「猶曇りて、ややもすれば降り落ちぬ
べく見えたるもをかし」

〔拘り囚れて〕 カカハリトラハれて。拘泥し束縛さ
れて。

〔精粕〕 ソウハク。孝經序「酒滓曰糟、浮米曰粕」と

改革後の歐洲各國が、啓蒙・革命・立憲・産業革命・
海外發展と、思想的に社會的に經濟的に、非常な
る進展、急激なる潮流の中にあつた三世紀を、鎖
國の状態で過した事は、精粕と塵垢以外多くの損
失を招かざるを得なかつたものである。

〔故慣〕 コクワン。故は古い

〔株守〕 シュシュ。守株とも。見識のないために何時
までも舊習を守つて變通を知らぬものを嘲つてい
ふ。昔宋に一農夫があつて、兎が株にふれて死ん
だのを見て、耕作をやめて株を守り、兎を得よう
とした爲に世の笑草となつたといふ故事に基く。

(韓非、五蠹) 王禕詩「乃知兎守株、殊勝虎穴探」

〔正視〕 セイシ。眞直に視る。正しい認識を得る。

〔濶歩〕 クワボ。鷹揚に歩む。大またに歩む。又
傍に人なきが如くに歩む。

〔皇基〕 クウキ。帝業の基礎。皇國の基礎。天神
記「雷神形を顯はして……今須く皇基を守るべし
と宣ふ聲は金色に」

〔振起〕 シンキ。振ひ起す。

〔殊更〕 コトサラ(一)わざわざ。故意に。萬葉「こ
とさらに衣はすらしをみなへし、さくぬの萩にに

ほひてをらむ。」

〔一〕とりわけ。とりたてて。別して。續後撰「こ
とさらに恨むともなしこの頃のねざめばかりを知
らせてしがな」――

こゝは〔一〕

〔吾人〕 第一人稱複数。吾々。

〔變革〕 變じあらたむる事。改革と同じ。但し最近
は革命の意に用ひられる事が多い。

〔朕〕 天子の自稱。(但し支那古代では我の意であつ
た。)

〔躬を以て〕 ミをモッて。自ら。親しく。

〔斯國是〕 コノコクゼ。

〔保全〕 保護して安全ならしめること。

〔衆〕 シユウ。「汝臣民」と同じ。億兆。

〔旨趣〕 シシユ。趣旨と同じ。

〔趣く〕 オモムク。歸向する。

〔指點〕 シテン。こゝだと指で示すこと。

〔羅針盤〕 ラシンバン。物體の方位、特に艦船の進
路を測定するに用ひる航海用機具。(ルネサンス時
代に發明され、所謂大發見時代を齎して地域的に
精神的に世界を擴大せしむるに力ありしもの) 轉
じて指針・指導原理程の意に用ひられる。

〔燈明臺〕 トウミウダイ。燈臺と同じ。航路標識の
爲め海岸又は島嶼などの便宜の地に高く築き、上
に光力多い燈火を點する塔。點じて行動標準の意
に用ひらるゝ事同前。次の案内標(みちしるべ)
も同様。

〔附〕 蘇峰氏は文末の餘白に「世或は五箇條御誓文
を以て一時政略的方便と云ふ者あり。是れ維新大
改革の大精神に接觸せざる徒輩の妄説のみ」と記
してゐる。

三〇 明治天皇の御遺物を拜す

一 教材研究

I 解題

作者 笠井信一 カサキ シンイチ 静岡縣の人、明治二十五年帝國大學法科卒業後、山形縣參事官を
振出しに、岩手・高知・岐阜・新潟・熊本等の警部長・書記官を経て、四十年岩手縣知事となり、更に静岡・
岡山の知事を経て、北海道長官になつた。後貴族院議員となつて、昭和四年七月歿、年六十五。

2 文意

明治天皇の御遺物を拜して、恐れ多い程御質素に御暮し在りし様、御自分のことは御考へなく、唯々國
家萬民の上を御心にかけてさせられた御平常を目のあたり拜し、非常な感激にうたれて、その拜觀の次第を
くはしく記したものである。物を尊んで節すべきを節し有用の事にのみ御用ひになるといふ大御心が、文
の到る處に拜察される。

3 節意

第一節 午餐に召され權殿参拜を許されたこと。(二二七頁十一行まで)

第二節 御學問所拜觀。(二三二頁二行まで)

第三節 別室に於ける御遺物の拜觀。(二三七頁十行まで)

1 別室の御遺物。

2 御愛用ありし御机。

3 御文房具の話。

4 獅子の毛皮を修理したまうた話。

5 ボール箱・紙袋の御利用の話。

6 皇室豫算御親裁の話と感想。

第四節 國民の覺悟。(終まで)

4 句章

(先月十七日)

大正二年一月十七日を指す。であるから大帝崩御後半歳を越えて居ない。御遺物拜觀を許され又權殿に参拜した作者等の感慨も生ま／＼しく深いものがあつたことが想像出来る。

(年々に思ひやれども山水を汲みてあそばむ夏なかりけり)

水に對して汲むといふ語を使はれたので、山地や海邊に避暑することを、山水を汲みて遊ぶと言はれたのである。御實感御實情の御製で大帝の御聲そのまゝがこの氣品ある三十一字になつたやうな氣がする。「年々に思ひやれども」とそのまゝに、「汲みて遊ぶ夏なかりけり」とそのまゝに仰せられてそこにわざとらしくは決してきこえない咏嘆が含まれて居る。

(出御遊ばすや否や「火を消せ」と仰せられる。)

何の理由を仰せられずたゞ「火を消せ」と仰せられたのである。こゝが奥床しい王者の氣品と景仰し奉るところであつて、凡人ならばこれになにか理由をつけないではすまされないであり、更に下品の人になれば、世人に良き行とみとめられ度いことが主なる目的でさういふことを言ひ行ふことがある。此御一言、臣下として心して拜承すべきである。

(桐火桶かきなでながら思ふかなすきま多かるしづがふせやを)

桐火桶かきなでながら、すき間多かる賤が伏屋を思ふかな、といふ所を、倒裝法を用ひられたのである。賤が伏屋では、すき間風がさぞ寒からうにと、思ひやり給ふ御心で、桐火桶かきなでながら、唯歌の言葉としてのことだけでなく、實際にさうでいらつしやつたといふのは、何とも恐れ多い次第である。この御製、前首と同じくきはめて自然な姿のあるところ却つて心持深く感ぜられる。

(テーブルの焼痕)

この焼痕一つも考へてみると吾々臣民の上にかゝる政務に御熱心の餘りのものである。だから大帝の御

質素な御生活を忝いと偲び奉る外に、吾臣民として切實なる焼痕なのである。

(何の皮でも宜しい)

こまかに至る御心である。臣下の困惑を察せられ事足ればそれでよいとの思召が充ちあふれてゐる御言葉であつて、實にみじかいけれどもさながら大帝の御氣息に接し奉る如き感がある。

(「此邊が大の皮です」)

なんでもなく書いたのであらうが讀者にはこの一句が非常に現實的にひびいて来る。讀者迄がその敷皮の前に導かれて立つて居るやうな氣さへして来る。自然に書いた、無技巧の技巧である。

(御製を御認めになる御詠草)

それが不用になつた紙袋であつたといふのは何といふ床しいことであらう。吾々臣民の人心は大帝の玉詠にいかにか深く、久しく導かれ育まれて居るか、又玉詠によつて大帝の御人格を永久に直接に仰ぎ奉ることが出来るかを想像するとき、この秀れたる御作を紙袋におしるし遊ばされたといふ事實をも忘れてはならない。それを忘れないことに依つて忝さが一入加はるのである。

(千萬の民とともにまたのしむにますたのしみはあらじとぞおもふ)

御製の次に本文の作者が説明して居るやうに、大帝は常に千萬の民のことを御軫念あらせられ、その御苦心は久しく長く且常住たえぬものであらせられた。であるからこの御製に犯す可らざる威嚴と興行があるのである。恐れ多い言葉であるが、見せびらかしが些もあらせられぬ。短歌の作品として實に必要

なるものを具備せられた。もし他の人がこれに類似のことを詠んだとしたら決してかう自然にゆかないので、そこに大帝の歌人としての大力量を拜する。一般臣民の歌の場合と同じくこの御歌も生活の背景がものを申して居るのである。「民とともにまたのしむに」の御詞「も」などは中々よく利いて一首にゆとりを與へて居る。

(國民の業にいそしむ世の中を見るにまされるたのしみはなし)

王者としての御感慨、さもあらうと拜承し奉る。「業にいそしむ世の中を」といふあたり御實感があふれて居る。かういふ歌は吾々の作歌することの出来ぬ内容であるが御心持は非常によく分る御歌である。一家の長上としても一家がそろつて事にいそしむやうに仕向けることはむづかしく、それに成功することとはたのしいものであるが、大帝は天下に對して仰せられるのであるから、この歌の心はゆめおるそかに思ふべきではない。

二 指導研究

明治天皇の御聖徳はどの方面に於ても人を感銘せしめるものが多いが、本課に於てはその御日常生活を偲び奉るべき御遺物について、もつと直接に大帝の御身邊にふれ得るのであつて、これこそ生きたる教訓である。文章は特に技巧もないが忠實に又謹嚴なる心持を以て綴られ、机とか敷皮とか硯とかいふもの描寫に於て人の心を打つものがある。具體的なものこそ人の心をとらへる。本課は抽象的教訓より一步

も二歩も出でて、讀者をして自己日常をつよく反省せしめるやうな力がある。質素と地味とは人の心を正しく健康にする。それが聖徳並なき明治大帝の御遺物の記事より導かれることは欣快である。
本課の敬語法は皇室に對する事物を扱つた文に非常に丁寧に使用されて居る。さういふ方面の用語法の指導としてもよい材料である。

三 參考資料

朝 日 の 影	寶文館編	明 誠 館
明治天皇聖歌聖徳	堀尾太郎	明 誠 館
舉 國 哀 悼 錄	村田勝太郎	日 本 書 院
今上陛下御文徳錄		文 祿 堂
雲 井 の 雁	篠山克己	
聖徳を仰ぎて	明光會編	龍 吟 社
世界に於ける明治天皇	望月小太郎	通 信 社
明 治 天 皇	島内俊衛	靖 就 社
明 治 聖 代 志	高桑駒吉	大日本實業協會
明 治 聖 徳 志	大平 槻	春 江 堂

明 治 大 帝	高桑駒吉	海國公論社
明 治 大 帝	澤田忠次郎	大日本軍人教育會
明 治 大 帝	帝國教育會館 教育史料部編	大 同 館
明治大帝御逸話	北村治三郎	内外出版協會
明治大帝御偉業史	藤崎孝宗	土 屋 書 店
明治大帝御聖徳錄	報 國 會	大 正 書 院
明治大帝御傳記	小松悦二	大 正 書 院
明 治 大 帝 史	笠原幡多雄	公 益 通 信 社
明治帝御聖徳	猪股達也	福 岡 書 店
明 治 天 皇	坂本辰之助	至 誠 堂
明治天皇御聖徳	土方久元	鐘 美 堂
明治天皇御聖徳集	伊東祐亨	
明治天皇御聖徳に就て	皇徳奉贊會	
御 聖 徳 餘 錄	石川景藏	
明治天皇御傳	須藤光暉	金 尾 文 淵 堂
明 治 天 皇 史	四元内治	國 文 社

(三) 明治天皇の御遺物を拜す……四二

明治天皇聖德奉頌講演集 國民新聞社編

同 東京市役所編

明治天皇 御逸事集 明治神宮社務所編

明治天皇と教育 三上 参次

明治天皇の御聖德 徳富猪一郎

明治天皇の御事蹟 石黒 忠恵

明治天皇陛下 モリス 著 水田榮確 譯

民友社

博文館

國 譯

〔明治天皇〕 第二百二十二代の天子。御名睦仁。孝明天皇第二皇子。嘉永五年（一八五二）降誕。慶應三年九月御年十六を以て踐祚、四年八月即位の大禮。九月明治と改元（周易に「聖人南面而聽天下、嚮明而治」又孔子家語に「長聰明治五氣、設五量、撫萬民、度四方」とあるによる）。明治四十五年七月十四日御不例、七月三十日崩御、寶算六十一。伏見桃山陵に奉葬。官幣大社明治神宮に昭憲皇太后と共に奉祀。天皇は幕末維新國歩多難の際に御

位を繼ぎ給ひ（前課参照）、睿聖英武の資を以て千古不磨の宏業を遂げ、國是の確立、文化の刷新に大御心を注ぎ、東洋の平和と世界文明の促進を念とし、國威發揚國力充實、新日本建設を完成し給うた古今獨歩の明君であらせられた。御治世十六年、此の間日本は、内には七百年に亘る武家政治の後を承けて立憲制度の確立を見、外には日清、日露の二大戦役を通じて一躍國際列強の間に重きをなし、泰西の先進諸國と相伍して恥ぢぬ國力の

基礎をかためる事が出来た。尙天皇は御繁務の傍ら敷島の道に親しみ給ひ、御製十萬餘に達する。

〔先月十七日〕 大正二年一月十七日のこと。この日地方長官一同は、明治天皇の御遺物を拜観することを許された。

〔地方長官〕 地方官の長をいふ。即ち府縣知事、北海道長官、臺灣總督の類。

〔権殿〕 ゴンデン。假殿と同じ。神社の改造、又は修復の時に、神體を假りに鎮座する所。

〔皇靈〕 クウレイ。天皇の御靈。

〔蓋し〕 ケダシ。恐らく……であらう。（英語の Perhaps に當る）。

〔桐の間〕 キリのマ。御襖に桐を描いてある御室。〔御學問所〕 一に表御座所。天皇陛下の政務をみそなはす所。

〔萬機〕 天下の政事。帝王の政務。

〔御親裁〕 ゴシンサイ。親しくおとりになる（裁はさばく、處理する）。

〔徳教〕 道德上の教。こゝでは教育勅語・戊申詔書などを指す。孟子「沛然徳教溢四海」

〔大意〕 大きなおきて、のり。例へば憲法。

〔膺懲〕 ヨウチウ。無道の夷狄をうちこらすこと。詩經「戎狄是膺、荊舒是懲」（本に膺懲の師云々とあるは、清・露二國の非道を正さんが爲に征伐の大軍を發せられたことをいふ）。

〔宏謨〕 クウボ。宏大なる治世の計畫。宏圖。次の雄圖も同意。袁宏 三國名臣贊「遠贊宏謨、匡此霸道」。

〔瀟酒〕 セウシャ。一さわやか。さつぱりとしたこと。朗詠「露簾清瑩迎夜滑、風襟蕭酒先秋涼」。

〔二〕 俗氣の脱けて淡泊なこと。さつぱりと垢抜けたしてゐること。杜甫詩「宗之瀟灑美少年」。

〔檜〕 ヒノキ。松科に屬する常緑喬木。本州の本會以南から四國、九州、尾久島に亘り、山地に繁茂する。直立三十米内外。全長の三分の一乃至二分一以上から枝が繁り、葉は小さい鱗片狀で全部莖に密接し殆んど開かない。發育速く、約二十年でよく柱材となる。材緻密光澤あり、帯黄白色。種種なる方面に用途が廣いが、就中日本風の上等建築に愛用せられる。

〔白木造〕 シラキヅクリ。素地のまゝ塗らぬ木で造ること。又その建築。

（三〇） 明治天皇の御遺物を拜す……四三

〔絨毯〕 ジュウタン。舶來の花毛氈の一種、地合が荒く厚く、敷物とする。

〔褪める〕 サめる。色があせ衰へること。

〔年々の御製〕 今年こそは、山青く水清きあたり避暑をしたものだど毎年心にはかけながらも一度もさういふ年もなくて、年々の夏を過ごして來たのである、との御意。

〔侍従〕 ジジュウ。侍従職の職員。宮内省官制第二十四條に「侍従ハ十六人奏任トス側近ノ事ヲ分掌ス。」とある。

〔滿洲〕 Manchuria 支那の北東部を占む。東はシベリヤの沿海洲、南は朝鮮に接して黄・渤の兩海に、西は蒙古及び直隸省に、北はアジャ露西亞の外、バイカル州・黒龍江州に界する。其の南部は日清・日露兩戰役の古戰場が多い。昭和六年秋以降の「滿洲問題」以來「滿洲國」獨立し、次第に諸方の承認を得ようとしてゐる。我國では昭和七年九月十五日に列國に先立つてこれを承認した。

〔桐火桶の御製〕 「桐火桶」は桐製の丸火鉢。「しづが伏屋」は賤しい民の矮屋。あばらや。

一首の御意は、「かやうに九重の奥深く火鉢にあ

所となり、同三十一年二月青山離宮と稱せられ、大正二年八月からは、昭憲皇太后の御所であつたその一廓は今皇太后陛下・秩父宮殿下の御座所である。

〔御出で遊ばされた頃〕 お住ひになつた頃。

〔ホワイトシャツ〕 頭註にある通り元來白無地の下着をいふのであるが、これが日本化されて「ワイシャツ」と略稱される中に、色物でも柄物でもこの名になつてしまつた。

〔ボール箱〕 馬糞紙で作つた箱。

〔上奏〕 帝國議會、會計検査院は、事實又は意見を天皇に奏聞し得る事を憲法によつて認められてゐる。

〔主務省〕 その事務を主管する省。例へば教育方面に關するものなら文部省の名を記して上る。

〔隨時〕 その折々。何時でも。

〔詠草〕 和歌の草稿。

〔御歌所〕 オウタドコロ。宮内大臣の管理の下に、御製・御歌及び御歌會に關する事務を掌る所。職員は所長一人、主事一人、寄人七人、參候十五人及び録事である。

たつて寒さを凌いでゐるにつけても、すきまの多いあばらやに住んで眠る貧民どもはこの夜寒をどんなにして過してゐるだらう。」と窮民の上をあらはれませ給ひし有難い御製と拜察し奉る。

〔今上天皇〕 大正天皇。第百二十三代。御名嘉仁。

明治十二年八月三十一日御降誕。御生母柳原愛子。

御幼名明宮。二十二年立太子、四十五年御踐祚、

大正と改元、四年御即位、十年皇太子殿下(今上)攝政御就任、十五年十二月二十五日崩御。御壽四十八。

〔御軸物〕 オジクモノ。御掛軸をいふ。

〔羅紗〕 ラシヤ。(ポルトガル語 Raza から出た語) 羊毛で薄く密に織つた一種の毛織物。

〔鏡張り〕 カガミバリ。机の表の板などを、四方の縁を残して、中を羅紗で鏡板のやうに平坦に張ること。

〔毛尖〕 ケサキ。

〔禿ぶ〕 筆先などが磨れて減ること。

〔慙愧〕 ザンキ。心にはぢ入ること。

〔青山御所〕 東京市赤坂區にある皇室の建物、赤坂離宮と同じ廓内にある。明治七年英照皇太后の御

〔聞し召す〕 キコシメス。(一)聞くの敬語。

(二)飲む・食ふ・行ふ・治む等の敬語。

(三)聞き入れるの敬語。

(四)一杯くふ。うまうまとたまされる。こゝでは統治し給ふ事をいふ。

〔反故〕 ホゴ。ホゴ。書畫などを書いた紙の不用になつたもの。

〔皇室費〕 皇室經費のこと。皇室の經費に充てるために毎年國庫より支出する金額。

〔祭祀〕 サイシ。まつり。

〔冗費〕 無駄な費用。

〔一天萬乘の大臣〕 天下を治め給ふ大臣。支那の古は、天子は兵車萬乘を出すべき畿内を有したから、天子のことを萬乘といつた。

〔御下げになる〕 用を辨ぜぬとておとりかへになること。

〔行幸〕 ギャウカウ。天皇のおでましをいふ(幸とは行幸先の住民等が金品など賜はり、幸を得るといふ事よりいふ)

〔千萬の御製〕 樂みは色々あるが、多くの民(全國民)と偕に楽しむ樂しみに勝る樂しみは、この

世の中にあるまいと思ふとの御意。

〔御心づくし〕 御努力又は御配慮。

〔隆々〕 勢のさかんなるさま。解嘲「炎々者滅、隆隆者絶」

〔一等國民〕 世界大戦までは日・英・米・獨・佛・露・埃・伊の八箇國が世界の一等國と認められてゐたが、大戦後獨・埃・露三國の疲弊混亂のため今は日・英・米・佛・伊の五箇國を以て一等國とする。勿論「強國」程の漠然たる稱呼で觀點のとり様で、例へ

國文鑒 第二版 教授參考書 卷一……四六

ばドイツの如き依然として一等國であらう。

〔國民のの御製〕 句意参照。

〔服膺〕 フクヨウ。(膺はむねの義)心に留めて忘れないこと。教育勅語「朕爾臣民と俱に拳拳服膺して」

〔日の本のかため〕 ヒノモトは日本を美しく呼んだ語。かためはかたくたしかにすること。

〔應分〕 それ／＼分に應じた。

三 鵝 鵝

一 教材研究

1 解題

作者 小笠原長生 ナガサハラ ナガナリ 慶應三年十一月肥前唐津に生れ、明治六年先代長國の家督を相続し、同十七年子爵を授けらる。同二十年海軍少尉候補生となり累進して大正七年海軍中將に任ぜられた。其間海軍軍令部出仕東宮御學問所幹事、宮内省御用掛、文部省教科書調査員、學習院御用掛等を仰せ付けられ、其の後宮中顧問官に任ぜられた。曩に日清・日露・日獨の各役に從軍し功勞少くなかつた。又、文學に長じ、鳳翼・鐵櫻、又は金波樓主人と號し著書少なからず「東郷元帥詳傳」「海戰日録」「海運史録」「海上權力史」「佃熊手」「觀音物語」等の著がある。本文は最近の「撃滅」から採つた。

2 文意

戰場にあつて母を思ひ、子を思ふ島村司令官の書簡の中から、艦長の注意に依つて不思議な命を助かつた鵝鵝の事を取り出して話したもの。

- 第一節 島村司令官の書簡。(二四〇頁十二行まで)
 第二節 右の書簡の中に出てゐる鸚鵡の話。(終まで)

4 句意・語意

(拙者は語らざること例の如し)

軍務の重きを解し、功を誇らざる武人の教養を深く體してゐる島村司令官の、奥ゆかしい心根がうかゞはれる句である。この句と、二四二頁八行の「滅多に笑はない司令官」といふ作者の説明とは、並べて味はふべき句である。

(思はず眼頭を熱うせしむる)

これは連日連夜國家の前衛として故國を外にしてゐる軍人の衷情に共鳴し得る、作者の優しい感情である。

題名は「鸚鵡」であるが、本課の主眼は、島村司令官の母堂と令息に對するやさしい心づかひと、それを敏感に推察して「眼頭を熱う」した作者の共鳴とである。

(さてこの鸚鵡といふのは)

戦場たる艦上からの書面に、似付かない鸚鵡の話があつたので、そしてその鸚鵡が生き残つて凱旋した

戦士の運命を代表してゐるやうにも見られるので、作者はそれについての説明をする氣持になつたのである。

(萬年青)

鸚鵡の運命と萬年青の運命とは戦場に出た戦士の運命の象徴とも見られる。又、あれ程の激戦のうちにも、こんな有閑人士の玩具とも見るべきものが置かれてあつたといふことも、考へさせられる事實である。そして最も大切なことは、司令官ともあらう人が、鸚鵡ごときの運命を云々し、又作者が心もない萬年青の如きを云々してゐることである。長期間に亘る海上艦上の勤務にあつて、明けても暮れても荒い風波を浴び、煤煙を咽んで共同戦線を張つてゐる将卒は、死なば諸共、何時か親子の如き親しい情愛を感じるやうになり、それが引いては鳥、植木の如き部類にまで働きかけるやうになつたのである。

(滅多に笑はない司令官)

書簡の中の「拙者は語らざること例の如し」といふ司令官の語と並べて味はふべき句。この二句に依つて司令官の、軍機に對する慎重な態度と、重厚な人格と戦場にある將軍の緊張した生活とをうかゞふことが出来る。皇國の興廢をかけた一戦に大勝利を得た欣快と安堵がこの笑はざる司令官をして大笑せしめたのである。この間の消息が甚だ面白い。

5 候文體について

本文に表はれた候文體の特徴については、次の諸語の説明をしたらいと思ふ。

申候(申し候)

存候(存じ候)

察し候

致し候

動詞十候。

候へども

候のみ

候事

候十助詞又ハ名詞。

無之——有之

可被下

可被成

(遊被)

漢文式表記

拙者儀) 書簡用語。

二 指導研究

△本課の題は「鸚鵡」ではあるがまづ第一に心を惹くものは司令官の書簡中にある母と子に對する孝心慈愛心である。これが戰の暇を以て書きつゞられたこと、緊張せる心のうつくしい發露であることを思ふとほゝえましいものがあると同時に心に沁みる或物が存在する。人間の眞誠なる心はつねに清音を發するのである。沈没の敵艦より三百餘人を救出したのは「母上様の御喜び被成候事」と思ひ、鸚鵡の話は「初

太郎のお伽嘶までに」と書きしたゝめた武人の胸懷、これがあの激戰の直後艦上での筆であることを思ふと、作者のみならず誰人も眼頭を熱くするであらう。女生徒には特に、母、子に對するこの武人胸懷を沁々とわかしめ度い。こゝにうごくよわよわしからざる傷まざる而も深く湛へた人間慈愛の心を汲みしめ度い。これはやがて妻として、母として立つ折の情愛の泉となるであらう。

書簡中に出る鸚鵡についての説明はほゝえましい話である。艦上の軍人たちがしたしんだ鸚鵡を怪我させないやうにとて安全な場所に置いたこと、それを知らぬ鳥は、戰が終つて大勝利にかゝやく武將に向つて「馬鹿！馬鹿！」とやつた。そして笑はざる語らざる司令官を大笑せしめた。身命を賭した戰中に小鳥を勞はつたり、戰をはつて小鳥の前で歡笑する趣は戰場逸話として快いものである。而もこの小鳥は宮家に獻上せられ、彈丸の下に碎け散つた萬年青も復活したといふ後日談も人の心をなごやかにせしめる話である。味讀せしめ度い點である。

三 參考資料

○明治三十九年五年二十七日以來、東郷聯合艦隊司令長官から政府に通報した日本海々戰の日本公報

第一 (五月二十八日着電)

敵艦見ゆとの警報に接し、聯合艦隊は直に出動之を撃滅せんとす。本日天氣晴朗なれども波高し。

第二 (二十九日着電)

聯合艦隊は本日沖の島附近に於て敵艦隊を邀撃し、大に之を破り敵艦少くも四隻を撃沈し其他には多大の損害を與へたり、我艦隊には損害少し、驅逐隊水雷艇隊は日没より襲撃を決行せり。

第三 (二十九日着電)

聯合艦隊の主力は二十七日以來殘敵に對して追撃を續行し、二十八日竹島附近に於て敵艦「ニコライ第一世」(戰艦)「アリヨール」(戰艦)「セニャーウイン」(裝甲海防艦)「アブラクシン」(裝甲海防艦)及び「イズムルード」(巡洋艦)より成る一群に會して之を攻撃せしに「イズムルード」は分離して逃去せしが他の四艦は須臾にして降伏せり、我艦隊には損害なし。

捕虜の言に依れば、二十七日の戦闘に於て沈没したる敵艦は「ボロヂン」(戰艦)「アレクサンドル第三世」(戰艦)「ヂェムチウグ」(巡洋艦)外三隻なりと云ふ。

捕虜海軍少將ネボガトフ以下約二千。

第四 (三十日午後着電)

五月二十七日午後より翌二十八日に互り沖の島附近より鬱陵島附近までの海戦を「日本海海戦」と呼稱す。

第五 (三十日午後着電)

聯合艦隊の大部は前に電報したる如く、一昨二十八日午後竹島附近に於て、敗殘敵艦隊の主力を包圍攻撃して其降伏を受け追撃を中止し之が處分に從事中午後三時頃更に南西方面に敵艦「アドミラル・ウシヤ

ーコフの北走するを發見し、磐手・八雲は直に之を追撃し、先づ降伏を勸告せしも敵之に應ぜざりし故午後六時過已むを得ず之を撃沈し其の生存者三百餘名を救助收容せり又午後五時北西に敵艦「ドミトリードンスコク」(これよりは第二戰隊驅逐隊、水雷艇隊の活躍の報告や、詳細をきはめたれど本課に關係うすき故省略す)。

語 彙

〔戦闘〕 所謂日本海々戰。明治三十八年五月二十八日の戦闘。

〔東郷大將〕 平八郎。正二位大勳位功一級、伯爵、元帥、海軍大將、議定官、日本海々戰當時の聯合艦隊司令長官として「東洋のネルソン」といはれる人。弘化四年鹿兒島に生れた。少時航海操艦術を學び、戊辰の役には北越奥羽に轉戦して功あり。明治四年海軍研究の爲英國に留學。日清の役には浪速艦長として第一遊撃艦隊の先鋒となり偉功を奏す。後常備艦隊・舞鶴鎮守府各司長官に歴任。日露開戦と共に聯合艦隊に長として、東航萬里の露國東洋艦隊を對島の沖に全滅し、戦局を決せしめた。役中大將に昇進、四十年偉勳を以て

大勳位功一級を賜り特旨を以て一躍伯爵を授けられ、次いで元帥府に列せられた。後更に海軍々令

部長・軍事參議官・東宮御學問所總裁に任ぜられ、現在は議定官である。性寡黙、世にサイレント・アドミラル(沈黙の提督)の稱がある。

〔拙者〕 セツシヤ。自稱代名詞の一。私。小生。拙。

〔儀〕 (一)禮式・儀式、

(二)法則。定め。

(三)ことから。わけ。誦仲光「只今參る事、余の儀に非ず」

こゝは(三)

〔別して〕 とりわけ、格別、特に。

〔閑〕 ヒマ。用がない(碌な仕事もしないと謙遜し

てゐる。

〔空前〕 それ以前に嘗てないこと。又その物事。
〔絶後の對〕

〔生來〕 セイライ。生れてからこの方。いままでを
通じて。

〔磐手・八雲〕 イワテ・ヤクモ。

〔敵艦〕 露軍の海防艦アドミラル・ウシヤークフ(艦
長ミクルフ大佐の健氣なる行動や我軍の救助作業
については「撃滅」四〇三頁以下參見)

〔川島令次郎〕 海軍大將、宮中顧問官、東伏見宮宮
務監督。元治元年石川縣に生る。海軍大學校卒業
後諸官に歴任して中將に陞り、大正十三年後備役
となる。この前より現官にある。日露・日獨の兩
役に功あり、功三級金鵄勳章を賜り、勳一等に叙
せられた。

〔鸚鵡〕 アウム、攀禽類鸚鵡科の一鳥。上嘴短大、
先端内へ曲り、舌は肉質で厚く、よく人語を真似
る。色彩は美麗なものが多く、長大な尾を有する
もの、羽冠のあるもの、常に羽に粉を粧つてゐる
ものなど多種類あり、形も大小色々あるが、多く
は森林・藪・草原等に棲み、樹木の空洞や岩壁の間

隙を利用して營巢繁殖する。名稱は或はアウム或
はインコと區々であるが、現今多くの鳥商はイン
コと呼ぶ。因みにアウムに物真似を教へるには、
各鳥の特長に合致する言葉を選んで仕込まねばな
らぬ。(老鳥は覚えが悪いから若鳥の中にする要あ
り)

先づよく馴らしておいて之を相當の籠に入れ、水
や食物を充分に與へ、周囲の雑音を少くし、靜か
な室に移して明瞭な言葉で教へる。性質のよいも
のは二週間も経てば少しづつ覚え、一ヶ月もすれ
ば、言葉の大體を覚える。

〔公室〕 公務をとる室、官職に備はつた室。

〔好伴侶〕 よい道づれ、相手。

〔失笑〕 ふき出して笑ふ。

〔初太郎〕 手紙の主島村大將の令息。

〔御伽噺〕 オトギバナシ。(一)人のつれづれを慰め
る話。

(二)幼兒に聞かせる傳説、口碑等から出た娛樂的
な話。

〔面倒ながら〕 傳言を依頼してゐる氣持。(一)書斯
の如く)にかゝるのではない)

〔前書〕 ゼンシヨ。前述の内容。

〔島村司令官〕 速雄。安政元年高知に生る。兵學校
を卒業し、英國留學、日清役には大本營參謀であ
つた。日露戰爭當時は少將、第二艦隊司令官、第
四艦隊司令官として偉勳を立てた。大正四年大將
に進み、五年男爵を與へられた。後佐世保鎮守府
司令長官、海軍教育本部長、軍令部長を歴任、九
年軍事參議官となり、十二年歿、年六十六。元帥
に列せられた。

〔眼頭〕 メガシラ。左右の眼の、鼻の方へ寄つたは
し。めもと。

〔またとなし〕 またなし。二つとない。この上ない。
たぐひなし。枕十二上達のまたなきにもてかし
づかれたる妹ひとりあるばかりにぞ

〔愛でられ〕 メでられ。愛され、いつくしまれ。

〔もごもご〕 むぐむぐと同じ。物言ひたげに、又は、
齒のない人が物を噛む時口を動かす様。浮世風呂
「口をむぐむぐしながら」

〔謀將〕 バウシヤウ。智謀勝れた將軍。島村司令官
等を指す。

〔徒奴〕 ヤツと訓ませである。三人稱の卑稱。

〔水線〕 水面が艦腹に接する線。

〔右舷〕 ウゲン。右側のふなばた。

〔萬年青〕 オモト。百合科萬年青屬の多年生草本。
地上莖を有せず、大披針形全縁の葉は地下莖から
叢生し、尺餘に達し、革質である。春日葉間より
數寸の花莖を抽出し、太い楕圓形の穗狀花序をつ
け、淡綠色の小花を密生する。實は豆大の小果で
ある。我國の暖地に自生するが、古來觀賞植物と
して専ら培養される。種類が多い。

〔曇みかく〕 續けざまに荒々しく爲すこと。今宮心
中「眞向を四つ五つ曇みかけてくらはする」

〔辱うす〕 カタジケナうす。忝うする。惠をうけて
謝するに餘りあること。源朝盛「身に餘るまでの
御志のよろづにかたじけなきに」

〔凱旋〕 ガイセン。凱は戰勝時の奏樂、旋は歸るの
義。戰ひ勝ち凱歌を唱へて旋ること。蘇軾文「陛
下可_レ得而知_レ者、凱旋捷奏。」

〔高輪御殿〕 高輪御所のこと。東京市芝區南部にあ
る。常宮・周宮兩内親王殿下が御婚嫁前に御住居
遊ばされた御殿。

〔常宮〕 ツネノミヤ。頭註參照。

〔周宮〕 カネノミヤ。同前。

〔内親王〕 ナイシンノウ。天皇又は前代の天皇の四世以内の直系卑屬たる皇族女子に對する敬稱。

〔天壽〕 テンジュ。天然の壽命。定命。

〔剝製〕 ハクセイ。動物の皮を剥ぎ皮の裏に藥品を塗り、中に綿などを填めて縫ひ合せ、全身を生きてゐる時と同じ様に製作すること、又そのもの。理科の標本等による。

〔牛蒡抜き〕 ゴバウヌキ。太く長いものを一氣に容易く抜きとること。

(以上本文)

〔仁者〕 ジンシャ。仁の道に至つた人。道德の完成した人。

〔熊澤蕃山〕 江戸時代の儒者。名は伯繼字は了介。

息游軒とも號す。中江藤樹に師事し陽明學を修め、備前侯池田光政に仕へ、經綸を行つたが、通世の心を起して、三十八歳で辭任し、京都に退き雅樂を學び國典を習つた。就いて道を問ふ者多く

國文鑒 第二版 教授參考書 卷一……四六

幕吏の嫌疑をうけて、芳野・矢田山・古河と轉住。貞享四年内政改革の意見書を上つて幕府の忌諱に觸れ、又時事を語らず幽囚に遭ひ、元祿四年歿。年七十三。著に集義和書、集義外書外三十餘種。政治の才に長け時務に通じた思想家であつた。

〔克く〕 ヨク。能と同じ。なし得る。

〔小物〕 小事。

〔遠慮〕 遠き慮り。遠大の計畫、

〔忽〕 ユルガセ。いゝかげん。等閑。

〔佐藤一齊〕 江戸時代の儒者。名は捨藏、別に愛日樓、老吾軒と號す。安永元年生。寛政四年大阪に出でて中井竹山に従ひ、更に京都の皆川淇園に就いたが、五年江戸に來つて林信篤の門に入り、初めて儒を業とした。文化九年藩主岩村侯松平氏の老臣となり、天保十二年幕府儒官を徵するや招かれて昌平齋に住し、その名天下に周く、門に入る物無數に上つた。安政六年卒、年八十八。著、愛日樓文詩・周易欄外書、言志錄、大學摘說等數百卷。

三 雲萍雜誌抄

一 教材研究

1 解題

作者 柳澤洪國 ヤナギサハ キエン 名は里恭といひ大和藩の家臣であつた。徳川時代の儒家で、祇園南海を師として儒學を學び、和漢混合文をもよくし桃園天皇の寶曆八年に歿す。年五十三、その著書「雲萍雜誌」は和漢混合の隨筆文である。本課は之から採る。

2 文意

農夫の茶の湯をならはんとして思ひ止つた話、某村長の句の意味について作者と鑑賞者に趣味の廣狹のあつた話。

3 節意

第一節 江戸葛飾の村長と茶湯。(二四七頁三行まで)

第二節 某村長の五月雨の句の話。(終まで)

4 句意

(心を配り茶を點てて)

入念に手前を盡くして茶をたてたことをいふので別に難語ではないが、「心を配り」といふ語には茶をたてるときに静寂の間に在つて一舉一動をおろそかにせず、客に對しては敬をつくす、その消息をよく云ひあてて居る語であることに注意し度い。

(われ村長の身として)

この心持が後に農夫の本業を忘れようとした心の基になつて居る。村長は全國いくらもあらう。村長の身分位は「茶を知らぬ」とそこで云ひ切つても恥しくもなんともない、むしろ當然といふべきものを、何人にもある見榮がはたらいた。こゝがそもそも危険な道への誘ひである。見榮といふ蟲は吾々の心中に常に在つて質朴純粹なるべき心を蝕むものである。

(このたびは菓子を取りて食ひまた茶を残らず飲みて)

村長の仕草がみえるやうな句である。田舎人の無骨な手つきが、飲みふりがさながら語氣にあるやうだ。一行次の「我等はもはや澤山下されたり」といふ村長の答もそれと趣を同じくする。困り抜いてかう云つた村長の様子はむしろ正直で好感が持てる。

(日頃に似氣なき不見識)

農村の村長としてはよくものに通じ達識であるのにどうして茶の湯などのことについてさやうに迷ひ不見識になるかといふ言葉で訓誡の言としてかなり手きびしい。

(茶はもと隠遁の手すきびにして、その道日用に足れり)

茶にはこゝにいふ丈の本質に限らぬのであるが、その茶の奥儀本質を知らぬのでは勿論なく、村長に對してまづ手近な自分の生業が大切であることを訓す爲めに茶の用を限定して云つたのである。茶の用にもこゝに洪園のいふ如き方面だけに墮ちたことはこれも事實であつた。

(村長茶道を知らざるが故に、耕耘收藏時にたがはず)

これは詭辯でなくて事實を述べたのであらう。本業以外のすべての風流韻事に淫することを「茶道」に依つて代表せしめ、これを罵倒して農村に於ける耕耘收藏の正しかるべきを説いた。末を排して本體をあきらかにしたのである。

(わざわざ御使の消息を賜ひて)

わざわざ御使をさしつかはしたる消息を下されたのである。「年中の雨」の一句のために斯の如くするのは風流のわざまことにすきの至りである。そこで村長も感激して「京へも出づることのあらんに」といふ文句にも係らず、わざわざ上洛した。この邊が太平の世のことといふだけでは解決つかずやはりすきの至りであつて大變面白い。

(「面白く覺ゆるなり」とて入り給ひぬ)

わざわざ使を遠國に出し、又一方はわざわざ遠國より出て來ての對話である。「風流の面目」と村長はいひ、「いかなる故事ありて」と大納言はいふ。問答ゆゑしげであつたのに村長の答をきいた後の大納言はいかにも素氣ない。「面白く覺ゆるなり」と一言、遠來の客をおいて奥へ入つてしまった。これは失望の甚しかつたのであらう。しかし村長の答に對してそれは不可だといふわけにもゆかず、又一方から考へれば風雅の道に於ては、理解不理解もこゝ迄懸隔してしまへば説明の限りでないからかう云つたのもあらう。とにかく大納言の失望の趣が分るやうである。「くらべ」「たぐへ」「かこち」「たとへ」と變化させて五月雨を春夏秋冬の雨にむすびつけたのも一寸面白い技巧である。

二 指導研究

第一の話は本來の生活を忘れてはならぬといふ教訓である。村人たちが茶に招ぜられて困り切るところや、かへつて來て村長が茶の道を乞ひに來て、それを適切な言でさとところなど特に精彩があるといふのではないが目前に見る如く書いてある。そしてこの教訓は村長に止らず萬人に通すべき心理である。作者も又この村長をさす文句を書く折は、村長にかう云つたといふ話をかく氣持ではなしに、多くの人に向つて云つて居るのであらう。何人も足許を氣づかねば駄目である。微塵も見榮の心があつては自己本來の面目を失ふものである。正直なる心はかくれて虚偽にみち、純粹性は蔽はれて邪曲にみちた行をやるやうになる。茶を知る。もとよりよき事である。たゞ知らなければ他人に恥しいといふやうな第二義的なものでは仕方ないのである。自分の境地を失くしてはならないのである。

第二の話は趣味が某大納言と某村長間に大いに共鳴したつもりが、實は大變差違があつたといふ話である。文學作品に於ては一つのものに對してこれを解釋する人によつて深淺の差を生ずることがある。文學には尺度なき故、一人ぎめより外ない。だからその一人ぎめをする場合は高い程度に在るやうに自己の力をやしなふべきである。この話はさういふ意味からみて甚だ面白い。同じ句を一は常識的に一はもう少し高く風雅的にみて居たのである。それで一は雲の上まできこえけむことゝして恐縮してよろこび、一はその實をきいて、思つたのとは違つて居たと云ふ。この話によつて吾々は自分といふものゝ分ることが大切であり、吾々は自分の分らないためにこの村長の如きつもりで生きて居ることが多いことを考へさせられる。

この文章平坦明瞭であつてよい味ひがある。話などを發表するには手本になる、主として對話で出來てゐるがその對話がきはめて巧みに進行してゐる。一種の擬古文であるから「ぬ」とか「き」とか助動詞の説明なども必要であらう。

いかにして飲むべき

いかばかり迷惑すべき

聞えけんこそありがたけれ

いかなる故かありてかく申しし

反語・疑問・係結の場合の助動詞助詞のはたらきを注意したい。

その口必ず飢えぬべし。

五月雨に降りつくしぬべきと……。

この「ぬ」は完了の意味よりはなれて強勢の意味になつてゐる。これは一年生には少し面倒であるが注意出来れば猶更よい。

三 参考資料

左の文は同じく雲萍雜志中の一節であるが茶についての興味ある話であるから抄しておく。

茶道を好むもの、他の手前をも辨へなくわが習ひたる義のみ心得これこそはわが流になくて叶はぬ品なりなどと無益の器を高料にもとめ飾おきたるはふる道具店にもひとしく見るさへなかくにうるさかるべし。又利休居士が詞にも貴き價の器物を愛するは心利欲に走るがゆゑなり。缺けたる摺鉢にても時の間に合ふを茶道の本意とすといへり。數寄屋咄といふものにも主人家居と道具に自負し客にたのめて云けるはわが好けるすきやのうちに何によりたることゝはなしによろしからざるものあらば詞にしたがひはぶくべし。少しも遠慮し給はずいひ給はれとありければ客は詔なき人にて家といひ器といひ行届かざる所もなければ只このうちにそのもと一人なからましかば風流雅境これに過ぎたることはあらじといへり。こはいとおもしろき諷評なり。」

語 彙

〔雲萍雜志〕 ウンビヤウザッシ。四卷、著者が永年の隨聞漫録を攝取補訂して成つたもの。葦葭堂主人恭の序中に「其平生隨聞所録、積年重日二十餘卷、多是勸懲之説話也。手澤之本、遂爲予藏弄一頃、中井某者撮其旨趣、補其缺略、題曰『雲萍』。予會每閑暇、寓目好對其人焉」とある。

〔村長〕 ムラササ。一村の長。當時としては庄屋格。

〔太々神樂〕 ダイダイカグラ。伊勢大神宮で行ふ神樂。皇都午睡第三編下に「太々神樂といふことは代神樂にて、講中の人々に代りて神樂を奏するがゆゑ代神樂にて、代太神樂と書くべきなり」とある（但し小寺融吉氏は大百科事典に於て「民間の神樂には往々にして太々神樂の名がある。恒例祭の神樂に對して臨時の場合をいひ、神社に祈願を籠めるものが料金を出して神樂を奉納する制度で……。太々は代々で、佛教でいふ永代供養に當る。太々神樂講は平生より毎月少數の金額を集め、年に一二回神社に参拜して臨時祭を行ふものである」云々と）。

〔御師〕 (一) 祈りの師に同じ。

(二) 伊勢神宮及び其他の有名な神社の身分低い神職をいふ。

〔薄茶〕 ウスチャ。挽茶の量を少くして點てる茶。香がはげしいので濃い茶に對していふ。

〔心を配り〕 コ、ロをクバリ。念を入れて、注意して。

〔まのらす〕 差上げる。進上する。

〔點てて〕 タてて。

〔茶道〕 茶の湯の道。茶は桓武帝延暦二十四年僧最澄の傳來。後一時中絶、建久二年僧榮西宋より歸朝の際再傳、筑前背振山に下し、山城榊尾明恵上人も一部を受けて榊尾に植ゑ宇治に移し、漸次全國的となつた。榮西の「喫茶養生記」は茶徳を頌して茶の普及に力があつたもの。鎌倉末から遊興としての「茶の會」が行はれて茶の識別を楽しんだ。室町中期から茶數寄と茶飲みの二種の茶會を生じ、前者は永正頃から流布し、大永以後盛んになつたもので、東山義政はこの機運を助長した事

が多い。茶道の形態が成つたのは義政に仕へた南都稱名寺の僧珠光からで、東山御所には數寄屋といふ奥座敷を造つて、抹茶を以て茶道の法則故實を作つた。更に武田信光の裔仲村紹鷗は珠光の門宗悟・宗陳に従ひ、一家を成し千宗易(利休)に傳へ、利休は秀吉に事へ茶道を改定し、後世茶道本流の源となつた。因みに古來諸流派の開祖は何れも茶道を以て一の悟道なりとしてゐる。即ち茶道は心の業を主とし、次に所作・器物・道具・席といふ順になるので、これを委しくいへば清淨を以て心を養ひ、正直を以て世間に處し、禮儀を以て人と交り、質樸を以て身を修め、物に過不及なく足るを知るといふのがその本旨である。従つて一見現代生活に縁遠い様であるが、實は今尙學ぶべき點が少くない。ただこの種の修養は古來一部の人にしか許されぬものである事は云ふまでもない。

〔場うて〕 その場の有様にうたれておちけること。場おくれする。所謂のまれて上る。聖徳太子繪傳記三「鎧武者の並み居る中、おめすばうてす怯ち氣なき」
〔鼻あかさす〕 鼻を明す。出しぬく。失望させる。
〔その許〕 そのモト。少し下の者に用ひる對稱代名詞。そこもと。
〔似氣なし〕 ニゲなし。似つかはしくない。似合はぬ。
〔隱遁〕 イントン。世を避けて隠れること。世を棄てる事。又その人。
〔手すさび〕 手遊とかく。手でするなぐさみ。てあそび。
〔隱居〕 インキョ。〔一〕世を避けて山野などに閑居すること。遁世。
〔二〕官を辭し、又は家督を讓つて世事にかゝはらぬこと。
〔三〕法律で、戸主がその自由意志から發して、一定の條件のもとに、戸主たる權利を家督相續人に承け繼がしめる事。又以上三の場合の人をいふ。
こゝでは〔二〕
〔耕耘收藏〕 カウウンシウザウ。上は耕し草けづる、下はおさめたくはへる。つまり農事の運轉をいふ。
〔飢ゑぬべし〕 飢ゑてしまふであらう。(ぬは過去を現はす。)

〔口取菓子〕 クチトリグッシ。きんとん・かまぼこ
其他鳥魚の類を味甘く濃厚に調理して取合せたもの。
〔いん〕 さあ。
〔我等〕 我に同じ。宇津保國讀「われらが中將なりし時」

〔下さる〕 謹んで受ける。頂戴する。狂言彌宜「茶を一つ參れ。いかにも、一つくだされうか」
〔さあらば〕 然有らば。さやうならば。では。
〔心勞〕 シンロウ。非常に心を勞する事。氣骨を折ること。心配。
〔變應〕 キヤウオウ。酒食を備へてもてなす事。馳走。
〔あくる〕 夜が明ける。
〔發足〕 ホツソク。出發。旅立ち。
〔はべれば〕 ごさいますから。
〔手續〕 テツヅキ。順序。方法。やり方。
〔給はるべし〕 べしは文法的には命令。教へて下さい程の意。
〔しかじか〕 云々。(然々の義)文句を省略する時に用ひる語。かくかく。件の。こゝでは右の一件程の意。

〔果して〕 こゝでは必ず程の意。
〔五月雨〕 サミダレ。陰曆五月頃降りつゞくなが雨。
〔信貴〕 奈良縣生駒郡。大阪府との境をなす山。東半腹に信貴山寺がある。眞言宗高野山脈に屬し、毘沙門天を本尊とする。近年焼失再建。今ケーブルカーを通ずる。寶藏の信貴山縁起繪卷は國寶として有名。
〔毘沙門堂〕 ビシャモンドウ。毘沙門天を寶置してある堂。毘沙門天は四天王の一で多聞天・北方天ともいひ、もと暗黒の屬性であつたが次第に光明の神となつて佛法守護と福德施與を兼ねるに至つた。日本では俗に七福神の一に數へる。
〔四季〕 毎季節。春夏秋冬。
〔連歌〕 レンカ。レンガ。短歌の上句と下句とを連ねるものをいふので、これに長短の二種がある。即ち二人が短歌の上句を出せば他の一人がその下句を附け、或は一人が下の句を出せば他の一人がその上の句を附けるものを短連歌又は二句連歌といひ、最初に短歌の上句に當る五七五を出して次に下句に當る七七を出し、次に又五七五を出し次に七七を出す如く連ねて行くものを長連歌といふ

この長連歌には連ねる句数によつて諸體があるが、何れもその最初の句を發句といひ、次の句を脇句、第三句以下を第三、第四などといひ、最後の句を擧句といふ。

〔何某の〕 某々の。

〔大納言〕 ダイナゴン。昔の官名で、太政官の次官。中納言の上に位し、大政に參與し、可否を獻替し、宣旨を敷奏することを掌る。

〔聞しめされて〕 キコしめされて。お聞きになつて。

〔ゆかり〕 多少の續き合。よすが。ちなみ。緣故。

關係。

〔消息〕 セウソク。セウソコ。(一)たより。案内。訪問。

(二)手紙。書信。

(三)様子。有様。

こゝは(一)

〔風流の面目〕 風流人といたしまして程の意か。

〔雲の上〕 禁中を天上に比していふ語。身分階級のちがひをあらはす封建的な氣持。

〔四方の話〕 ヨモのハナシ。四方山の話。

間に移して茶道を大成した。初め織田信長に仕へ後秀吉に寵遇せられたので、諸侯その門に入る者多く、茶道の興隆の因となつた。天正十五年秋の北野の大茶湯は有名である。十九年事あつて、秀

「おぼゆるからに」 思はれるので。

「いかなる故事かありて」 故事は古くから傳來して由緒又は興趣ある事蹟、又それに関する語句。かは疑問。

〔所存〕 シ・ゾン。心に存する所。考へ。存念。

〔さりとは〕 さりとて。さうではあるが。さやうにしても。但しこゝでは「それでは」程の意。

〔まろ〕 昔上下男女に通じていつた自稱代名詞。我。自分。土佐日記「旅人の子の童なるひそかにいふまろ此の歌の返しせん」

〔たぐふ〕 比ふ。類ふ。そはす。ならべる。なぞらへる

〔比興〕 ヒキョウ。1をかきこと。興あること。

著聞六「比興の事、かの卿聞かれて入興せられけり」

2 非理なること。不都合なること。非據の延か、又は非興ならんといふ。著聞十「比興の事なりとてそれより供米の沙汰、きびしく成りて」こゝでは第二の方であらう。(以上本文)

〔利休〕 千家流茶道の祖。名は宗易。泉州堺の人。

紹鷗に茶を學び、台子の法を傳授され、これを小

吉の怒にふれ割腹自盡。年七十一。

〔茶味〕 チャミ。奥田正造著。初版成溪叢書第四編

(大正九年)改訂五版光成館發行(昭和二年)

〔極意〕 ゴクイ。奥の手。秘訣。

三 否の一語

一 教材研究

1 解題

作者 中村正直 ナカムラ マサナホ 文學博士。號を敬字といふ。天保三年江戸に生る。初め儒學を修め、後、桂川周甫に蘭學を受け、慶應二年に英國留學を命ぜられ、歸朝後同人社を開いて子弟を教育した東京女子高等師範學校長、帝國大學文科大學教授、貴族院議員等に歴任し、明治二十四年六十歳にて歿した。その著譯「西國立志篇」「自由之理」などは廣く世に行はれた。本課は「西國立志篇」から採つた。

2 文意

處世に際して當然の時に於いては否の一語を言ふ勇氣を持たなければならないといふ教訓。

3 節意

第一節 處世上必要なる否の一語(二五〇頁七行まで)

第二節 否の一語を言ふ能はざる人(二五一頁四行まで)

第三節 否の一語の當然なる使用は徳行(終まで)

4 句意

(否の一語を言ふの勇氣)

否の一語を言ふことは、無意識の間に於いては、誰でも放言してゐるのであるが理の當否を熟慮して「否」と言ひ得る勇氣のある者は少ない。しかし難かしいことだからと言つて何時までもその弊に慣れてゐてはならない。ましてこれが自己の大きな運命と相關聯してゐるものであることを思へばなほさらである。

(自己に信頼するの力)

自己を確實に認識して、自己の當然の力に信頼すること、即ち處世の原動力である自己に信頼する心のない生活は眞の意味からは生活とは言はれない。

(「當然の時に於て否の一語を言ふは、大いなる徳行なり」)

否の一語を言ふ勇氣のない爲めに、人は自己の生活を歪めるばかりでなく、人の生活まで墮落させる。故に事があまり簡單にして手近なものであるために、誰でも輕んじ勝ちであるが、それを斷行し得るものは徳行なりと喝破した所に作者の力が認められ「否」の一語に對する深い考察がうかがはれる。この句が本課の中心となるべき所である。

二 指導研究

「否」と對者に云ふのは何人の場合にあつても「肯」といふよりは消極的である。消極的なるは何人も好む所ではない。見かけがわるい。一步退いたやうな氣がするのである。そこでありもせぬ力を出して「諾」といひ、徒に肯定し、後に實力の暴露せらるゝに當つて、最初の見かけのわるく恥しくあつたよりも何十倍の恥しき目にあはざるを得なくなる。當然なる場合の「否」は消極的にみえて實は積極的の勇氣を要し効果に於て更に積極的なものである。この意味を悟れば、恐れずして「否」の一語を活用することが出来る。さうして處世上もつとも安全にして効果多き一路を開くことが出来る。

この消極にして實は積極なる道をゆくには大切なることは勇氣であつて、勇氣といふ概念は多く花々しいものに考へられて居るが、そこを打破して勇氣の意味をひろくして生徒に考へさせ度い。そして又「否」はいかにも受身のことのやうにみえるが、さうでなく、本課のをはりにも「當然の時に於て」とあるやうに、徒なる「否」は徒なる「諾」よりもわるいのであるから、この「當然の時」を見定めるだけの敏感と魂の力がなくてはならない。つまり心を生き生きとして居なければならぬ。「否」といふのは自分にふりかゝつて來た折に云へばいゝといふ風な安易な心ではこの當然の「否」は決して云へないことを注意したものである。

本課の文は誰しも日常遭遇する大切な處世上の契機をとらへて居るので、それを正面から説きつけるでなしに「否」といふ方から―逆手から入つていつた所が効果ある説き方である。短章であつても内容のいかほどでも附加し得る教材である。

語 釋

〔世に處する〕 處は住居の意。世わたりのこと。

〔次第〕 (一) ついで。順。枕十「車の次第もなく先

づ先づと乗りさわぐが」。

(二) 手続き。由來。事情。狂言七騎落「思へばいま

はしき次第なり」。

(三) 事の成行を委す意を表はす語。薩摩歌中「お

墓の花も枯れ次第、持佛の香も消え次第。

(四) その事の如何に因る意を表はす語。

〔其人次第〕「事柄次第」

こゝは(四)

〔否〕 イナ。否定の語。英語の No。

〔些少〕 サセウ。僅かで少い。

〔圈套〕 ケンタウ。圈は檻、套おほひ。計を以て籠

絡し、其勢力範圍から出さぬことから、陥罕、わ

な。又惡の力の意。

〔毅然〕 キゼン。

〔順ふ〕 シタガふ。

〔手形〕 爲替手形、約束手形、小切手の稱である。

手形は金錢の支拂を目的とする證券で、支拂はる

べき一定の金額を手形金額といふ。その證券の發

行即ち振出人が自ら手形金額の支拂をなすべきこ

とを約束する手形は之を約束手形といひ、振出人

が第三者即ち支拂人に一定の金額の支拂を委託す

る手形を爲替手形又は小切手といふ。手形の債權

者を指定する方法に、記名式、指圖式無記名式及

び撰擇無記名式がある。手形は法律上當然の指圖

證券であるから、指圖式を以て發行された時即ち

特定の受取人のみを指定した時でも、殊更に裏書

禁止の記載なき限りは、裏書によつて之を讓渡す

ることが出来る。

〔裏書〕 ウラガキ。指圖證券の讓渡し又は質權設定

を證するため、讓渡人又は質權設定者が一定の方

式に従ひ證書（通常その裏面）に其の旨を記載し

署名すること、つまり讓渡人がその手形に對して責任者となることを證する行爲である。民法第四百六十九條「指圖債權の讓渡は其證書に讓渡の裏書を爲して之を讓受人に交付するに非ざれば之を以て債務者其他の第三者に對抗することを得ず」

〔證人〕 保證人。主たる債務者がその債務を履行しない場合、その履行をなす責任を負ふ者。故に十萬圓の保證に立つといふ事は、場合によれば自分がその人の爲に十萬圓を拂つてやるといふ約束である。親戚友人に頼まれて、よもやそんな事にはなるまいとて捺印した爲に、全財産を失ふ者あるは、東西同軌と見える。

〔累〕 ルキ。(一)かさなり。かさね。

(二)推し及ばされたわざはひ。かゝりあつた難。

まさぞへ。莊子「知之者不以利自累也」

〔傾く〕 カタムク。減ばす。くつがへす。

〔當然の時〕 然かあるべき時即ち「否」といふべき時。

〔許多の〕 オホク。數多。甚だ多し。(許は程ばかり。)

〔地歩〕 立場。位置。立脚地。(罪惡立場を奪はれるやうになるとの意)

〔歡樂〕 よろこびたのしむ事。

〔誘引〕 イウイン。いざなひ引つばる。

〔試みる〕 コ、ロみる。惡の誘惑を英語では試みる(Tempt)といふ。

〔惑溺〕 ワクデキ。まどひおぼるゝこと。深く迷つて本心を失ひ、邪道に陥ること。

三 自然の教訓

一 教材研究

1 解説

本課は羽仁もと子著作集(第二卷)より採つた。

作者、羽仁もと子 ハニ モトコ 明治六年九月青森縣八戸町に生る。第一女學校、明治女學校を経て報知新聞に入り記者となる。明治三十六年より雑誌「婦人の友」の前身「家庭の友」を發行し、現に引續き「婦人の友」の主幹である。大正十一年自由學園を創設し、生徒の自由、自治による獨特の校風を發揮してゐる現に園長である。

2 文意

自然の吾々に與へる正直勤勉の教訓について、自分の住居の周圍の自然の變化進展を題材として述べた文。

3 節意

第一節 序、鎌倉の住居とこれをめぐる自然の恩恵（二五二頁五行まで）

第二節 自然なすわざの正しさと人の世の欺瞞（二五五頁五行まで）

a いつの間にか来る自然の恵み、それはいつはらず規律正しく来る。

b 人生も又この自然の田畑と等しき場所、虚偽偷安は許されない。

第三節 勤勉なる農夫と心の畑（二五六頁十二行まで）

a 勤勉なる農夫の田畑は繁り實る

b 心の畑も油断なく耕してゆくべきものだ。

第四節 結、吾家の庭や畑の水々しい草木（終まで）

4 句意

（きのふもけふも同じであるとばかり云々）

自然は刻々に春から夏、夏より秋と、推移進行してゐるが、毎日それを眺めてみると、殆どその推移を感じない事。

「いつこのやうに楽しい秋が見舞ひ來つたのでせう」と次にあるのは變化のない自然とばかり思つて居た自分がふと反省して、もう秋だと感付いた折のおどろきである。「見舞ふ」は擬人的に云つたので、普通は「訪れる」などといふ。やつて來たと同じで吾々を受身にしてその思ひがけぬ到來を云ひあらはさうとした技巧である。

（わが心の願が天の意に叶ひ、わが日々の業がまたよい事であつたなら云々）

天地の大道、神の意になつた願を以て、日々正しい眞實なつとめをなして行くなら、吾々は知らないが實は、豊かな天（然）の恩恵は我らの産業を祝すのであらうの意。注がれるとは、慈雨にたとへた語。照憲皇太后御製に「心だにまことの道にかなひなば祈らずとも神はまもらん」といひ、聖書に「天の父は凡てこれらの物の汝らに無くてかなはぬを知り給ふなり。まづ神の國とその義とを求めよ、然らば凡てこれらの物は汝らに加へらるべし」（マタイ傳七章末）とある。

（同じやうに見へるわが心、わが身のまわりの状態も云々）

革新を志し向上を目指し打開發展を願つて努力しても、舊態依然昨日の我は今日の我であり、生活環境亦何時願ひの如くなるかも知れぬ様に一見考へられるが、結果は天に任せて、まじめな刻々の業を勵んだなら途中様々なる事はあつても何時かは喜びの彼岸に達し得る、この事は我等半生の生きた経験だとの意。

（時にまことの榮えのやうに）

人生往々にして邪まなるもの、正しからざる力が、一見眞實の榮えなるかの如く見える事もあらう、しかしそれを以て人生欺くべしと考へるなら大きな過りであつて、さうした手段によつて獲られたものは眞實の結果ではなく、結局心相應努力相應に報いられるものである。

(人生も亦明かに神の田畑)

胡瓜を植ゑては西瓜は出来ぬ。耘らすして耘つたかの如く體裁をつくつても雑草は思ひのまゝにのびる。この天然の田畑は胡魔化しが利かない。所が人世は今の虚言も永久に發見されざる如く思ふ。またさう思はれるものであるがこゝは自然の田畑と同じく心も亦神の田畑であつて耘らざる惡の雑草はのびのびで、いづこかに報い來るものである。一は自然の草木であり二は精神的な對象であることから、眼前にあらはれるとあらはれにくいとの差違のため、人は知らず知らずにこの道にあやまり踏み入つて居る。そこを特に知らせようとして「明かに神の田畑」と云つた。この句は此節の眼目である。

(次から次とよい智慧をうみ出すべき心の畑が、とかくに打棄てられ勝ちになつてゐる)

田畑は次々うつりゆく天然の氣候に従つてもつとも適當のやうに播き植ゑ耕し耘らなければならぬ。神の田畑なる吾々の心はやはり常に流動し進展するものであり、この流動變轉の心にのぞむ精神的世界は機會といふものに充ちて居るのであるから、その適宜な機會に次々とよい芽をひらくべき心眼を用意しなければならぬ。しかるに人々は一を爲して足れりとし、二を爲して完しとして、次に來るべき機會の用意をせぬ。これは機會といふ天與の恩恵を見逃すことになるのである。

(萎んだ花を摘み……去つて、つとめて無用のものに幹を勞らせない)

茄子、朝顔の栽培でも、よい花を咲かせ、よい實を結ばしめんためには、植物の全精力をそこに集中させる爲に、不斷に餘分な枝や葉や花を除かねばならぬ。無駄のものを省き良きものの生長を助長せしめ

るのは天恵を得るの最上策。これも亦朝顔、茄子に限らず心の田畑も同じことである。

二 指導研究

人の忘却し勝なもの自然の恩恵であり、更に早く忘却しをはるものはこの天然の恵みと同じき心の上の恵みである。今この文ではきはめて身近い自然の恩恵を説きはじめてそこから吾々の學ぶべき誠しむべき思想を引き出して居る。「自然に學べ」とか「自然にかへれ」とかはしばしば繰返される警世の文句である。「自然である」とか「自然の兒」だとかいふのはそこにすでに「純粹な」「良い」といふ意味をもつて居るのである。自然を説くことは人の心の正しさを説くのと同じである。だから人はたゞ自然の美しくすぐれて居ることを示された丈でも心の整正にはいゝわけである。本課は作者のこまやかなすなほな心でこの自然が説き出されてゐる。そしてそれがやがて吾々の心持の上の問題に及んで居つてその間のうつりゆきも不自然でなくておのづから人を導く趣がある。説き教へ込むのでなく一所になつて話し合ふ態度である。これは本課の文の特有な味であるからよくその趣を利用して生徒と一所に味讀したい。

たゞ注意すべきことは、こゝに説かれる自然も、又それから引き出された作者の人生に對する思考もさして珍しいものとはいへない。又生徒も度々經驗し度々きかされたことであるからこの文の流麗に乗つて表面だけの感得にすぎないやうになつてはこまる。つまり内容も文調も快いものにみだされてゐるから、通讀することや頭腦的理解丈でも或感激がありそれによつて自ら快く思ふことがすでに理解したと誤認さ

れやすいのである。これは近代人の、ことに女學生徒などの陥りやすい危さである。理解だけに長じて體
驗實行に缺け、口眞似に長けて腹の力に足りない。そこを注意してなるべくじつくりと文意に食ひ入るや
うによませ度い。

語 釋

〔私ども〕 家庭全體の氣持。

〔鎌倉の假の住居〕 假の住居とは暫定的な、本格的でない住居、即ち別荘を謙遜していつた。鎌倉・逗子・葉山邊は風光明媚氣候溫和、しかも帝都へ交通距離一時間餘なるを以て、此處に家を構へて東京に通勤する者も多い。

〔天然の教訓〕 言説による教訓に對する。大自然の中から自然に感得せしめられる教訓。

〔不便な生活に伴ふ云々〕 鎌倉に居住すれば東京等に住むよりは凡ての點に於て不便であり、殊に町から離れてゐるので、日常物質生活には都合の悪い事が多い、しかしその反面かういふ事に恵まれるとの意。伴ふは隨伴結果、などを意味する。

〔大きな幸福の一つ〕 絶對最上級のな形容をさける外國語的語法の一、但しこゝでは文字通りに、不

便な生活は様々の大きな幸福を伴ふが、その一つだとする事も出来る。

〔粟〕 アハ。禾本科に屬する一年生草本、高さ一米から一米半、夏頃複穂狀に密集した花をつけ垂下り、秋黄色の少種實を結ぶ。粟餅・おこし・飴・泡盛酒などの原料となり、又小鳥の飼料ともされるが、山間僻地では之を常食する處も少くない。

〔稻〕 禾本科一年生草本。所謂米のなる木、東洋人に主食物を提供する植物である。二百十日（九月一日前後を過ぎて花を開き、田の水が干されて種子が實つて來る頃、美しい黄金の波を打つ様になる。色づくばかりとは、秋になつた事を示す。

〔麥の切株云々〕 麥は禾本科一年生又は二年生草本、大麥・小麥その他がある、共に食用植物。秋時くと來年の晩春收穫出來るので、普通稻と交互に

處世術といふものの低級な部類はこれ。

〔天然は欺かないけれども〕 天然には嘘がないけれども。

〔胡魔化しがきく〕 欺きいつはつても、それで通つて行ける。若しくはその効能がある。

〔いかに適切に〕 天の報いの一分一厘の違ひもないこと。

〔歴史が語る〕 古今の歴史を繙いて長い過去を顧る時、悪はたとへ一時の榮を恣にしても結局は滅び、正しきものはよし一世に容れられぬとも遂には榮光の冠を報いられる事實によつて知り得るの意。〔思ひを潛める〕 潛は内に向けること。浅い浮ついた氣持を去り、本眞の我にかへり心を集中して物を考へること。

〔狭いわれらの見聞〕 遠い歴史を辿るまでもない、吾々日常生活に於て見聞きする狭い經驗を思ひかへしてもの意。

〔夏作は一日遅れると半月の損〕 夏作は夏の作物、又はその手入れ。農村には作物に關して様々な俚諺があるもの、これは夏作の一日を争ふをいふ。

〔甘藷畑〕 イモバタケ。甘藷（さつまいも）は施花

栽培される。

鏡の様な水とは、田植前の水田の美しさをいつたもの。

〔幾日も経たないやう〕 つい此の間の様な氣がする〔漑ぎ転る〕 ソソギクサギる。漑漑と除草。

〔胡瓜〕 キウリ。胡盧科の一年生草本、印度産といはれる。種類によつて長さはちがふが長紡錘形の果實を結び、多く刺を有する。初め綠色なるも熟すると黄色になる。

〔西瓜〕 スキクワ。所屬同前。外部綠色、内部紅色の大球形の漿果を結ぶ。極めて多汁美味、西瓜の別字ある嗜好果物。胡瓜を植えて云々は相應の事をおかすに結果の良からん事を願ふ例。

〔體裁〕 テイサイ。(一)有様・形・姿

(二)ていたらく。

(三)見得・面目。こゝは(三)の意味。

〔蟲がよい〕 自分の都合ばかり考へて人の事を考慮せぬ利己的身勝手なこと。勝手がよすぎるなどと

同じ。
〔呆れる〕 アキれる。何とまあと意外な事に驚く。
〔巧みに世を渡る〕 所謂游泳術のうまい事、出世法。

科の多年生草本、普通紡錘状をなし、肉質しまり、色は外は深紅もしくは黄白、内は黄白又は淡黄が多い。中央アメリカの原産といはれ、元祿年間我國に入り甘藷先生青木昆陽が之を普及した事は周知の事實である。

〔よい價をもつ〕 高く賣れること。

〔菜〕 食用草本。の汎稱、又はアブラナ・カラシナ・タウナ・白菜の總稱。

〔大根〕 十字花科の一年生又は二年生草本。地下に長大白色の多肉根を有する。品種形状甚だ多様であるが、一般に水分多く、滋養分の含有量は少ないが、ヂアスターゼ・カルシウム・ビタミンを含み事大なるを特色とし、煮物・漬物等用途が廣い。

〔天氣都合〕 天氣工程の意。都合は關係、情況。

〔威勢〕 元權勢・勢威と同義なるも、普通用語では勢・活力などの意。

〔賢くも勤勉な〕 賢くて勤勉なと同じ。

〔一枚の畑〕 平たい物又は長い物を數ふるに枚の字を用ひる。人一倍の利用とは、きまつた一枚の畑でも、時間的に空間的に又農業的に上手に使用すれば、より大なる生産力を發揮せしめ得る事をいふ。

〔心の畑〕 人の心を畑にたとへた語、心田を耕すなどといふ。

〔朝顔〕 ヒルガホ科一年生の纏繞草本。夏の朝葉腋から漏斗状の合瓣花を開き多くは毎朝一個づつ上方へ咲き昇る。鉢植或は垣根にまっはらせ等する。

〔茄子〕 ナス・ナスビ。茄子の一年生草本、印度の原産、廣く園圃に栽培される。莖高六〇―九〇種、葉は大形楕圓状、夏日多くの枝を生じ葉腋に淡紫色の合瓣花を開き、花後暗紫色大形の漿果を着ける。夏季蔬菜として重要。

〔瑠璃色〕 ルリイロ。紫を帯びた紺色。紺碧。〔夕な夕な〕 な、は毎にの意。

〔目さむるばかり〕 物事の立派又は意外な爲めに眠い眼も覺めるばかりなこと。

〔咲きほこつて〕 咲く様の絢爛なるをいふ。

〔水々しい〕 瑞々し。光澤があつて若々しい。勢よくつややかなさま。

(以上本文)

〔詩篇〕 Psalm 舊約全書中の一書、全體で百五十篇ほどある。ダビデ王・ソロモン・モーゼ等の作もあり、大部分作者不明。

三 蜘蛛の絲

一 教材研究

1 解題

本課は芥川龍之介氏の「傀儡師」(一冊。東京新潮社發行。作者の短篇集。)より採つた。

作者 芥川龍之介 第十三課参照。

2 文意

お釋迦様が、地獄の底に苦しんでゐる健陀多の管て蜘蛛を助けたことを思はれ、出来るなら救ひ上げてやらうと、極樂の蜘蛛の絲を下げられた。健陀多はそれを攀つて地獄を離れかけた時、ふと自分の後から大勢が同じ蜘蛛の絲をせつせと登つて來るに氣がつき、「下りろ下りろ」と怒鳴つたため絲が切れて、忽ち眞逆様に元の地獄に落ちてしまつたといふ筋であるが、作者の意圖は、永遠の世界に於いて人間の一つの行爲、一つの欲望が如何なる意義を有するものであるか、それが淨玻璃のやうに、如何に簡明に嚴かに因果の主として照し出されて行くかを、童話として具體化したところにある。

第一節 極樂のお釋迦様。

- 1 極樂の朝。蓮池のふちの散歩にお釋迦様はふと地獄の底の健陀多にお眼が止つた。(二五九頁四行まで)。
- 2 健陀多は大悪人であるが、たつた一つの善事(蜘蛛を助けた)をしてゐる。(二六〇頁一行まで)
- 3 お釋迦様は健陀多のたつた一つの善事を思ひ出され、救つてやらうと極樂の蜘蛛の糸をお下しになつた。(二六〇頁十行まで)

第二節 地獄の健陀多。

- 1 地獄の血の池の様子。(二六一頁十行まで)
- 2 蜘蛛の糸が下つて來たのを見つけた健陀多。(二六三頁二行まで)
- 3 途中で疲れて休んだ。そして地獄から遙かに上つて來たのを喜んだ。(二六四頁三行まで)
- 4 ふと気がつく、後から地獄の罪人共が攀つて來る。「下りろ下りろ」と喚いた瞬間、健陀多は元の地獄へ風を切つて落ちて行つた。(二六六頁六行まで)

第三節 極樂のお釋迦様。

- 1 一部始終を見てお出でになつたお釋迦様の悲しさうなお顔。(二六七頁三行)
- 2 静かな極樂の午。(終まで)

4 句 意

(極樂は丁度朝でございました。)

前の數行は、童話特有の想像世界の美しい叙述であつたが、この一句は急に現實的描寫になつて、この話全體を立體的に浮び上らせる効果を表はしてゐる。この「丁度朝で」といふ詞に、如何に迫眞力があることか。この話が奇妙に實感を以て人に迫る理由は、作者の深く鋭い想像力に依ることであらうが、よく味はつて見ると、右の如き副詞の巧みな馳驅によるやうである。「丁度地獄の底に當つて」(二五八頁十行)、「まるで覗き眼鏡を見るやうに」(二五九頁一行)、「そつとお手にお取りになりました」(二六〇頁八行)、「何しろ、どちらを見ても」(二六一頁二行)、「まるで死にかゝつた蛙のやうに」(二六一頁十一行)、「まるで人目にかかるのを恐れるやうに」(二六二頁三行)等は其の例である。

この句は最後の行の「もうお午になりました。」と呼應して、地獄に對立した極樂の閑寂な叙景をなしてゐる。

(たつた一つ善い事をした覚え)

「覚え」は「事」の意味にとるか、釋迦の「覚え」にとるか、健陀多自身の「覚え」にとるか、何れとも決定し難いが、「事」の意味にとつて、作者の説明であるとしたい。

(出來るなら)

健陀多のした善い事は極く些細の事ではあるが、他の惡のすべてを消して考へる大きな愛の心の審判から、彼は救はれようとしてゐる。しかしながら救ひ出さうと思つて救ひ了せるか否かは、お釋迦様にもわからない。そこで「出来るなら」と言つたのである。

(翡翠のやうな色をした蓮の葉の上に、極樂の蜘蛛が一匹美しい銀色の絲をかけて居りました。)

右は優れた作者の想像的描寫である。

(こちらは地獄の底の血の池で)

あつさりと巧みに場面の展開を説明してゐる。

(どちらを見ても眞暗で)

前篇の極樂の情景と對照させて、地獄の陰慘な様子を、先づ一語で示してゐる。

(まるで死にかゝつた蛙のやうに)

氣味が悪いほど巧みな譬喩である。

(銀色の蜘蛛の絲が、……一筋細く光りながら、するすると自分の上へ垂れて參るではございませんか。)

神技に入つた技巧である。譬喩といひ、語勢といひ、實に眞に迫つてゐる。

(かう思ひましたから、健陀多是早速……)

この句の前の文章は健陀多が蜘蛛の糸をみた所を作者が客觀的に描寫した形で、それからすぐ「かう思ひましたから」にうつるのは實は無理な句法であるが、そこが無駄をはぶいて中々よく話の筋をすゝめ

てゐる。

(何年にも出した事のない聲で、「しめた、く。」と笑ひました。)

惡人の本性を露はしたことが巧く説明されてある。

(せつせつとのぼつて參ります。)

不氣味な亡者達の執念深い心と行動が眼に見えるやうである。亡者達が一語も發してゐない叙述に注意したい。

「こゝら罪人ども、……下りろく」遂に主我的な醜さが、心の中に思つてゐるだけに止まらないで、殘忍な排他的な言動として表はれて來たのである。

(風を切つて獨樂のやうにくるくる廻りながら、)

巧みな譬喩である。

(後には唯極樂の蜘蛛の絲が、……月も星もない空の中途に短く垂れてゐる……)

容易に他の道隨を許さない、實感に迫る想像的描寫である。

(悲しさうなお顔をなさりながら、又ぶらぶらと……)

こゝに釋迦の大慈悲心が描かれてある。悲しさうな顔は、決して健陀多の無慈悲な心を憎んだのではない。どこまでも淺ましい人間の心をあはれみ、同時に、自分の法力がまだく未熟で、極惡人を救ひ出すに足りないことを残念がられたのである。

健陀多にとつては千載一遇の好機を逸した一大事件でありながら、お釋迦様にとつては一寸心の翳つたに過ぎない一些事で、そこに人間のはかなさが示されてゐるとも取れる。「自分ばかりが地獄から抜け出さうとする」誰にもこの浅ましい心がある。深く内省させて見たい。若しこの時健陀多が、他人と共に、いやまづ他人からといふ廣いゆたかな心を持つてゐたら、釋迦はきつと彼を救つたに違ひないのである。

二 指導研究

1 本文の理解

本文を読む人は誰でも、深い藝術的魅力に引き入れられてしまふ。そして何回でも反復して味はつて見なくなるだらう。そして、何故この文は、こんな魅力を持つてゐるだらうと、不審を抱くやうになるだらうと思ふ。若し生徒が、かういふ疑問を抱いた場合に教師の指導すべきことは何か、それは次の二三條を説明してやるのが自然であり、いゝ事であらう。

イ、題材が珍奇にして、しかも佛教を信する日本人の傳統的の性格がびつたりあてはまつてゐること。
ロ、作者の勝れた技巧

A、構想、即ち悠久の國極樂を全文の前後に叙述して、はつきりと地獄と相對照させたことが、釋迦の雄大な性格と健陀多に見られる人間性の浅ましさととの對照にびつたり合致したこと。

B、すばらしい想像的叙述、即ち實感にひし／＼と迫つて来る、さまざまの譬喩が非常に多く出てあること。

2 本文終了後の感想の處理

異常な魅力に引かれて、どんな生徒でも、この文に感嘆の聲を擧げない者はないであらうから、充分に文章として味はつた末には、この内容に就いて、皆種々なる感想を持つたらうと思ふ。中には、蓮池の水はどうして洩れてしまはないか、お釋迦様は案外御利益の薄いものだから、よく蜘蛛の絲が切れないことだとか等の、子供らしい疑問を含んだものもあるであらうが、中には、誰だつても健陀多のやうに考へるだらう。何故なら、蜘蛛の絲が細いのだからと言ふやうな勝れた批判をするものもあるであらう。若し、かういふ勝れた感想を發表する生徒があつたらば、教授者は、「確かに我々もさういふ場合になつたならば、果して健陀多のやうな行動は取らないとは保し難い」ことを教へ、併せて、本文の文意をもう一度考へさせて、「神の世界に於ての話であるから」といふことを説明してやりたいと思ふ。

三 參考資料

本課の話は、ロシアの古傳説「カラマゾフ兄弟」(ドストエウスキー著)第七編第三に所載の「葱」の話を、東洋風の話に書直したものらしい。今その一節を、昇曙夢氏の譯文に就いて左に掲げる。

「昔々或所に意地の悪い〜お婆さんがおりましたとき。それが死んだ時、後に何一ついゝ行が残らなかつたので、悪魔はお婆さんをつかまへて火の湖へ投げこんちやつたの。ところがお婆さんの守神の天使は、何か神様に申し上げるやうないゝ行が、あのお婆さんにないか知らんと、じつと立つて考へてゐるうちに、やつと或事を想ひ出したので、神様に向つて、あのお婆さんは畑から葱を抜いて来て、乞食女に遣つた事がありますと言つたのよ。すると神様は、ではお前一つその葱を取つて来て、湖の中にあるお婆さんの方へ差伸べて、それに掴まらして手操るがいゝ。さうして若し首尾よく湖の外へ引出せたら、お婆さんを天國へやつてもよい。若し葱がちぎれたら、お婆さんは今の場所へそのまゝ置かれるのだぞと、かういふ御返事なんですとき。天使はお婆さんの所へ走つて行つて、葱を差伸べながら、そら、お婆さん、これに掴まつてお手操りよと言つて、自分でもさうつと氣を付けて引きはじめたのよ。さうして、もう大方引上げようとしたところへ、湖の中にある他の餓鬼どもが、お婆さんが引上げられてゐるのを見て、自分等も一緒に引出してもらはうと言ふので、みんなでその葱に掴まり出したの。するとそのお婆さんは意地の悪い〜女だから、皆を足で蹴散らしながら、引いてもらつてゐるのはわたしだよ、お前さんたちぢやありやしない、わたしの葱だよ、お前さんたちのぢやありやしないと、かう云ふが早いか、葱はぶつりと切れちやつたのよ。そしてお婆さんは又湖の中へ落ちて、今まで、すつと燃えとほしてゐるんだつて。天使は泣きながら、そこを立ち去つてしまひましたとき。」

語 釋

〔釋迦〕 佛教の開祖、釋迦牟尼のこと。釋尊とも尊稱。釋迦は種族の名で能仁と譯し、牟尼は美稱で寂默の義。在世の年代に就ては諸説紛々五十種以上になるが、西紀四六六年誕生、三八六年入滅が最近考證された宇井哲人博士の説である。出家・修道・得道・傳道・入滅にまつはる傳説的傳記は家庭大百科事彙に要領を得たものがある。

〔極樂〕 ゴクラク。佛語で、西方十萬億土を經過したところにある阿彌陀如來の居所で、諸事圓滿に具足し、全く苦患なき安樂の世界。蓮華から出來て居り、佛果を得た者がこゝに往生すると説かれて居る。穢土(現世)に對して五濁のない清淨の世界の意で淨土ともいひ、其他極樂淨土・極樂世界・蓮華藏世界・九品淨域などもいふ。キリスト教の天國に相當する信徒の理想國である。拾遺哀傷「極樂ははるけきほどと聞きしかど、つとめて至る所なりけり。」

〔藥〕 ズキ。しべ(花の内心)のこと。葱ともかく。
〔竹む〕 タタズむ。立止まる。暫時止まる。又ぶらつく。

〔地獄〕 三惡道・六趣の一。梵語捺落迦(Narakā)の意譯で、地下にある牢獄の義。罪障最も深き者が往生して苦報を受ける所で、閻魔之を主宰し、鬼類之に屬して罪人を呵責するといふ。その種類・位置・生因等に就ては經論によつて諸説一定しない。普通には、南瞻浮州(この世界)の地下二萬由旬(一由旬は四十里)にあるといふ縱・横・深各々二萬由旬の無間地獄があり、その上に大焦熱・焦熱・大叫喚・叫喚・衆合・惡繩等話の七地獄があり(以上は八熱地獄といひ下になる程苦惱は十倍する)、其等の地獄は夫々十六小地獄を附隨せしめてゐるもので、八熱地獄と合して百三十六地獄。此外尙八寒地獄をも數へる。因みにキリスト教に於ける地獄の思想は、ギリシヤ神話に於けるハデス(Hades)の一族及びミノス(Minos)・ユダヤ傳説に於けるシェオル(Sheol)・ゲヘンネ(Gehenne)などの説話を素材とし、之に最後審判の觀念が結付き、永遠の刑罰・呵責を受ける幽界(Infernum)と呵責によつて淨化され昇天の恵みに浴する煉獄(Purgatorium)の思想に結晶して中世に至つて完

せぬこと。

〔翡翠〕 ヒスキ。(一)寶石。輝岩が分解して生ずるもの。滿洲地方及びアジャの東南部に産する。女の帯止・かんざし、又は印材等に用ひる。色は丁度蓮の葉のやうな青綠色である。

〔二〕「かはせみ」といふ鳥の名。雀大で、脚は攀木に適し、嘴に鋭直で長大、背部は青綠色。

〔血の池〕 地獄にあつて血を湛へたといふ池。

〔責苦〕 セメク。せめくるしめること。又その苦しみ。

〔眼ばかり動かす〕 呆氣に取られ口が利けない事。

〔一手操〕 ヒトタグリ。

〔此の分で〕 この調子で。

〔存外〕 案外思つたより。

〔肝腎〕 肝要・大切。

〔肝腎な自分までも云々〕 こゝで、醜惡な自分のみをかばふ利己心、即ち我魔の心が出て來た。

〔喚く〕 ワメク。叫喚。大聲で叫ぶ。をめく。又騒ぎののしる場合にもいふ。

〔途端〕 トタン。はづみ。拍子。折。

〔獨樂〕 コマ。

成されたもの。ダンテの神曲はその詳細な記録の代表的なものである。要するに人類の罪障觀念の宗教的反映であつて、形こそ異れ、道德觀念の存する處何處如何なる時代にも存する應報思想といへよう。

〔三途の河〕 サンヅのカハ。人が死んで初七日、極善・極惡でないものが、秦廣王(閻魔大王)の廳に至る途中にある河。その河に緩急の三瀬あり、生前に於ける造業の如何によつて、渡るに三途の別があるので、この名を生じた。もと、地獄・餓鬼・畜生の三惡趣を喻へたものといふ。

〔針の山〕「劍の山」ともいふ。十六小地獄の一。刀劍より成れる樹木の植ゑられた地獄の山で、獄卒が罪人を、この山に追ひ登せて呵責するといふ。劍樹地獄・劍林地獄。

〔覗き眼鏡〕 ノゾキメガネ。大きな箱の中に積きもなどの種々の繪を備へ、次第に轉換する装置をして、前方の擴大鏡から覗いて見せる一種の見世物。のぞきからくり・からくり。

〔蠢く〕 うごごする。うごうごと動く。蠢動。

〔無暗〕 ムヤミ。前後を考へないこと。理非を分別

〔風を切つて〕 勢強く。非常な勢で。

〔月も星もない〕 闇黒な状態を言ひ表はした語。

〔一部始終〕 イチブシジュウ。もと、書卷について言つた語。事の始から終まで。

〔石のやうに沈む〕 罪が重いから、深く沈んだのである。

〔頓着〕 トンチャク(普通トンチャクと讀む)。心に

かける事。意に介すること。懸念。佛語貪著の誤字。法華經序品「貪著名利」と。多くを求めて足る事を知らず、物事に執著すること。

〔蔓〕 ウテナ。蔓のこと。「うてな花」といへば、極樂淨土の蓮の花、即ちこの土に生まれるもの座する所を指す。

〔たんび〕 たび。度。

氷水溜り

一 教材研究

1 解題

本課はトルストイの著「トルストイ童話」より採つた。

作者 トルストイ Leo Nikolaevitch Tolstoy (1828—1910) はロシアの生んだ世界的思想家ヤスヤナボリヤナの伯爵家に生れ、一八五一年自ら軍隊生活を求めてコーカサスに赴き *Childhood*, *Boyhood* and *Youth*. を著し、又 *The Cossacks* を草した。一八五三年クリミア戦争に従軍して *Sevastopol* に悲惨な戦亂を寫し、露都に歸つて文壇に盛名を馳せた。

一八五七年心を農業生活に傾け、一八六三年 *War and Peace* の稿を起し、一八七一年 *Anna Karenina* に着手した。更に一八九四年頃に着手された *Resurrection* 等によつて世界的大藝術家となつた。

一八八〇年には *My Confession* 一八八五年には *My Religion* を出して内生活の闘争と新生を告白し、一八八九年には一切の所有を捨てて農民生活に入つた。そして社會家庭の關係から來る、否それよりも自己の性格にひそむ矛盾や虚偽から脱しようとして一小村驛で遂に斃れた。偽善生活を去つて、額に汗して其の日その日のパンを得よ、神と隣人とを愛せよといふのが彼の叫びであつた。

童話も多數あり、小學兒童を教へたりした。何とかして新しい魂を光明の生活に送りたいと願つての仕事であつた。

2 大意

人間同志の憎悪や争鬭は神に對する罪過であると信じてゐたトルストイが、人間同志の争鬭は根據もない誤謬に胚胎する罪惡なることを氣付かせようとした童話。

3 筋意

第一節 残雪の溶け始めた村の水溜りに集つて遊ぶ二人の女の子とその喧嘩。(二七〇頁九行まで)

第二節 母親同志の喧嘩から百姓等の争鬭。(二七二頁一行まで)

第三節 祖母の仲裁。(二七二頁六行まで)

第四節 二人の女の子と仲直りの大人達。(終まで)

4 句意

(戸外にはまだ雪が残つてゐて、それが溶けて村の中をちよろちよろと流れてゐました)

早春の戸外のすがくしい様子である。雪のふかい北國の人には、ことに兒童にはかういふ折が一番たのしい。このちよろちよろ流れる水が小路にたまった水のほとりでこの話が始まる。

〔マラーシヤ、お入りでないよ。お母さんに叱られてよ。私は今靴を脱ぐわ。お前もお脱ぎよ。〕
 少し年上のアクリカの方が相手の水に入らうとするのをお母さんに叱られるからと云つて止めてゐる。止めてみたものゝ自分も入り度いので、今度は自分からさきに靴を脱いだのである。

〔マラーシユカがわざと私に水を潑ねかしたの〕
 わざとではなかつたのにかういふ場合に誇張して長上に云ひつけるのは子供のよくある感情誇張である。ここから争ひがひろがつてゆく。

〔みんなとなり合ふだけで、誰一人として理由を聴く者はありませんでした。〕

感情が傳染するのみで、冷靜に事の理由をきかうとしない。そこで原因とはとんでもないことになる。殊にかういふことは無教育な單純な人民の中に多いことである。

〔で、若しアクリカとマラーシヤがゐらなかつたら、お祖母さんは百姓達を説き鎮めることが出来なかつたかも知れません。〕

突き倒されさうにしたお祖母さん、仲裁の年役も効果がなかつたのに、この大騒ぎの原因の二人の女の子がもつと効果のある仲裁役であつたといふのである。二人があつた爲めに争ひが起きた、だのにこの二人がゐらなかつたらこの争ひは中止しなかつたらうと云ふ、案外なことを書き起して次の結末の話に

注意を集めさせる。

〔そこをお止めよ、マラーシヤ、お止めよ〕とアクリカが叫びました。マラーシユカも何か言はうとしましたが、何とも言へないほど笑ひこころげてゐました。〕

如何にも罪のない子供の世界である、喧嘩のことなど全く忘れてたゞ歡喜の聲をあげてゐる。水溜りから水が流れてゆく、この一つがたまらなく歡びの心を躍らせてゐる。そこは理窟のないたゞ神の心の在る世界である。

〔二人の女の子は駈廻つたり、または木の片が小さい流に浮き沈みしてゐるのを見て笑つたりしながら、丁度百姓達の集つてゐる真中に駈込んで來ました。〕

なんでもない小さなことによるこび乍ら大人の喧嘩の中に駈込んでいつた。それが喧嘩のものになつた二人の子であつた。これこそ全くの皮肉である。全くのよき仲裁役である。そこでお祖母さんの「あの娘達の方がお前さん達より餘程伶俐だよ」といふ言葉がよく利いたのである。少しのことに拘泥して重大化してゐる大人よりは水の流れにうかぶ木片をよるこんで、仲直りしてゐる子供の方がよほど心の生活の上では程度がたかい。そこを又老婆が見抜いて大人達に知らせた所も人の年齢から來る微妙な趣がある。

二 指導研究

子供の心とその遊びはどの國でも同じ趣きだ。うそをいつても感情を誇張しても罪がない、さういふ明るい生活を讀ませたいものだ。そして大人の世界は却つてそれよりも恥かしい有様だ。この童話の味は粗大けれども、力強い何者かがある。兒童期を距ること遠くない、又大人の世界の一斑を知り始めてゐる生徒にはこの粗大な童話の骨組に自己の生きた経験や想像を附加して味ふことが多いであらう。さういふ自分から解釋を下してゆく部分が多いやうに導き度い。

又人生の教師ともいふべきトルストイの童話には深刻な道義の閃きがあるのであつて、ロシア農民の漠然とした偉大性の反映がある。この童話にもさういふ特色が窺はれる。だから一通の味讀がをはつた後、作者はどういふ所をねらつたか、單に子供の喧嘩と大人の口論と老婆の仲裁といふ或日の事件を書いたものかどうかを考へさせ、作者の心奥に持つ澄んで大きな道義感にふれさせ度い。

三 參考資料

「トルストイ童話集」(水谷勝譯)の序文に左の如くある。

純然たるキリスト教の道德説に、トルストイの思想上の中心はあつて、その要領をフランスのヴォギエエが次のやうに云つて居る。「惡に逆つてはならぬ。人を裁いてはならぬ。殺してはならぬ。従つて、法廷なく、裁判なく、軍隊なく、戦争なく、牢獄なく、また公私すべての復仇はない。世界の法則は生存競争であるが、キリストの法則は、自己の生存をも他人のために、犠牲にすることである。」以上は短

いなかにはトルストイの思想の中心を掴んでゐると思ふ。

従つて教訓や諷刺や比喩の物語にしても、すべての思想のいづれかを盛つたものである。けれど、トルストイにはすぐれた藝術に對する天分があつたので、これらの物語をも、ともすれば陥り易いところの、いはゆる浅い低い味ひから救つてゐる。

トルストイは一八二八年に生れて一九一〇年に死んだ。伯爵であつたが道を求めて常に身を以て苦しんだ人で、死ぬ時は、遁世の途上、小さな寒驛に於てであつた。立派な文學的著作も多く、宗教上教育上の論文も多いが、これらの童話は「彼がこのほかになに一つ書かなかつたにしても、優に世界的文豪の名を得たらう」といふ評言もあるくらい、勝れたものである。

語 釋

〔復活祭〕 キリストの復活(十字架につけられ洞に葬られて後再び蘇つたといふ事は正統信仰の重要な根幹をなしてゐる)を記念して催すキリスト教の祭、英の原語 *Easter* はサクソン語 *Ostara* (春の女神の名)から出でゐる。キリストの降誕を祝ふクリスマスと共に、キリスト教社會に於て最も喜ばしき祭日。初代教會に於ては一定の日はなかつたが、ニケーヤの會議(三二五)以後は春分

又は春分の日後に來るべき所謂逾越の月の第十四日の直後の日曜日^{イースター}を之に當てた。即ち三月二十二日以後四月二十五日の間に行はれる事となつた。今日ではローマ教會・プロテスタント教會・監督教會及びルーテル教會も之を守り、近來米國の諸教會に於ても遵守さるゝに至つた。

〔早く來ました〕 前項に於ける日取の關係参照。
〔橋〕 ソリ。雪上や氷上で、運搬の爲に使ふ道具。

雪國では重要な交通・運搬機關である。索引方法・形・大きさも國々處々によつて、いろいろある。

北海道で冬季人力車代りに用ひられるものは檜材の滑子から成り、全長五尺程のもの先が曲つて、外部の抵抗力を少くしてゐる。ロシアのものはトロイカ(Тройка)と呼ばれ、スイスの櫓はアルプス山麓の外遊客の競技用として、ウインタースポーツの一となつてゐる。

〔新しい上衣〕 復活祭で晴衣を着せられた譯。

〔刺繡〕 シシウ。ぬいとり。針に糸を通して布を刺し、糸で模様を縫ひあらはす技術。

〔頭巾〕 ツキン。

〔祈禱〕 こゝでは復活祭に捧げる祈り。

〔たくし上げ〕 手繰上げるに同じ。裾を端折ること。

〔蹠〕 クルブシ。下肢の下部に近く内外に突起してゐるところ。

〔怖い〕 コワイ。恐ろしい。

〔汚點〕 シミ。物がついて汚れること。又その部分。

〔お内儀〕 おカミ。おナイギ。他人の妻の敬稱。多く中流以下にいふ。おかみさん。

〔賣言葉に買言葉〕 他から云ひかけられた詞に相當

み。轉じて物分りがよい。

〔可笑し〕 オカシ。

〔トルストイ童話〕 トルストイの童話は彼の純然たるキリスト教的道德觀を基礎とするもので、教訓・諷刺・比喩的なものも多いが、彼の優れた藝術的天分が寓意の淺露を濟ひ、簡素で極めて趣深い童

する語を返す事、悪言を言ひ返すこと(賣言葉とは他の怒りを挑發する言)。

〔悪態〕 アクタイ。悪口をいふこと。その言葉。

〔きつかけ〕 切掛。手初め。はじめり。しを(機)。

〔宥める〕 ナゲめる。(一)なたらかにする。荒立たしめない。濱松二「世に知らぬ御ありさまなりと、

せめていひなだめて、よろこびあはれがりきこゆ」

(二)きびしくしない。ゆるす。寛恕する。續後紀

十九「罪あれど赦し賜ひつ、咎あれど宥め賜ひつ」

(三)宥恕を請ふ。とりなす。調停す。著聞九「か

たうど一人もなければ申しなだむる者なし」

こゝは(三)

〔はてまあ〕 さてさて、まあまあ程の意。

〔事ですかい〕 事ですか(反語)。

〔罪作り〕 ツミヅクリ。罪となるしわざをすること。こゝにいふ罪とは法律上の罪ではなくて、宗

教で、その教へに背く行爲をいふ。人を憎むこと、

争ふことなどみなこの意味では罪である。

〔木の片〕 キのカケ又はキのハシ。

〔疾うに〕 トうに。とつくに。

〔利巧〕 リカウ。利巧ともかく。すばしつこくたく

話として成功した。「愛のある所に神在す」。「イワンの馬鹿」。「人は何程の土地が要るか」は就中一般に流布してゐるもの。(水谷まさる「トルストイ童話集」・濱田廣介「トルストイ童話集」・岩波書店及び春秋社の「トルストイ全集」等参照)

三七 散亂心

一 教材研究

1 解題

本課は幸田露伴氏の文章より採つた。

作者 幸田露伴 カウダ ロバン 名は成行。文學博士。文壇の老大家。慶應三年江戸に生れた。舊幕臣幸田成延の子博學多識、夙に小説家として名を成した。その處女作は、明治二十三年の春雑誌「都の花」に載せた「露園々」である。同年秋「風流佛」を新著百種に出し、それから文名が大に揚り、紅葉と共に新文壇の代表者となつた。この年氏は「國民の友」に西鶴論を載せ、大いに西鶴研究を鼓吹して文壇に大刺戟を與へた。小説としては「五重塔」「二日物語」が傑作である。その文は西鶴に出で、更に之に漢語・佛語を自由に攝取して一家の文格をなし、他人の追隨を許さない。又その作中の人物も、理想的のもので、どの作にも氏の人生觀や理想が現はれて居る。小説家としては明治三十六年に稿を起した長篇「天うつ浪」を完成せずに筆を絶つたまゝで、のち新作を出さない。その後は専ら修養論・史傳・隨筆などを書いてゐる。又、平生能く山水を探り、風月を伴とし、殊に釣魚を好むこと甚だしい。明治四十一年九月京都文科大學講師に聘せられたが間もなく辭した。四十四年文學博士を授けられ、同年五月、文藝院委員となつた。

著述に「葉末集」「小萩集」「露伴叢書」「講言」「長語」「潮待ち草」「心のあと」「天うつ浪」「頼朝」「努力論」「洗心録」「幽秘記」「名和長年」「爲朝」「平將門」「蒲生氏郷」等がある。

2 文意

散亂心とは如何なるものを説き、その人間の成長、完成に及ぼす害のいかに深きかを説明し、向上を志すべき人をして散亂の心の恐るべきを力説して居る。

3 節意

- 第一節 散亂心とは何か。(二七五頁六行まで)
- 第二節 散亂心をもつては事を成す能はず。(二七六頁七行まで)
- 第三節 所謂八人藝は常人の爲す所に非ずして一種の例外なり。(二七七頁七行まで)
- 第四節 偉人と雖も散亂心を忌む、その反對は何曰く不斷心。(二七八頁一行まで)
- 第五節 聰明者は散亂の心に墮ちやすく然するときは事を成しがたし。(二七八頁十二行まで)
- 第六節 結、人若くして散亂心を除くべし。(終まで)

4 句意

(心の一處に注ぐ能はずして、動搖定まりなきを散亂心といふ。)

散亂心の定義である。極めて明快な冒頭の一句はこの一文の主題の何たるを示して遺憾がない。「注ぐ」は水の注ぐ如く心の一處に集中するをいふ。「動搖定りなき」の句は漢文調の特長を示してつよく張つた調子である。

(爲して成らざるあるは)(爲して成す能はざるの實例)

「成らざる」の下、「能はざる」の下に「事」等の體言のあるのが正格である。口語に直せば「爲しても成しとげることの出来ない事のあるのは」等となるのでこれを短く約めた云ひ方である。

生徒にはすでに目慣れない句であるから讀み碎いてやる必要がある。二七八頁にも「人の凌ぐところとなるあるは」とある。

(一時に多くの人の口々に訴ふるを聞き得、云々)

聖徳太子の御幼時の事をいふ。推古紀に「生而能言。有_二聖智_一。及_レ壯一聞_二十人訴_一。以勿_レ失。」とある。

又日本靈異記には「聖徳太子有_二三名_一。一號曰_二厩戸豐聰命_一。二號_二聖徳_一。三號_二上宮也_一。向_二厩戸_一産。故曰_二厩戸_一。六年生知。十人一時訴白之狀。一言不_レ誤。能聞之別。故曰_二豐聰耳_一。」とある。

(事もと例外に屬すれば、常人の學んで之を能くすべきにあらず)

「事もと例外に屬す」といふのは「毫も尙むに足らず」「俗人は驚きて異とこそ爲せ、識者はいかで偉なりとせん」「多とするに足らざる」事の結論的實證を述べたのである。一種の奇術ともいふべきものであ

つて、例外と稱すべきものゝ中に入るといふのは非常に犀利な手きびしい批判である。吾々はときとするとこの八人藝崇拝者になる餘り、奇僻者をたふとみ、それ丈ならばまだよいが自らの常人としての努力をさげすみ勝になるやうに思ふ。

(ニュートンは偉人なり)

前の句で八人藝―天才的人物は例外であると排して來たのであるが、從來偉人と稱せらるゝ人さへも一心にして一時に事を爲す能はず、不斷心こそまことの基礎であると云つた實例をあげて居るのである。だから最初に「偉人なり」と斷定したのである。

(「散亂の心は風中の燈火の如し、明かなりと雖も物を照す能はず」)

作者もこの龍樹菩薩の形容を巧みであると云つてゐるが全くそのとおりで、風中の燈の如き見方は藝術的でさへもある。「明かなりと雖も云々」は力があつてはつきりと云ひ切つて居る。佛語の如き宗教的語録の中には中心を射抜かうとし、更に簡明に眞に迫らうとするために中々生きたいゝ語がある。此一句の如きは散亂心のすべてを云ひつくして餘す所がない。

(聰明の人の、散亂心を以て事に當るによつて、結局敗者の云々)

「人の」の「の」は主格を示す「の」である。文脈はそこより「敗者の地位に立つ」に通ずる。

(因縁の去來し、神情の馳せ逸する)

心中に様々の事柄が混沌として生起消滅し、心持が放逸にしてまとまりなきをいふ。心中去來の物事は

すべて何かによつて起り又何かにはたらかかけ因となり縁となる故、因縁去來と云つた。神情は神と心と相通するのであるが精神内の諸現象をいふ。

(愚鈍の人の専心無適にして事に處し、物に接するの習ひをなせるものに勝つ能はざるや必せり)

聰明なる人を中心として云つてゐるから、否定的な助動詞を用ひて「勝つ能はざるや」と消極的に云つてゐる。「必せり」は漢文調で「きまつて居る」の意。和文脈ならば、「必ず勝つ能はざらむ」とでもある所である。それではよくなるから此句法を用ひたのであらう。

この句は徒然草の左の一節を思はしめる。殆ど同一趣旨であらう。

能をつかむとする人、よくせざらむほどは、なまじひに人に知られじ、うちうちよく習ひ得て、さし出でたらむこそいと心にくからめと、常にいふめれど、かくいふ人、一藝も習ひ得ることなし。未だ堅固かたほなるより、上手の中にまじりてそしり笑はるるにも恥ぢず、つれなく過ぎてたしなむ人、天性その骨なけれども、道になづまず、みだりにせずして年を送れば、堪能のたしなまざるよりは、遂に上手の位に至り、徳たけ、人に許されて、ならびなき名を得ることなり。天下のものの上手といへどもはじめは不堪のきこえもあり、むげの瑕瑾もありき。されどもその人、道のおきて正しく、これを重くして、放埒せざれば世の博士にて、萬人の師となること、諸道かはるべからず。

(聰明未だ衰へざるに及んで、一心散亂の惡習を爲すことなく云々)

散亂の惡習が聰明いまだ失せざる若き時代につけば、その聰明は持腐れとなり、年長けて聰明失すれば、

散亂の心なくとも若き時代の如きめざましき進歩はのぞまれず、且散亂心の惡習あれば猶更再起の見だはない。おそるべきは若くして散亂心に住する聰明者である。

二 指導研究

△散亂心の性質を説き、その散亂心がいかに人の心の生長に妨害になるかを丁寧に説き示したのである。その趣旨とする所きはめて適切であり、その説き方も諸點より見方を色々にして居る點で遺憾がない。そして徒に抽象に流れずかなり具體的な所にひきつけて論旨を進めて居る。たゞ文章の體が從來の課とはちがつてやゝ信屈であり直ちに理解するといふわけにはゆかぬ。本課は急がずに味讀して本旨とする所に入らしめ度く、吾々の生活に肝要適切なるこの意味を汲み取らせたい。文章の自然に流麗にして理解しやす—たとへば、第三十四課「自然の教訓」の如き—のをすなほに導くのも大切な國語國文の指導であるが、かういふ文章を少し骨折つて理解に達せしめるのは又指導の大切な一面であつて、生徒の讀解力に色々な角度を與へることになるのである。殊に骨折つて讀んだ後に内容が抽象的であつては愈々困難であるが、本課はさういふことはないのであるから安心して骨折らせてもいゝのだと思ふ。又讀解の途中に當つて生徒自身の體驗にひきつけてゆくことは是非必要だが、作者のあげてゐる算術をとく時の話のやうなものを教授者をもつと多く用意して生徒の理解の進行に便することが大切であらう。

聰明却つて恐るべしとなす所以、偉人といへども不斷心を以てすといふあたり、八人藝を排して常人と

しての努力をすゝむるあたり、又若くして自らの地歩をかためよと説くあたりは、作者の天才的小説家文學者として夙に名を成して居ることを考へると、これは生きた教訓であらう。文に犯すことの出来ぬ力が――極普通の行文でありながら――あるのは多分に作者の體驗の言の存する故であらう。

△修辭について二三。

爲して成らざるあるは。(二七五頁)

人の凌ぐところとなるあるは。(二七八頁)

專注する能はず。(二七六頁)

右は句意の項にも云つたやうに「成らざる」「ところとなる」「專注する」の下に體言の省略である。

爲して能くすべからざるは。(二七六頁)

學んで之を能くすべきにあらず。(二七七頁)

「能」の字を「注ぐ能はずして」「一心紙上にあること能はず」「成す能はざるの實例」「專注する能はず」「物を照らす能はず」「勝つ能はざるや必せり」等と用ひて居るが、こゝで「能く」と用ひた。これは語の表裏で同一意味である。「能はず」は正面から、「能く」は背面から云つて下に「ざる」「す」の否定詞を置いてある。同一意味をいふのに句法の變化を求めて居るので、「能く……す」の方がやゝ強い調子になる。

心には詩を作り得る人も無きにあらず。(二七六頁)

多とするに足らざるのみならず。(二七七頁)

能くする人も無きにあらず。(二七七頁)

散亂心の戒めざるべからざるは。(二七九頁)

驕慢心の戒めざるべからざるより。(同上)

右は否定詞を二つ重ねてつよく云はんとする所を示して居る。これも前の例によつても分るやうに否定詞を用ふるときには文章の調子が緊つて來るので、かういふ調子高々と求める文章には自然多くなつて來る。生徒に右三例の如き類似の語句をこの一文から摘出させてみるのも文の理解には補助とならう。例へば

べし、 1 覺束なかるべし、(推量) 四例

2 能くすべきにあらず、(可能) 一例

3 業をなすの地をつくるべきなり、(當然) 四例

べかり、 1 能くすべからざるは、(可能) 二例

2 戒めざるべからざるは、(當然) 二例

等である。その外「す」は十例、「ざり」は十一例で否定詞の多い文章である。

三 參考資料

△岩城準太郎氏著「明治文學史」から幸田露伴の小説についての論の一部を引く、

紅葉の逝去に先つこと少時、露伴は「天打つ浪」を「讀賣」に掲げ初めぬ。爾來斷續遂に完成せざり

きと雖、着想詞藻作者の特長を發揮し、小説界一般の潮流に關せず、獨り其の本來の理想的傾向を進め、人生哲學の披瀝益々蘊奧に入り、且つ其の宗教的神祕的思想は新彩を帯びて益々幽玄の致を加へたり。其の文章に至りては、雄健周匝、神來一揮の妙益々加はり、多年の蘊蓄、傾け來りて作家の面目を躍如たらしむ。思ふに露伴は、紅葉と等しく文學的修養を舊時代に得、舊文學を鑑識せる眼光を以て泰西の文學を見る。故に創作の内容外形、共に純然たる新文學なる能はず、言はゞ過渡時代文學者の粹たるに過ぎず。然れども彼が述作に臨むや、深遠なる研究と該博なる徒獵とをなし、準備既に成り材料既に集まれば、乃ち神興を藉りて一氣揮灑、詩想混々として盡きず、詞章陸離として輝く。而も内に養ふ所の氣魄精神は、文字以外作風以外に卓立して容易に他の追蹤を許さず。露伴の如きは實に新舊文學遷轉の軸頭に立ちて過渡時代の精粹を集めたる明治文學史上の一大記念なり。

△柳田泉氏の「幸田露伴」(岩波日本文學講座)より左の一節を引く。露伴の個人的背景である。「教養」の項は本課に直接参考にならう。

露伴小説の人的條件を述べる。露伴の如き個性の強烈な作家の作品を解するには、人的條件を理解することがもつとも必要である。

出身 やゝ小身ながら徳川幕府直屬の封建武士の家に生れた。

遺傳 武士的血統の外に、代々數學、儒學、音樂に秀でた人々が出てをり、父母とも文藝に理解趣味をもち、殊に母が音樂の嗜みは尋常に越えてゐた。露伴の妹は有名な音樂家(幸田延子、安藤幸子兩女

史)であり、兄の郡司成忠も吹笛を能くし、亡弟某氏も音樂辯をもつてゐたといふ。又史學の名家幸田成友(文博)も露伴の弟である。文學藝術の嗜みは十分遺傳されてゐる。

家庭 崩壞期の小身な封建武士の家庭には稀な嚴重な庭訓が行はれてゐた。露伴は自ら語る。

「元來其頃は非常に何か嚴重で、何でも復習を了らないうちは一寸も遊ばせないといふ家の掟でしたから、毎日／＼朝暗いうちに起きて、蠟燭を小さな本箱兼見臺といつたやうな箱の上に立て、大聲を揚げて復讀をして仕舞ひました。」

家庭の空氣で今一つ特記すべきものは、神佛に對する信仰崇敬である。さうしてこれ等への供物その他の世話は少年露伴がその衝に立たされたものである。家事の手傳ひ其の他の點で、露伴の意力の鍛鍊となつたものが少なくない。

教養 いはゆる學校教育の點では、露伴の場合はいふに足りない、小學校から中學一年ばかり、電信修技校といふのに一年半ばかりゐたが、この方は普通教育のための學校教育ではなく職業教育の特殊な學校だから、此の場合勘定に入るまい。その他は變則教育と自己教育に依るものである。變則は所謂漢學塾の事で、露伴は七歳から會田塾で漢學を仕込まれ、暫時中絶して、十六歳から菊池松軒の塾で朱子學を學んだ。これが儒教思想の洗禮である。別に自力で老莊哲學の書物も讀んだ。又當時覺醒した佛教家達が佛教の通俗化社會化に力をつくし、その講談演説が方々にあつた(尙和會、和教會の如き)、露伴はかういふ講話を聞いたのが病み付きで、自分で佛經佛書を讀むに至つた。

文學の方では、十一歳ぐらゐの時から草双紙を読み初め、自雷也物語、弓張月、白縫物語、田舎源氏、妙々車などを愛讀した。支那小説は菊池塾で始めて読み出した。圖書館を知つてからは、圖書館を利用して盛んに讀書した。北海道へ出かける前には、戯作、狂歌、俳諧等にまで及んだ。

露伴の讀書癖は天性といつてよく、少時祖母が、お前はなにをしてゐるのが好きかと問うたとき、露伴は、芋を喰つて本を讀んでゐれば澤山だと答へたといふ。

職業 電信修技校に入つて、技手となつたこと、これは直接文學者的教養上からは得るところがなかつたらうが、露伴をして理工の科學に興味をもたらしめるには與つてゐる。新聞記者として多年つとめたこと、これはいろいろの點で露伴の小説に關係がある。殊に永くゐた「國會」が高踏的な非大衆的なインテリゲンチヤ新聞であつたことは、露伴小説の基調に多少影響してゐよう。

趣味 讀書の外には、旅行と釣魚である。殊に初期の露伴は旅行癖が多かつた、又事實露伴小説の傑作で旅中に靈感をうけて成つたものも少くない。工作のことにもいろいろ興味をもつてゐた。露伴小説に關係をもつ人的條件を數へあげると略ぼ以上の如くなる。

語 釋

〔散亂心〕 サンランシン。散亂は佛語。凡夫の心が六塵の境に流蕩して一刹那も止住しないこと。心が外界の刺戟に應じてたへず動いて、一事に集中

しないこと。
〔動搖〕 ドウエウ。(一)ゆれ動くこと。
(二)心がうごき亂れること。

〔因に〕 チナミに。よつて。耳にすることによつてと同じ意味。

〔忌む〕 イむ。嫌ひ避ける。

〔功業〕 功蹟の顯著なる事業。功績。戰國策齊「功業可明矣」。こゝでは事業程の意。

〔おぼし〕 思はるべくあり。おもはし。思はれる。

の様だ。蜻蛉日記上「親とおぼしき人に」。

〔覺束無し〕 オボツカナシ。(一)分明ならず。判然しない。

(二)心もとない。待遠しい。確かでない。疑はしい。

〔推考〕 事理を推して考ふること。

〔專注〕 専ら注ぐ。注意を集中すること。

〔演劇〕 エンゲキ。劇を演ずる事、又そのもの。芝居。狂言。

〔幻燈〕 ゲントウ。繪畫・寫真其他、物體の像を白幕上に映寫して、説明又は娛樂の用に供するもの。明治の中葉より大正の初めにかけて玩具として盛んに行はれ、活動寫眞の先驅の觀があつた。幻燈が出て來るのは、原文が一昔の作である事を物語つてゐる。

〔茫然〕 バウゼン。あつけにとられた様。ぼんやりしたさま。惘然。江淹詩「酒至情蕭瑟、憑尊還惘然」。

〔自失〕 ジシツ。ぼんやり氣ぬけすること。列子「子貢茫然自失」。

〔聰明〕 聰は耳のさとき義、明は目のよく見ゆる義。耳目鋭敏なること。道理に通じ物事にさといこと。

〔絶倫〕 ゼツリン。倫はともがらの義。等類より抽んで優れること。拔群。絶群。絶類。

〔八人藝〕 ハチニンゲイ。鳴物八人の役を一人で務める藝。腹に鼓をかけ胸に笛あり、頭上にも鳴器あり、足のくびすの上に小さき鉦をつけ、片足には撥をつけ、歩行きながら打鳴らす。又一人で數人の音聲・動作を演ずる藝をいふ。浮世風呂下「八人藝と申して一人で八人の眞似を致します」。

〔めきたること〕 「めく」は他の語について熟語として用ひられた語。その様に見えること。

〔尙む〕 タフトむ。たつとぶに同じ。

〔俗人〕 こゝでは凡俗の輩程の意味。

〔異となす〕 特別珍らしい事と思ふ。

〔識者〕 見識のある者。具眼の士。

〔たまたま〕 適、偶、會。稀に。たまに。たまさか。宇津保初秋「たまたままらせ給へと物せしかど、聞き入れられずなりにき」。

〔方〕 ハウ。角。方形。四角。〔多とす〕 他より勝れりとす。

〔ニュートン〕 Isaac Newton (1642—1727) イギリスの生んだ曠古の物理學者・數學者。數學者としては二項定理・正切法・微積分學を發見し、物理學者としては萬有引力の法則を立てた。二十七歳母校ケンブリッジに數學の講座をもつた。一六六五・六年惡疫流行の爲故郷に潜んで研究中、一日姪から林檎の落ちる話をきいて引力の法則を發見したといふ有名な傳へがある。この二年間には數學上の發明も行はれた。又ケプレルの第三法則から引力が距離の自乗に反比例するといふ大原則を見出し、月の運動其他一切の天體運動に説明を與へた。〔自然法則の數理的研究〕 Philosophiæ Naturalis Principia Mathematica, 1687 参照)。次いで光學方面では光の分散を研究し反射望遠鏡を發明し、ニュートン環 (Newton's Ring) として知られる光の干渉に關する研究をまとめ、「光學」

(Optics) 一卷を公にした。尙數學上では一七〇五年頃よりライブニッツと、月の運動に關してはラムスチードと、永い論争を續けて斯學に貢獻する事が多かつた。彼はその科學的研究の基礎を數學に置き、宇宙の理法を機械論的に説明せんと努力したが、現象の根柢たるべき實在界をもこの法則によつて解釋しようとする傾向がなかつたので、科學者としては珍しい程の有神論者であつた。尙政治家としては大學を代表して再度議員となりホイッグ黨に屬し、造幣局長官ともなつた。又死するまで王立科學協會々長の地位にあつた。ウエストミンスターに葬る。

〔不斷心〕 たえざる心。熟したり冷めたりすることなく、常に同じやうな心持で、持續してある事に努力してゐること。

〔龍樹菩薩〕 最も有名な印度大乘佛敎家。佛滅後六、七百年頃南印度に生る。幼にして穎脫、夙に當時の諸學に通じ、更に小乘を學んだが満足せず、雪山地方に遊歴して大乘の經典を授つたがその義に通じ得なかつた。時に龍王あり、彼を導いて龍宮に至り、多くの大乘の經典を授けた。龍樹研鑽九十

〔馳せ逸す〕 ハセイッす。逸は奔る。失せる。

〔日を累ね〕 ヒをカサね。何日にも亘る。長い時がたつ。

〔頑癖〕 ガンベキ。頑固な癖、容易に抜けぬ習慣。

〔聰明また聰明ならず〕 または復、再び。もはや、既に程の意。

〔無適〕 ムテキ。一事に拘泥することなく純乎として自由なること。

〔必せり〕 ヒツせり。必ずうけあふ。きつときうたと定める。必定なり。

〔天資〕 生れながらの材能性質。天分。

〔庸凡〕 凡庸に同じ。ありふれて平凡な事。

〔下風に立つ〕 カフウにタつ。人の下位にゐる。他人より劣つた地位にゐる。

〔憾む〕 もの足らぬ。遺憾。中庸「人猶有所憾」。

〔負む〕 タノむ。たのみにする。「負勇」「自負」。

〔驕慢〕 ケウマン。おごりたかふる。漢書五行「奢淫驕慢、則士失其性」。

〔衰耗〕 スキマウ。衰へ減り敗る。

〔衰へざるに及んで〕 衰へない中の意。

〔地〕 素地・土臺の意で用ひてゐる。(以下本文外)

日、大いに悟達する處あり、南天竺に出で憍薩羅國引匹王の尊信を受け、其地に止つて大乘を弘め、外道を破したといふ。龍樹は俗に「八宗の祖師」ともいはれて、大智度論・中觀論・十住毘婆沙論等の著述は大乘思想の根柢をなしてゐる。彼の學說中主要なるは特に中道實相論で、一切の現象は因縁和合して生ずるもの故、その性皆空、一切の迷執を否棄した處に諸法の實相あり、之涅槃の天地であると。

〔大賢〕 非常なる賢者。

〔中年〕 少年と老年との中間の年頃。即ち三四十歳頃。

〔凌ぐところとなる〕 爲所凌。凌がれる。追ひぬかれる。

〔算〕 計算もしくは算術。

〔做す〕 ナす。作と同じ。

〔因縁〕 インエン。インホンと發音する。(佛語) 因は物事を成立せしむる種子、縁は之を發生せしむる力。人事皆この因と縁の關係によつて果を結ぶに至るといふこと。こゝでは、いろんな事程の意。

〔神情〕 神は心に通ず。

〔心〕 心があるべきところ。

〔大學〕 ダイガク。孔子が上に立つべき者の道を説いた本で、論語・孟子・中庸と共に四書の一。石經大學・古本大學・朱子大學等の異本がある。宋の仁

國文叢書 第二版 教授參考書 卷一……

宗天聖八年大學を臣下に賜り、又司馬溫公にも大學廣義の著があるが、これを單行本としたのは朱子に始まる。

三 知行合一

一 教材研究

1 解題

本課は南條文雄氏の「修養録」より採つた。

作者 南條文雄 ナンデフフミヲ 嘉永二年五月美濃大垣に生れ、福井縣の南條氏に養はれた。佛敎學界の權威であつた。明治九年英國に留學し同十七年歸國。文學博士。昭和二年十一月九日没、享年七十九歳

2 文意

頼山陽が若くして一世に名を成してゐた頃、肥後の法海といふ眞宗の僧に、その知と行との不一致を誠められて、翻然悟つたといふ話。

3 節意

第一節 山陽と雪華上人。(二八〇頁七行まで)

第二節 雪華上人の紹介により面會にいつた法海老師に山陽が叱られてかへつた話。(二八三頁四

行まで)

- 1 楠公傳の批評を乞ふ。
 - 2 忠臣傳をかく者が不孝であると叱咤さる。
 - 3 山陽歸來して更に雪華上人に誠められ悟りを開く。
- 第三節 結。以上の批評として山陽の其後を述ぶ。(終まで)

3 句意

(老師はその表紙にちらと一瞥を與へたまゝで、手に取らうともしなかつた。)

表紙を見たまゝで手にも取らない。この行爲がすでに山陽に對しては手きびしい批判である。それが驅出しの文章家ならいざしらず、一筆の力無名の山河をも天下の名所となす名文章と稱せられて居る人に對してである。聲名によつてその人を崇ぶのは俗人の爲す所である。さすがは老師胸のすくやうな鐵槌を一下した。

〔この頃噂に聞けば藝州の儒者で……では御邊の事でござつたか〕

秋霜烈日の如き文句である。酒をのみ親を省みずしかして忠臣傳を書いたといふ、それがお前かといふので「實に怪しからん奴だと思つたが」などの説明がない丈するどく人の心を射て止まない。怪しからん奴だなど、特に言にいふ要もない程ひどい奴だといふ叱咤である。

次の句はその叱咤の意の説明である。そして「そんな不孝者には會ひたうない」は結論である。それ以上云ふことはないのであつた。

(山陽は、冷たい汗が首筋を傳うて流れるのに氣が附いた。が、今は取着く島もない。)

「氣が附いた」のであつてそれ迄は餘りのきびしさに吾を忘れてしまつた。筆をとつては天下古今を呑み叱咤するの概ある山陽にして然り、一生にふたゝびとない尊い時であつた。「會ひたうない」。これでもう話は分つて居る。取着くべき島もないのである。老師の叱咤は徹底して居つた。

〔さうであつたか。それはよく言つてくれた。……〕

親友である山陽を罵倒してくれたのを忝いといふ。この雪華上人も亦道を知る人である。さうしてやさしく又正しく今後の山陽のすゝむべき道を示してやつた。この人を導く態度といひ「よく言つてくれた」といふ心持といひ、いづれをきいても床しい高僧である。

〔法海師は夏日の日、上人は冬日の日だ〕

二人の憎を夏日の烈しさと冬日の和やかさにたとへた。一は人を覺醒せしむべき折伏の力を持つ、一は人をして大慈の心にすゝましむべき攝取の力を持つ。山陽はこの語を覺えず立上つて云つてゐる。折伏の後の激しい感動から今後のこと考へる餘裕もなかつたのに、今進路を示されて立上つたので、即ち勇躍歡喜である。この句をいふや否や安藝に旅立つてゐるといふ消息も面白い。

「修養錄」の序文には左のやうにある。

「其時山陽の申したのは（海公は夏日の日の如し、上人は即ち冬日の日なり。）とあつて、此は春秋左氏傳の中に在る事を持ち出して評を致したので、法海講師の嚴格なる事は夏の太陽の如く畏るべきである。又雲華院師の親切なる注意は冬の太陽の如く愛すべきであるとして、其翌日早朝に京都を出立して藝州に歸省せられたとの事であります。」

〔待〕與歌〕

與行吾亦行 與止我亦止 與中道上語不_レ輟 歷指某山與_二某水_一 有_レ時俯理_二襪結解_一 母呼_レ兒前兒曰_レ

唯_二山陽一路十徑還_一 省鄉每計瞬息裡 二毛侍_レ與敢言_レ勞 山驛水程皆鄉里 於_レ兒熟路母生路 變_レ眸常

嚮母所_レ視

〔「虚にして往き、實にして歸る」〕

虚心を以て入に聞きなにかを得てかへるの意。實にしてかへる爲めには虚にして往くことが必要である。修養録にも次の如くある。

「もと此の四字（虚往實歸の四字をさす）は、支那の曇鸞といふ高僧の往生論註と云ふ書物の中に出てありまして、私は明治元年に初めて京都の學寮で此の書物の講釋を聞ききました。此の四字の意を早く分る様に申せば、親類や友達の家に招かれて晚餐の饗應に預る様な時は、空腹にして往つてこそ、先方の馳走を満腹に戴き、心底から禮を申して歸れる譯で、人の話を聞く時も同様である。虚心平氣で往けば先方の話を十分に聞き取りて歸ることが出ます。若し自負自慢で、人の教を受けると云ふ様な餘裕がなければ、更に徳の無いばかりでなく、大きな損をして笑の種となるばかりである。」

二 指導研究

本課をよんでゆくと先づ法海老師の折伏の態度や、次いで雲華上人のゆきとゞいた教示やが、目立つて来る。この二人の僧のすぐれてゐたことはこの話の示す通りであり、句意の項でも詳細に述べた所である。しかし本課の目的とする所はこの二僧の逸話ではなくて、さしも一世に名をあげた豪快無比の文人山陽が虚にして實を得たといふこの態度に學ぶべきものがあるといふ點にある。他人からほめられるときは、耳に入らぬやうにして居ても、程度以上に之を聞き、之に反するときは或反撥を以て聞き更に之を排除して自尊の念に居ることが多いのである。これは人夫々に自尊心があり謙虚にして人の言にきくことは稀なる場合であるからである。即ち忠言を呈してくれる人が自分の信する人か、又は人格すぐれ自分を壓服せしむべき包容力あるときかである。だから謙虚にして人の言にきき得る人は偉い。山陽の場合は忠言を呈した僧もすぐれてえらかつたが、自分の今迄の聲名などに捉はれずに、一個赤裸々なる人間となつてこの叱責を眞正面に受けたのは更に偉いのである。こゝをよく味はしめ度い。さうして孝心あふるゝ詩を母に從うて作つてゐるのは、老師の言の折伏の秋霜の如きに比して秋の夕陽の和やかさを感じしめてうれしい。肝に徹する叱責を受くることは生涯に於て文字どほり有難い經驗である。幸福である。これは求むべきものでもあり、而も求めても中々得られないものである。それだから與へられた機會に之を正面から受け

て逃げず追はず辯解せずすゝむべき心持を有たねばならない。吾々はいかにも凡下であつてこのありがた
い機会を求めようとせず、むしろ逃げて安逸を食らうとする。而も吾々には叱責が不必要かといふと斷じ
てさうではないのであるからなげかはいし次第である。苦しんで正面を切ることを山陽のこの話によつて
再考三思せしめられる。同時にこの一線を越えたら凡下といへども、少しは路が展げようと思ふと、希望
の胸中にうごくものも感ぜられる。思へば山陽は幸な人であつた。

三 參考資料

△本課は南條文雄氏著「修養錄」(東京井冽堂、明治三十九年發行)の第三章「虚往實歸」の項である。
しかし原文をかなり添削して居るので左に参考として老師と山陽の面會の節の原文を添へる。なほ右の引
用文の前に「虚往實歸」の四字の説があるが、それは句意の最後の項にあげてある。左の引用文の中で「皆
さん山陽となつて考へられましたら云々」以下に指導研究に述べておいたやうな著者の意圖がよく分ると
思ふ。山陽の語の「眞に一宗の學頭なり」の説明に著者が「能く私を不孝人と叱られた」が附加して居る
のはやはり著者がどういふ點をめあてにして居るかゞ判明する。

「今から七八十年も昔、易行院法海といふ講師がありました。その時分に名高き學者であつたから頼山陽
といふ人が、友人の雲華院大舎師の紹介で始めて講師に會ひました、丁度講師は讀經中でありましたが、
山陽はそこへ来て自分の作た楠公の傳を見せました。多分日本外史の第五卷の草稿でありましたらう。所

が講師の挨拶がいかに無愛相でありました。小栗憲一氏の豊繪詩史の雲華上人の傳の中にこの事が出て
ありまして講師のその時の口上は左の如くに書いてあります。

この頃聞く藝儒久太郎なるもの京に在りて酒を飲み、三年其親を省せず、而して忠臣楠公の傳を作ると、
足下豈に是ならんや、凡そ忠臣は必ず孝子の門に出づ、今不孝人の筆を以て忠臣を傳す、楠公として知
ること有らば必ずこれを屑よしとせざらん、老禮も亦不孝人を見ること屑よしとせざるなりと言ひ畢り
て坐に復り、經を讀むこと初めの如し。

とありて平たく申せば、

承けたまはる所、藝州の儒者頼久太郎と云ふ者は京都に居て酒を飲む間はありても、もはや三年間も親
に歸省もせず、さうして忠臣たる楠公の傳を作つたといふ事だが貴様の事か、全體忠臣は必ず孝子であ
るぞ、今年も歸省もせぬ不孝人の筆で忠臣の傳を書いても楠公が御存知ならば決して満足はせられま
い。此老僧も不孝人を見ることは望まない。

と申して元の座に立ち歸りて、讀經をつゞけたと申すのであります。皆さん山陽となつて考へられました
らいかゞでありませう。此老僧は失敬なりとて拳骨でも頭上に加へたき程の過言の様であります。こゝ
が山陽の心が見られる處で其時

山陽背に汗して出で、曰く、眞に一宗の學頭なり。とあります、能く私を不孝人と叱られた、本眞に一
宗の學頭であると、汗を流して慚愧したのである。

△同じく第五章「佛教と家庭」の一節に「母子の情」といふ項がある。これは著者の佛教觀と母子觀を示して居るもので丁度本課に山陽とその母の話も出て居るから引用しておく。

「私は明治十二年以來細々ながら梵語の研究をつゞけて居ますから梵語の上から母子の情と云ふ題を以て佛と衆生との關係の事を話して見ようと思ふのである。梵語と云ふのは天竺の古語で其組み立て方がことに微細でありますから之を取り調べるときは餘程面白きことが發見されるのである。今其中で最も私共の心に興味の外に感謝の情を引き起す語を唯一つ取り出して見ましやう。それは「ブラサーダ」といふ梵語である。此は釋迦如來も御說法の時に度々御用ゐになりました語で近くは淨土の三部經の中の大經にも少なくとも兩三度は御用ひになつて居ります。それを康僧鏡と云ふ人の翻譯では四十八願の中の第三十五、即ち女人成佛の願文では歡喜信樂、又第十八願成就の文では信心歡喜と譯してある。

さて「ブラサーダ」と云ふ梵語はどうして出來た語であるかと申すと始めに「ブラ」とあるのは接頭語と申して、一つの語の始めに附け加へて、其語の意味を明かにすると申す様なる時に必要な語で言語の部分である、併しながら次の「サーダ」と云ふのが正しく此語の本體であります。全體梵語では語原とか語根とか云ふて、極簡單なる、言語の根本原體があつてそれに前後又は後ばかりか、前ばかりかに、附け加へをしてそれと同時に語原の中にも變化のあることもあります。それで今も「サーダ」とは語原の「サド」を「サード」と引き延して其後に「ア」と云ふ音を加へて「サードア」を一連に發音して「サーダ」となつたので、此れだけで「坐スルコト」と譯すべき語である。それに前と譯すべき「ブラ」を加へて「ブラサ

ーダ」とは前に坐する又は進んで坐するといふ成り立ちの語であります。

私共が佛の大慈悲心を信じたる上からは歡喜心を以て進み出で佛の前に坐する。其心の中は信じて疑はざる實情にして、それが丁度幼少なる兒童が眞實の母親の前に遠慮なく進み出て坐り込んだる情である。其時の兒童の心中の喜びは滿面に顯はれることであります。此歡喜心は親を信する眞心から起るのであります。前後次第を申せば兒童よりは却つて親の歡喜心が先きであらうと思はれます。十月満じた曉に安産したる其時の母親の喜びは懷妊中の苦しみも出産の時の苦しみまでも一時に忘れるごとは心地觀經の報恩品と父母恩重經との御説である。それで信心歡喜の眞味は全く此と同じことである。即ち「ブラサーダ」と云ふ梵語の説明の中に最も私共の感服したのは智慧を父とし慈悲を母として其間に生れたのが此歡喜信樂とか信心歡喜とか譯する信仰心にして力なき者が力ある者をたよりにする心であると申してある。これが眞大師の御説に符合する次第であります。

祖師の御語に「まことに智んぬ徳號の慈父なくんば能生の因闕けなん、光明の悲母なくんば所生の縁乖きなん能所因縁和合すべしと雖も、信心の業識に非ずんば光明土に到ることなし」と仰せられて、名號六字を拔苦の慈父に喩へたまふ、此は佛の智慧の念佛である。又遍照の光明を與樂の慈母に喩へて、此光明の御催しに由りて、名號の佛因を我等の心の中に回向したまふ佛心が我等の信心となる。此れが丁度母親の安産の喜び心が、兒童の心に貫徹して、母と見るや否や、遠慮會釋なく進み出て坐り込む安心は、全く母の心の其儘が、兒童の心に入り満ちたのでありますまいか。かくの如くに母子の眞情が分つたならば、それ

に比較して、佛の大慈悲心を喜ぶことが、出来るかと存じます。

釋

〔豊前〕 ブゼン。福岡縣東北部、及び大分縣西北の一部にまたがる國名。

〔山國谷〕 ヤマクニダニ。大分縣下毛郡山口川上流の溪谷。所謂耶馬溪。

〔眞宗〕 淨土眞宗の略。

〔大舎〕 タイガン。徳川末期の畫僧。豊後の人。東本願寺の講師で、蘭竹を畫くに巧みであつた。或人新たに來た清の東橋居士著の墨蘭譜の蘭が彼の筆と似てゐたので、上人の蘭譜が出来ましたといつて見せた處が、雲華大いに喜び、筆も益々進んだといふ。

〔墨客〕 文墨を善くする人、書畫を書く人。李頎詩「洛陽墨客遊雲門」

〔景勝〕 風光のすぐれたところ。

〔耶馬ノ溪山云々〕 山陽の詩は「西遊稿」にあり、次の如くである。

峰容面々趁看殊 耶馬溪山天下無

安得彩毫如董巨 生謙一丈作横圖

〔耶馬溪〕 大分縣下毛郡上津村。山口川の上流一帯十數里に亙る奇勝。日豊線中津驛より耶馬溪の柿坂驛まで耶馬溪鐵道があつて車窓の觀賞も自由である。樋田村に近い鮎返から次第に景色よく、佛坂より青生の洞門へ出ると路は山腹を穿ち川に沿うて通ずる。溪畔左に二十町、一峯の頂に羅漢寺があり、形勝の美指呼の間に集る。附近に大走りの勝がある。耶馬溪橋から柿坂を経て山麓の猿飛に至る間は、造物の奇怪筆紙に盡しがたい。柿坂驛の背後には山陽筆投げの名所がある。尙近時南方更に新耶馬溪の名が喧傳されてゐる。因に「豊前志」に耶馬溪の名について「此の邊(山國郷)惣べて溪山の景色甚だ面白し。然はあれどさばかり世に知る人もあらざりしを、頼襄が西遊稿に「耶馬溪山天下無」と稱へしより其名天下を動かす許りになりたるは嬉しくなむ。但し山口を耶馬溪と書きし

は如何ぞや、山溪にては詞足らず、最ひが事也」と。

〔著聞〕 チョブシ又はチヨモン。名高くなる。世に喧傳される。

〔八代〕 ヤツシロ。熊本縣八代郡の町。球磨川の河口、八代海に臨む河港。松井氏三萬石の舊城下。人口現在一萬三千。

〔易行院法海〕 イギヤウインホウカイ。眞宗大谷派の講師。字は月藏、日南又は橘州と號す。明和五年豊後國日田の長徳寺に生る。寶月の子。後八代の光徳寺に主となる。早年得度し、高倉學寮に入つて宗餘乘を攻究、文化元年以來連年諸經を講じ、十一年八世の講師となつた。時に年六十一。翌年觀無量壽經を講じ後、無量壽經、文類聚鈔、安樂集、玄義分等を講じ、天保五年八月、六十七を以て寂。識見高邁、本文の山陽との對面談は高僧・逸才の逸事として世に有名なるもの。著に往生要集講義以下講義を編んだものが數多に上る。(佛敎大辭彙。高倉大學寮沿革略、先哲逸話参照)

〔途次〕 トヂ。途すがら。みちついで。

〔老師〕 老先生若しくは老御坊。

〔端坐〕 行儀正しく坐る。威儀を亂さず坐る。

〔やをら〕 やはらと同じ、そろそろ。徐かに、徐々と。枕六「小さうじの後にてやをら食ひければ。」

〔初見〕 初會見。

〔楠公傳〕 南北朝の時南朝の後醍醐天皇に忠節を盡して湊川に壯烈な戦死を遂げた楠正成の傳記。

〔稿本〕 本刷りならぬ原稿本。

〔慇懃〕 丁寧。ねんごろ。崇め敬ふさま。

〔一瞥〕 イチベツ。一度流し目に見やること。チラと目をやること。

〔藝州〕 ゲイシュウ。安藝國。今の廣島縣西半。

〔とやらいふもの〕 とかいふもの。

〔御邊〕 ゴヘン。同輩に用ふる對稱代名詞。そこもと。そなた。貴殿。貴所。貴公。尊公。平家一、鴨川合戦

〔今度御邊をば一方の大將にたのむなり。〕

〔電〕 イナヅマ。稲妻。電光。

〔面を伏せた〕 面はオモテ又はオモ。

〔金言〕 龜鑑とすべき語。貴ぶべき言。名言。格言。

〔大それた〕 あるまじきこと。極めて怪しからぬこと。毛吹草「だいそれた事。大鷹はそれぬものな

るを、それがそれたるは、是れあるまじき事の有りたるなり。故に喻へいふと云へり。

〔愚僧〕 僧侶の自稱。

〔會ひたうない〕 うはくの音便。

〔學頭〕 ガクトウ。(一)勸學院(藤原氏の子弟を教育する爲弘仁十二年藤原冬嗣の創立した學校)の職員。別當の次に位す。學生の中から才學の秀れた者を選んで補した。

(二)社僧の職名。

(三)學校長又は主席教師など。

こゝでは莫然と(三)の意であらう。

〔搾り出された〕 シボリダされた。感銘の深さを示して居る。

〔陽明學〕 ヤウメイガク。明代の學者王陽明の創めた學問。王陽明は余姚の人、名は守仁、字は伯安、陽明はその號、王羲之の子孫といふ。幼にして豪邁不羈、十五歳京師に出で、四方經略の志を抱いて屢々朝に上書せんとしたが、父之を狂となして許さなかつた。弘治元年室を陽明堂中に築いて導引の術を行ひ(陽明の名はこゝに起る) また佛道を學びもしたが得なかつた。進士及第致官したが、當の權門劉

瑾の旨に逆ひ、龍場驛の丞に貶せられた。途上の暗殺の手を逃れて謫地に到り、刻苦よく僻地に龍岡書院を設け門人と共に講習對論患難を忘るゝが如く、地人を畏服せしめた。後再び各地に企任、山賊を平げ寧王の亂を征し、正徳六年功を以て新建伯に封ぜられた。嘉靖六年西廣總督として南邊土蠻の亂に赴き、歸途福福縣省の南安に病没。年五十七。陽明初め任侠に溺れ、騎射に溺れ、詞章に溺れ、神仙、佛氏に溺れたが、三十七歳忽然として聖賢の學に歸した。陽明の五溺一歸正といふ。五經臆說 を著した後、三十八歳初めて知行合一を説き、四十歳朱陸の學を論じ、正徳十三年「古本大學」を訓し「朱子晚年定論」を著した「門人薛侃は(傳習錄)を刻した。五十歳に至つて初めて致良知の教を揚げ、良知の二字實に千古聖々相傳の一點滴膏血なりと斷じた。生涯その思想、事功共に顯はれ又兼ねて詩文に長じたので、その思想人格今尚人を動かすものがある。

〔知行合一〕 先知後行の説と先行後知の説に區別して、知(る事)と行(ふ事)の並進合一を以て實踐の眞諦根本義と唱へ、當時世人の空論に流れて

實行に缺けたのを戒めたのである。曰く「未だ知つて行はざる者あらず、知つて行はざるは唯々之未だ知らざるなり」「眞知は即ち行ひたる所以なり、行はずんばこれを知れりといふに足らず」「知行は並進なり、宜しく前後を分別すべからず」云々。

〔上人〕 シヤウニン。上徳ある人。我が國では多く高德の隱者又は念佛者を上人といふ。後世勅許によりて上人と號するのは淨土宗に限るといふ。但し徳號であつて官位ではない。

〔行李〕 旅行時の荷物。又はそれを入れる竹又は柳などで編んだこり。

〔とゝのふ〕 調へる。まとめる。收める。落ちなく用意する。

〔發足〕 ホツソク。出發。出立。

〔膝下〕 ヒザモト又はシツカ。ひざもと。親の許。

〔輿〕 コシ。乗物の名。こゝでは駕籠の意にとつて

よい。屋形の内に人を乗せてその下に二人の轎があつて、肩に昇き上げ、又は手で腰の邊に擡げて行く。平安朝時代は天皇の乗御に限られた事もあつた。鎌倉時代以後は鳳輦、葱花輦の外は臣下も乗用し、室町時代には大禮には牛車を用ひるが平常は輿を用ひ江戸時代に入つては牛車は殆んど用ひられず輿を以て規式の用とし普通は駕籠を用ひた。

〔基づくところ〕 原因、由來するところ。

〔虚心〕 心に何の考へもいだかぬこと。心にわたかまりない事。無心。先入主や感情にさまたげられず、そのまゝたゞ受容れた事をいつてゐる。

〔虚にして往き云々〕 智徳のないものが聖賢の教を受けて智徳を充實して歸ること。莊子、徳充府「虚而往實而歸、固有不言之教、無形而心成者耶」

三 阿蘇の麓

國木田 獨歩

一 教材研究

1 解題

本課は國木田獨歩の「忘れえぬ人々」より採つた。

作者 國木田獨歩 クニキダ ドツボ 本名哲夫。明治四年七月十五日、千葉縣銚子に生れた。七年一家上京して一時東京下谷に住んだが、九年父が岩國裁判所に奉職したので山口縣へ轉住、二十年山口中學校を中途退學して、上京、東京專門學校入學。基督教に信仰を持ち出したのは、此學生時代であつたが、此學校も退學し、二十六年、徳富蘇峰の紹介で大分縣佐伯鶴谷學館の教師として赴任した。彼が、自然を知つたのは此時である。二十七年上京、國民新聞社に入り、日清戦争の時従軍記者となり、「愛弟通信」を書いた。二十八年(二十五歳)歸京、佐々木本文支の女信子と相知り、周圍の反對を押切つて結婚し、逗子に居を定めたが、翌二十九年四月、半歳をすぎない中に、信子は彼を棄てて去つた。此時代の焦慮煩悶は其「欺かざるの記」に詳しい。同年末、田山花袋、柳田國男と相識り、特に花袋とは翌年、日光山中の一寺に籠つて生活した事がある。「源おち」(文藝俱樂部)は此時出來た。三十四年「武藏野」出版、三十五年近時畫報社に入り、東京畫報(三十六年)新古今文林(三十八年)等を發行した。三十八年七月「獨歩集」、三十九

年「運命」出版、此時分から文壇に認められた。四十年「濤聲」出版、獨歩の名は自然主義作家として、文學界を壓した。が之より前、肺を侵され、四十一年六月二十三日、相州茅ヶ崎南湖院で歿した。年三十八。

2 文章

弟と共に阿蘇山に登り其雄大なる景觀を恣にして歸途麓の村にて阿蘇山頂の夕月を仰いでみると、聲のいゝ馬子の唄ひつつ過ぎゆくに遭つたといふ紀行感想文。

3 節案

第一節 阿蘇山頂に到つて荒涼たる冬の山に立つ。(二八五頁四行まで)

第二節 寒さに一度阿蘇神社迄下りたが再び山頂に到つて雄大なる舊噴火口跡を眺めた。(二八七頁五行まで)

第三節 下山して夕方の村に入る。(二八八頁十一行まで)

第四節 仰ぐ阿蘇山頂の夕月と澄んだ聲の馬子。(終まで)

4 句案

(満山殆ど雪を見ないで、たゞ枯草が白く風にそよぎ、燒土の或は赤き或は黒きが、舊噴火口の名残を彼處

此處に止めて斷崖をなし……)

冬の山の荒涼たる風色をうつして遺憾がない。白くそよぐ枯草、赤に又黒にみえる舊火口壁の焼土、いかにも寂寥たる趣である。この寂寥たる冬の山が常に火を噴き沸りたつ火口湖を抱いて居るのは思つてみても壯快である。

(天地寥廓、而も足もとでは凄まじい響をして白煙濛々と立騰り眞直ぐに空を衝き、急に折れて高嶽を掠め、天の一方に消えて了ふ。)

「天地寥廓」は見渡す裾野と目に入る火口壁と一體の空漠として冬の寂寥を藏する景色を一言にして云つたので、さてわが立つ山の身近くには、凄しい噴煙が、うごき立ち上つて居ることに心を向けていつた。響、立ち騰る煙、火口をいでて風に忽ち流れ消えゆく、瞬時にして複雑なる光景をよく寫し得て居る。

(壯といはんか、美といはんか、慘といはんか。)

壯大にして而も美麗であるが、これは更にいたまじき迄に心持に迫つて来る。そこで慘といはんかと云つた。(此時天地悠々の感、人間存在の不思議の念)シンセリティー (Sincerity) とヒューマニティー (Humanity) の詩人獨歩の文中、至る處に出て来る文字である。「欺かざるの記」半夜燈前の感慨も「空知川の岸邊」密林の冥想も之である。

(僕等がその夜疲れた足を踏みのばして一夜の夢を結ばうとしてゐる宮地といふ宿驛)

はじめ通讀してゆくときに前の「今しも斜陽靜かに云々」は山上よりの眺望の感であるのに、句意はすでにこの作者等はねむらうとして居るやうに感ぜられた。これは宿驛にかゝる形容の句が餘り長すぎ、且動作の説明がこまかすぎる爲めであり、又この文が回想して書いて居る心持のために、「今夜」とはすして「その夜」などと物語的に云つたのがいけなかつた。こゝはもつと簡明に書く必要のある所で、生徒に疑問の起りさうな個所である。

(麓はちきそこに見えてゐても容易には村へ出られない)

阿蘇山より下りゆく時の情景は全くこのとほりである。麓と思つてゐる所がしばらくあるいてみると山と仰がれたり、火口跡の草原であつたりする。廣大な包容力を持つた麓である。日も沈む頃、里の燈を目にしながら重い足で山路を下る時の經驗によくあること。その頃は、夜を迎へようとする山の威壓と五體の疲れで、口も開かず休息もせず、懸命に前進又前進するものである。

(日暮れて路遠きを感じながらも、懐かしいやうな心持)

旅先で日暮れになる時は一種特有の心持がある。宿はとはいがもう人里に入つて灯のついた道があるといふときほど憧憬的なさびしさとなつかしさに充されることは少い。この作者の場合は荒涼たる冬の山からこの人寰に入つて來たのであるからその感は深かつたに相違ない。芭蕉の「草臥れて宿かる頃や藤の花」である。

(振向いて西の空を仰ぐと、阿蘇の分派の一家の右に、新月が此の窪地一帯の村落を我が物顔に、澄んで蒼味がかつた水のやうな光を放つてゐる。)

冬の夕月であるから澄んで蒼みが、つて居る。今迄夕ぐれの道のあるきながらさびしい又なつかしい心持になつてゐた作者はこの月に自らの心持を見出したやうな安らぎを覺えたことであらう。

(空車らしい荷車の音が、林などに反響して虚空に響き渡つて次第に近づいて來るのが、手に取るやうに聞えた。)

冬の夕ぐれの冴へはじめた空氣にひゞいて、自分の今來た方から、いづこからか湧いたやうに、來る空車。人なつかしい夕べと冴えた新月と、作者の心持は澄んでしづかである。この空車の描寫はその折の作者の聲をそのままきくやうに思ふ。そして空車の音につれて馬子唄がきこえて來たのであつて、獨歩の眼は澄んでゐたことであらうとさへ想像される。

これは「武藏野」に引かれてゐるツルゲネーフの文末を思ひ合せる。曰く「誰だか禿山の向うを通ると見えて、から車の音が虚空に響きわたつた……」。

(どんなに僕の心を動かしたらう)

人情風俗や地理的環境を異にした未知の地に旅する時、殊に土地特有の情景が夢幻的な月の光を浴びて旅人の眼前に展開され、或は特異なる音聲の中に傳はつて來る場合などの氣持。

(見送つて、そして阿蘇の噴煙を見あげた)

馬子の姿と阿蘇の煙は、筆者の詩心に、二にして一、有機的な渾一體である。

因みに原文は

『忘れ得ぬ人々』の一人は則ち此壯漢である』と續いて次の四國の條にうつつてゐる。

二 指導研究

本課の出所たる「忘れえぬ人々」は多摩川畔溝口の旅人宿へ泊り合せた文士と畫家が夜半四方山の話の末、文士の「忘れえぬ人々」といふ原稿の話となり、こゝで文士がその内容について三人の「忘れえぬ人々」のことを話したといふ筋である。第一は瀬戸内通ひの汽船の上から孤島の磯べりに何か拾つて居た男のこと、第二はこの阿蘇山麓で月夜に見た馬子のこと、第三は四國の三津濱の魚市雑踏の中にみた琵琶僧である。文士はこの話の最初に「忘れえぬ人々」を説明してかう云つて居る。

「親とか子とか又は朋友知己其ほか自分の世話になつた教師先輩の如きは、つまり單に忘れ得ぬ人とのみいへない。忘れて叶ふまじき人といはなければならない。そこで此處に恩愛の契もなければ義理もない、ほんの赤の他人であつて、本來をいふと忘れて了つたところで人情をも義理をも缺かないで、而も終に忘れて了ふことの出來ない人がある。世間一般の者にさういふ人があるとは言はないが、少くとも僕には有る。恐らくは君にも有るだらう」

更に忘れえぬ三人の男の話がすんでから文士が附加した言葉は猶更よくこの作者の心持を語つてゐる。

「要するに僕は絶えず人生の問題に苦しんでゐながら又自己將來の厚望に壓せられて自分で苦しんでゐる不幸な男である。そこで僕は今夜のやうな晩に獨り夜更けて燈に向つてゐると此生の孤立を感じて堪

へ難いほどの哀情を催して来る。その時僕の主我の角が、ぼきり折れて了つて何んだか人懐かしくなつて来る。色々の古い事や友の上を考へ出す。其時油然として僕の心に浮んで来るのは則ち此等の人々である。さうでない、此等の人々を見た時の周囲の光景の裡に立つ此等の人々である。我れと他と何の相違があるか、皆な是れ此生を天の一方、地の一角に享けて悠々たる行路を辿り、相携へて無窮の天に歸る者ではないかといふやうな感が、心の底から起つて来て、我知らず涙が頬をつたふことがある。其時は實に我もなければ他もない、たと誰れも彼れも懐しくつて偲ばれてくる。僕は其時ほど心の平穩を感じることはない。其時ほど自由を感じることはない。其時ほど名利競争の俗念消えて總ての物に對する同情の念の深い時はない。」

かうした心持から書かれたものであることを考へると、本課の文の色彩がよく分ると思ふ。自然をみても忘れえぬ人を包む自然として、人と忘れえぬ自然として居るのである。人も又自分と「相携へて無窮の天に向ふ」といふ心持であり、伴侶であり、朋友である心持である。文章にきびしいものがなくて、ロマンチックな色の濃い、美はしい感じのするのは、さういふ所から起つて居る。「忘れえぬ人々」は、文士と畫家の邂逅として小説的に記されてあるけれども、やはりこの三人の「忘れえぬ人々」の實際は獨歩自身の實經驗であらう。文章にもさうした根柢があつて、そこに限りなきロマンチックな情緒によつて色どられて居ることを思はねばならない。事實に即きすぎず離れすぎず、巧みに抒情詩的雰圍氣がもし出されて居るのである。

本課の文が流るゝ如く快くよまれ、而も空想的に走らず十分阿蘇の自然を髣髴せしめることはさういふ所に原因しこの一文の特長に外ならない。

三 參考資料

獨歩の青年の頃の傾向の一斑を示すため、「國木田獨歩」(鹽田良平)―岩波日本文學講座―より一節を抄する。

「獨歩が鳩山事件に連關して、政治科を退學したことは、右の精神過程からいへば、彼としては、寧ろ望ましい當然の轉向といへるのであつて、其の後山口縣麻郷村へ歸り二年程して廿五年八月再び上京し、雑誌「青年文學」等を發刊したが、幾許もなくして中止し、彼の生活の補助者たる父も、山口縣で失職した爲、送金が途絶えることになつたので、廿六年九月末九州佐伯の鶴谷學館の教頭となつて赴任した。此學校は、毛利子爵の設立したもので、中等教課の一部を教へる。勿論不正規な學校であつた。館生は四五十名で、午後からの組と夜の組とがある。獨歩は、ナシヨナル、スピントン萬國史、ヘステイング傳、代數等週に廿三時間受持つた。

今日までとは異り全く友なき里の孤客に候間時々御手紙被下度願上げ候。小生も何時までも碌々として、一小教師の椅子に安座せられもせず、信するの天職あり、盡くすの義務あり、致々目的に向て突進致す覺悟に候。天祐は頭上に在り忍耐持久徐ろに歩武を進む可きのみに候。(十月六日付、

大久保宛書簡

是は佐伯着任當時の聊か心細げな手紙であるが、弟を同道してゐた爲、次第に寂寞感は薄らぎ、と同時、佐伯の自然美は、此新銳の他國青年に對して、驚異すべき魅力となつて現れた。

今や余は大にして深き意味を保つ書籍の前に立つなり。「自然」は余が今日の境遇程余を取圍みて其美と變化とを示したる事はあらず。(十月廿五日付、中桐宛書簡)

彼の眼にふれる景物は盡く彼に悠思と哀感を與へる書籍であり、且是等の註解者は、ワーツワース、カライル、エマスンであつた。そして、此佐伯の一年間は獨歩の前期の情操を集大成する土地となつた。回顧すれば殆んど二十年。獨歩氏の早稻田に學ぶや、屢ば予を氷川學堂に訪ひ、其の年少俊銳の氣を洩せり。幾もなく矢野龍溪君の郷里豊後國佐伯の學校に教師を求むるや、予獨歩氏を擧げて之に應じたり。佐伯は山水の勝に饒む。君授業の傍其間に放浪し、天然と相親しむ。當時予に寄せ來る書翰概ね一種の風趣を帯びざるものなかりき。(徳富蘇峰、廿八人集序)

獨歩の自然愛は佐伯に於いて完成されたといつてよい。對岸を森にしたる蕃匠河畔の波靜かなる夕、それは明白にワーツワース好みである。

自分は今ワイ河畔の詩 (Lines composed a few miles above Tintern Abbey) を讀んで端なくも思ひ起すは實に此一年間及び佐伯の風光である。彼地に於て自分は教師といふより生徒であつた。チーヌナルスの詩想に導かれて自然を學ぶ處の生徒であつた。(中略) 「月光をして汝の逍遙を照さし

め」自分は夜となく朝となく山となく野となく殆ど一年の歳月を逍遙に暮らした。(小春)

ワーツワース趣味は、彼の麻痺時代から始まつてゐる。尺間山に上つた時、「Excursion」でも思ひ出したかして、

仰ぎ望めば無限無邊無窮の大空悠悠として擴がるを見る。星も月も太陽も木星・金星・銀河ありとあらゆる大塊此の間にみつ。光みち暗満ち凡ての法則みつ。凡て眠り此時神獨り醒むウォーツウォース吾を欺かずと覺え候。(十一月廿七日付、田村宛書簡)

といつてゐるが、それが最高潮に達したのが、此佐伯時代である。獨歩の「源をち」「春の鳥」「鹿狩」等を見ると、美しい佐伯の自然、老爺、白痴の童、少年が背景となつてゐる。自然の最も素樸なる形は風物にあつては田園である。人にあつては是等の中に育つ野人である。或は原始的感情を持つ木訥漢である。何故ならば、彼等こそ最も自然に近く還元されたる者だからである。故に自然詩人は、童を愛し、老人を描き、愚人を喜ぶ。彼等こそ、神に近いものだからである。吾々は一茶や言道を始め過去の俳歌人が、童心を求めてゐる例を限りなく知る。それは疑もなく自然復歸精神の現れである。そして、それは、總ては自然に歸る事から、自然の最も純粹なる相、自然の靈、を肯定することになる。換言すれば、汎神論的結論に到着する思想である。」

〔今〕「忘れ得ぬ人々」は明治三十年二月中の「國民の友」に發表されてゐる。

〔正月元旦〕 正は歳の第一月、元は歳の第一日、又は年號の第一年。

〔膝下〕 ヒザモト又はシツカ。ひざもと。親の許。

〔熊本から大分へ横斷〕 丁度今豊肥本線の通じてゐるあたり。阿蘇の北麓を廻つて、大分縣大野川の上流より大分市に通ずる。

〔弟〕 國木田收二。「敷かざるの記」の諸所に出て來る。

〔草鞋〕 ワラヂ。わらんぢに同じ。藁で作つた履物で、長い紐がついてゐて、まわりの乳にそれを通して足にからみつける。靴・ゲートルが風靡した現今でも、登山旅行には、足がつかれないといつて、草鞋と脚絆を愛用する人が多い。

〔脚絆〕 キャハン又はハバキ。丁度西洋のゲートルの役をする。二種あつて、江戸式は小はざがあり紐を穴に通して穿き、京阪の大津脚絆は小はざがない。共に紺木綿で作り、白脚絆は僧侶の金毘羅参りだけ。

〔熊本〕 熊本縣廳所在地、中部九州の政治・産業・軍

事・教育・交通の中心地、人口十五萬八千（昭和三年）往古加茂氏について細川氏五十四萬石の城下であつた。熊本平野に位し、白川に臨んでゐる。

〔日が高い中〕 太陽の西にあまり傾かない中、夕方に程遠い時刻。登らぬ中といへばいふまでもなく未明。

〔立野〕 タテノ。熊本縣阿蘇郡瀬田村にある。熊本東七里、阿蘇西麓の小驛、山麓の水はこゝで一罅隙を求めて西下する。立野火口瀬（火口原の排水口になつてゐる深い谷）といふ。

〔宿場〕 シュクバ。うまや、つぎば、しゆく、えき。宿驛に同じ。鐵道開通前、諸街道には道々に宿があつて、人馬往來の休息宿泊所となつてゐた。

〔阿蘇山〕 熊本縣東北部にある阿蘇火山脈中の主峰、關東の箱根と共に二重式火山の典型的なものとして著名。標高千米内外の外輪山は、南北約六里、東西四里餘に及び、規模の大なる事世界一といはれる。中央に根子（一四〇九米）・高（一五九二）・中（一三三三）・杵島（一三三七）・烏帽子（同上）の所謂阿蘇五岳より成る中央火口丘を略々東西に配列し、その中、中岳は現に活動盛んである。

らう。）

〔温暖であるが上に〕 ががないと同じ。

〔凝つて〕 寄りかたまる、結び付く、密集する。

〔舊噴火口〕 大火山は大抵大小數十乃至數百回の破裂を繰返して發達したもので、阿蘇で現在噴火してゐるのは中岳だけ、舊噴火口は東西十六軒、南北二三軒の楕圓形の所謂陥落カルデラ（外壁の外輪山）より成る。

〔名残を止めて〕 此場合の名残は、物事の過去り又は哀へ亡びた後など、尙その一部分や面影が残つてゐる事。燒土が往年の凄まじい活動を偲ばせるとの意。

〔荒涼〕 荒れはてさびしい。

〔筆も口も〕 文章や言葉では現はし得ない、筆舌の及ぶ所にあらず。

〔穴〕 噴火口を指す。

〔大觀〕 大きな景色。晴日高山の頂に立つた者は誰も快絶壯絶な思出を持つてゐよう。

〔恣にする〕 ホシイマ、欲しきまゝに・擅に・縦に・肆に。欲するがまゝに、思ふまゝに、勝手に。自由・専横・満足などを表はす時用ひられる。

これらの中央火口丘と前述外輪山との間には、北に阿蘇谷、南に南郷谷の火山原を展開し、宮地・内牧・高森の諸町以下廿有餘の町村五六萬の人口を抱擁して、牧馬・農耕の業が營まれてゐる。中にも宮地谷は、舊宮地線と大飼線の連絡によつて豊肥本線開通するに及んで、九州横斷の重要交通路である。（詳しくは日本百科辭典・日本地理大系・日本地理風俗大系其他参照）

〔霜を履み〕 霜の降りてゐる處を歩いて行くこと。

〔棧橋〕 サンバシ。普通埠頭の水中に突出した橋をいふが、こゝは懸橋の意で用ひたらしい。懸橋は懸崖險阻な箇所に架した丸太又は藤蔓などの橋。

〔日中時分〕 オヒルジブンと讀ましてゐる。日の中する時、即ち正午頃。

〔絶頂〕 上を絶した頂、山頂・頂上。こゝでは中岳の頂。

〔噴火口〕 火山の底の岩漿溜に通ずる管の開いてゐる所、こゝから灰を降らし熔岩を流す譯で、大抵は摺鉢底の様に圓い凹みになつてゐる。（火山現象の手頃の解説としては、家庭大百科事彙「火山」の項参照、上野の科學博物館地質部の參觀も便であ

〔さすがに〕 しかすがの約。流石。この場合の用法は、本分にそむかず、すぐれただけであつて、如何にも、名にはちずの意。さうはいふものゝ、さはさりながらの意ともなる。

〔阿蘇神社〕 といへば一般には、宮地街の西北十四丁の官幣大社をいふが、こゝにいふのは中岳の肩にある奥ノ宮。

〔番茶〕 下等煎茶の總稱で、だから「位は吞ませてくれる」といふ。硬化した茶芽を原料として製造したもの、又は良茶精製の際釜ひ出された硬葉などをいふ。

〔團飯〕 ムスビ。握り飯のこと。まるめた飯の意。〔箸る〕 カジる。かちるとは、形の出来てゐるものを歯で毀ち盡して行くが爲である。

〔肥後の平野〕 熊本平野のこと。〔立罩める〕 一杯になる事、ふさいでゐる事。(立は接頭、罩は竹製底廣の捕魚籠、轉じて入れ込む意、但し原文は籠)

〔霧靄〕 もやはもやもやとせるものゝ義。霧などの濃いものをいふ。〔焦げて赤くなつて〕 夕陽をうけて赤く映えてゐる

〔濛々〕 モウモウ。雨霧などの小ぐらい様。

〔立騰り〕 タチノボリ。

〔急に折れて〕 煙が火口を脱して後外風に吹きよせられる事であらう。

〔高嶽を掠め〕 高嶽の端を掠めて動く事。

〔壯といはん敷〕 壯といはうか。壯はさかん、大きい。敷は語尾に置いて疑問・推測・不定などの意を表はす助字、氣が緩くして安しとの意より轉じた語。

〔慘〕 サン。むごくいたましい。

〔石像のやうに〕 茫然佇立の形容、石像は不動を現はす。(立ち)つくすは有る限りを出す意で、動作を強める語。(切り)まくるなどの場合と同じ氣持。

〔窪地〕 クボチ。ひくゝなつたところ。

〔舊跡〕 舊いあと。普通名所舊跡などと、歴史上の事件のあつた所をいふが、こゝでは噴火口の跡の意。(類ち)こんで。オチ。類はこの場合落と同じ、へこんで凹くなること。つまり九重山連峰が舊の大噴火口の縁にあたる譯である。

〔數里に互る〕 互るは續く、及ぶ、またがる。

〔男體山・中禪寺湖〕 ナンタイサン・チュウゼンジ

事。

〔圓錐形〕 穂先のまろい錐の形。幾何學的には、三角形が直角の一邊を軸として廻轉する時生ずる立體。

〔九重嶺〕 原文にはコ、ノヘタウゲと訓ませてあるが、實稱はクジウ。又久往ともかく。九重山は阿蘇の西北約三十軒、山頂は大分縣玖珠郡にある活火山。阿蘇火山脈の一部をなす九重火山塊中の一峰、海拔一七八四米、山嶺の九峰相重疊するに似たるよりこの名ありとか。附近は九州の最高地帯である。

〔裾野〕 山麓緩傾斜の原野。火山は噴出物の堆積火山の周辺に最も多く、これを距るに従つて漸次その量を減するので、頂上に急だつた圓錐線は降るに従つて緩かとなり、往々所謂裾野を形成する。こゝでは南麓の九重野を指す。大分縣直入郡に屬し、面積三二五〇町、今牧場を設け、放牧の牛馬數千頭、火山礫又は火山岩 燗物より成る。

〔夕陽〕 セキヤウとよませてゐる。

〔寥廓〕 リョウカク。ほがらか(寥)にして大い(廓)なり。

コ。男體山は栃木縣の西部日光火山彙中最新の火山で那須火山脈に屬し、海拔二四八四米。その噴出にかゝる熔岩流が大谷川の谷を埋めて造つたものが中禪寺湖、その落口が華嚴瀧である。世界に名ある日光の大自然美は一に男體の噴火によるといへる。(但し阿蘇の火口原の場合と同じく中禪寺湖を男體の火口といふ事が、自然地理學上正しいか否か、地理科教授者に質されたい)。

〔明媚〕 メイビ。山水の景があざやかに美しい事。媚はこびる、なまめく、美し、みめよし等。

〔幽邃〕 イウスビ。しづかでおくふかい。幽は深く遠し、しづか、邃も深く遠し、奥深い意、風景の清勝超塵神韻のこもつたといった感じの時に用ひる。

〔五穀實る〕 五穀は普通米・麥・黍・粟・豆(但し諸説一定しない)をいひ、又漠然と穀物の總稱にも用ひられ、こゝでも、土地の肥沃豊饒なるをいつてゐる。前出「阿蘇」の項で述べた通り、箱根や阿蘇のやうな二重火山に於ては火口原に多くの聚落の發達を見る。登山・探勝・入湯の遊覧客を相手とする旅館街も發達し、又その地理的景觀は交通路の

要衝としても重要な意味を與へるが、外輪山にかこまれた平原地域に地味豊かな農牧地帯をも提供する譯である。(前掲諸書參見。因みに「火山と人生」に關しては家庭百科事彙「火山」の部に要領を得た人文地理的説明がある)

〔村落幾個の樹林〕 幾個(いくつ)かとよましてあるを前句に關せしめて幾つかの村々のとしても、後句につけて、村々のあちこちの樹林とつても、文章の上からは何れでもよからう。

〔今しも〕 今丁度、しは強めの助字。現に眼前にといふ氣持を籠めて用ひられてゐる。

〔斜陽靜かに〕 斜陽はな、めの太陽、傾日と同じく夕日の意。峠を越え頂に到つて初めて眼下に展開する山懷に抱かれて横はる挑源風景は誰しも忘れ得ぬ山旅の思出、しかも背景は雄大なる阿蘇の自然、脚光は靜かなる西國の斜陽觀る人は若き獨歩吟客の詩人、光景髣髴たるものを覺ゆる。

〔いつそのこと〕 一つそは一層の音かといはれる。むしろ、却つて、いつさうの意。

〔宮地〕 ミヤヂ。阿蘇郡宮地町、北麓にある町。西北十四丁に阿蘇開劈の健磐龍命を祈る二千年の古

ヤラチャヤラと鈴を鳴らしながら山路を村里へ歸つて行く情景は段々に少くなつたが、少し交通中樞をはなれた山村には今猶珍しくない圖である。(因みに原文は「のどかな鈴の音夕陽を帯びて」とある)

〔村に出た頃〕 改造社の現代日本文學全集本及び同國木田獨歩全集第一卷の原文は「村を出た頃」とある。

〔夕暮のにぎはひ〕 夕餐の仕度やら家のまわりの片付やらで何となく氣ぜはしい黄昏時ではあるが、同時に、大人は野良から歸り子供は表の遊びから家の近くへ戻つて、間もなく團樂の膳に向はうといふ前の、親しみ深い、ミレーの畫にでも出て來さうな農村風景の一つである。「子供が竈の火の見える軒先に集つて」とは穿つた筆だ。

〔人賣〕 ジンクワン。人間のゐる世界。賣は界と同じ。殆んど人に遭ふ事もない様な山旅を續けてはじめて人里へ出た時ほど人の顔が親しまれ、疊の上が快く感ぜられる事はない。

〔足を曳きつづつて〕 重い足を勵まして強行する様。〔宮地を今宵の當てに〕 宮地へつけばもう思ふ存分

社阿蘇神社があり、宮地の名はこれより起きた。今人口三千七百、豊肥本線の重要驛である。

〔先が急がれる〕 先は残つてゐる旅程、急がれるはあまりゆつくり構へてゐられない氣持。

〔勾配〕 カウバイ。勾は曲る、配は度、傾斜と同義。

〔山の尾〕 ヤマのヲ。尾は峰に對して山の低い部分。一説には、山の裾の長く引いたところ。アルプスなどでは山脈の背骨の様な稜の部分^{ヒタ}を屋根といふ。

〔蜿蜒つて〕 ウネつて。曲りくねつて。或は左右に或は高く低く屈折・迂廻すること。

〔枯草〕 雜草を乾燥させたもの、山村では之を薪にする。一日の勞働を了へて家路に歸る時馬の背につけては來るのであらう。

〔辿る〕 タドる。さぐりもとめる義より轉じて知らないところを探り探り行く意にもなる。

〔彼處此處の山尾〕 カシコココのヤマノヲ。

〔のどか〕 事なく靜か、落付いてゐる、なだらか、ゆつたり、のんびり、天氣の場合は空晴れてうらか、か、おたやか。

〔鈴音〕 馬具の一部に鈴をつけてゐる譯。日暮頃チ

休まれるんだと意氣込んで、それを心だのみにして。

〔一村離れて〕 ヒトムラと訓ませてある。一村通りすぎでの意であらう。

〔とつぶり〕 日の全く暮れはてた様。

〔影が地上に印するやう〕 明日をうけて、地上に影がはつきり落ちる事。

〔分派〕 本山から分れ出た山の脈をいふ。(派はわかれ、枝)

〔新月〕 シンゲツ。三日月の事をもいふが、こゝでは、その夜東天に上り初めた光り鮮な月の意の場合。

〔一帶の村落を我が物顔に〕 窪地一帶の村々を月光が包みおほうてゐる氣持。

〔澄んで蒼味が、つた水の様な光〕 冴えた寒月の光りを形容した。

〔氣がついて〕 暮の山路を、暗に追はれる様にして村里へと急いでゐたので、しばらくは山も煙りも念頭になかつた、それを冷徹水の如き明月の光りに、この光を通して見る阿蘇の噴煙は何んなであらうと、ふと眼を彼方の空にやつた氣持。

〔直ぐ頭の上を仰ぐと〕直ぐは時間的な意でなく方向をあらはしてゐる。

〔晝間〕 ヒルマとあり。

〔灰色〕 灰の様に薄黒い色、淡い鼠色。

〔碧瑠璃〕 水や空の青々と清らかなこと。(碧色のる

りをもいふ、瑠璃は玉の類、ことに青いものをい

ふ) 紫色をおびた紺色を「一條秋水瑠璃色」(白居易

易) などと形容する。

〔大空を衝いて〕 衝くは勢猛に進み入る、當るをい

ふ。

〔幸と〕 サイハヒと。これは好都合と、丁度よいと。

〔欄〕 てすり、欄干。

〔倚りかゝる〕 倚るはもたれる。

〔疲れきつた足〕 きつたは完全又は餘地ない事をあらはす。疲れ果てた程の意。

〔さま〕 様子、かたち、状況、光景。

〔變化するのを眺めたり〕 原文では「變化するを」。

〔聞くともなしに〕 特別耳をすまして聞くといふ譯

でもないのに耳に入つて來ること。

〔人語〕 ジンゴ。人の言葉、話す聲。

〔聞えるのを〕 原文「聞ゆるを」

道。(以上信濃)

船の船頭と燕どりはいつも春出て秋戻る。

傘を手に持ち何方もさらばえかい御世話になりました。(以下越後)

西は追分東は驛所せめて關所の茶屋までも。

坂はてるてる鈴鹿はくもる間の土山雨がふる。

〔耳を傾けて〕 注意して聴く、傾聴。

〔宮地や〕 ミヤヂやとよむ。みやぢは (jiva) が jya

となつた。日常の用語や民謡などに珍らしくない

用法。

〔よいところちや〕 お國自慢、郷土禮讚である。(こ

とに地理的に獨立した豊饒挑源の地にこの種の歌

謡を見る)。ぢやは助動詞であるの約、九州地方の

用語。

〔俗謡〕 流行唄と民謡との總稱で俚謡ともいふ。

〔長く引いて・悲壯な聲〕 前釋「馬子唄」參見。

〔手前〕 テマへ。我手の前、自分の目の前の意より

轉じて、其の處より自分に近い方、それよりもこ

なたの義ともなる。

〔流して來る〕 普通には、藝人・按摩などが三味線

を弾いたり笛を吹いたりして往來を歩いて客の求

〔虚空〕 コクウ。天地の間空にして物なきところ、即ち空、空間。

〔手に取るやうに〕 極めて近く又は明瞭に見えたり聞えたりする様。

〔馬子唄〕 マゴウタ。民謡の一種で馬子(馬方)の

間に歌はれるもの。(因みに民謡は之を大別して、

労働作業に従ふ者が勞力の統一及び慰安の爲に歌

ふ勞作歌、祝事の際又は正月・初午・祭禮などの時

祝意を表するものとしての祝賀歌、盆踊その他踊

を主とする舞踊歌、兒童の間に發生傳承される童

謡、及び各地の何々節と稱する類の雜謡の五種と

し得るが、馬子唄は第一類に屬するものである。

馬子唄の代表的なものは信濃追分で、これは越後

に傳はつて越後追分となり、更に出稼漁夫の口に

上り、北海道に渡つては渡島追分・松前追分・江差

追分に變じ、又舟歌と化したものもあり、我國の

代表的民謡にまで發達した。各々郷土的特色をも

つてゐるが、要するに悲哀の調を帯び、母音を長く

引く所に妙味がある。左に歌詞の例二三をあげる。

一に追分二に輕井澤三に坂本まゝならぬ。

こゝはどことと馬子衆に問へばこゝは信州中仙

めに應ずることにいふ。

〔俗謡の意〕 ウタのコ、ロ。こゝろは意味、わけ。

こゝでは郷土禮讚の歌意。

〔屈強〕 クツキヤウ。強情で人に屈しないこと。但

しこゝでは頑丈程の意。

〔壯漢〕 ワカモノとよましてある。

〔手綱を牽いて〕 タヅナをひいて。手綱は馬具の一

部で、銜に結付け乗る人の手に執つて馬を御する

綱。

〔見向もしないで〕 鼻唄をうなりながら腕組をして

悠々とやつて行く氣持。

〔睇視〕 ミツメ。睇はながし目に見る、横目に見る

義、著者は凝視程の意で用ひたのではあるまいか。

〔光を背にしてゐたから〕 馬子の後から夕月がさし

てゐたので(顔の方が影になつて)。

〔遅しげな〕 遅しは充滿、旺盛、巖丈の貌。げはさも

……の様。

〔體軀〕 カラダと訓ましてある。

〔輪廓〕 周囲の線、まわりのすぢ、轉じて外形・大略・

綱概の意ともなる。黒いと云つたのは光を背にし

て立つた影故。

四〇 雜 草

一 教材研究

1 解題

本課は相馬御風氏の隨筆より採つた。

相馬御風 サウマ ギョフウ 名は昌治。明治十六年七月新潟縣糸魚川町に生れ、明治三十九年早稻田大學英文科卒業。同大學講師であり、又「早稻田文學」を編輯してゐたが、大正十年郷里糸魚川町に退いて新生活を開かうとした。其折の著「還元録」「凡人淨土」等には、その間の思想傾向が窺はれる。爾來思索に研究につとめ特に同郷出身の良寛研究に没頭してゐる。氏は曾て、詩人であり、文藝批評家であつた。翻譯にも従事した。著書には前掲の外、「黎明期の文學」「御風詩集」「大愚良寛」「良寛和尚詩歌集」「良寛和尚遺墨集」「自我生活の文學」「歐洲近代文藝思潮」「個人主義思潮」「ゴリキキ」「樹かげ」「田園春秋」「砂上漫筆」「對山雜記」「石切る父と子」等がある。

2 文意

よき花と稱せられるとき必ず觀賞用の花を取り、すぐれた人と稱せられるとき必ず世上有名な人をあげる如き、概念的なものを放れて、雜草の中に、凡人の中に、美と偉人とをひとめよといふ意味を述べてある。

3 節意

第一節 知らず知らずの間に、吾々の美感をやしなふ雜草の美を思ふべきこと。(二九四頁一行まで)

1 學校生徒の見逃してゐる雜草の美

2 雜草の中の名さへ知らぬ吾々

3 ソローの、草木に對する細心の注意

第二節 芭蕉の「よく見れば」の意義(二九五頁三行まで)

第三節 雜草のみならず人もまた常人の中に勝れたる人を見出すべきこと、(終まで)

4 句意

(いざ美しい花の繪を描かうといふ段になると、それ等の最も親しみの深かるべき花を除外するのである。)
「美しい花の繪」といふ型が生徒たちの頭の中に出来上つて居るから、これに入らぬものは描くべきものでないと思つて居る。一般の人が美しいと云ひ、美しいと示さないものは美の中に入らぬやうに考へる。

それがいけないといふのである。筆者の主目的は一般人の美といふ觀念の擴充にある、流動變展にある。(雑多な草の花は、知らず識らずの間に私たちの心に貴い養ひを惠んでくれてゐる。しかも私たちの多くは、それ等の名前すらろくに知つてゐない。)

名を知らうと思ふのはそのものに深く心を惹かれるからである。草花の名を知らなくてもその花を愛することにはなるであらうし、又心にとまつて忘れがたいものも多い。しかし知らないのはそこに親しみが湧かないのである。でこの雑草の花がやさしく吾々の心をなぐさめなごめて居ることを思ふと、やはり知らないのはなさげなく思はれて來るのである。「しかも」といふ語がこゝでは力を入れて云つて居るのが分る。

(いかに自然を愛し、いかに自然の現象に注意深かつたか)

試みに「森林生活」の「春」の條から一節を摘記しよう。池畔雪とけ水ぬるむ頃は如何? 曰く春の最初の雀! 愈々若き希望を以て始まる年よ! 微かに銀鈴を鳴らす様な歌聲は、所々雪が解けて水氣を含んだ野を越えて、駒鳥・四十雀・鶴つばよりやつて來、さながら冬の最後の薄片が墮ちて鏗々の音をなすかと怪まれる。かゝる時、歴史といひ年代學といひ、乃至あらゆる聖書といひ、將何するものぞ、小川は頌歌と歎びの宴歌を捧げてゐる。沼鷹は既に低く草原の上を翔りつゝ、長き冬の眠りより今し眼醒めた泥中の動物を捜してゐる。雪の融け行く打沈んだ物音は、到る處の谿間に聞え、水は忙しく池に解けてゐる。草は春の野火の如く山腹に萌立ち………

(芭蕉自らにあつても、その經驗によつて、平常の自分に、よく見ない時間の多かつた事の反省が起らないではゐなかつたであらうと同時に、「よく見る」といふ事の貴さを、彼は恐らく今更の如く驚嘆せずにはゐられなかつたであらう)

「自らにあつても」は外界の草に心をひかれたといふ丈けでなく、芭蕉自身の心中に於ても、次の如き反省が起つたであらうの意。「その經驗」とはなづなの花を見てなんでもない花の趣を知つたその事を指す。「今更の如く」は善く俳諧に身を入れて居た芭蕉は今迄に「よく見る」ことの貴さを知つて居たに相違ないが、今なづなを見て殊更「よく見れば」と云つたのは今更の如くに感じたのであらうとの意味である。(自分自ら偉いと實感した。)

常人の多くは美とか他人に對する品階の標準は、外の人によつて暗示されたり又影響されたまゝのものが多い。つまり型にはまつて居る。さうでなくて本當に自ら偉いと思ひ美しいと思つたものを持つことが大切である。それは自分自身の發展の基となるのである。「自ら」と「實感」に力が入つてゐる。

二 指導研究

「見る影もない一莖の草に限りない自然美を」「手近にゐる唯の人に限りない人間の貴さ」を發見したいといふのが本課の目指す趣意である。これは同時に自分自らものごとの意味を發見せよといふことになるのである。偉大なる人物や典型的なる美を示して年少者の向上を促すことは教育の必須なる一事であるが、

そのことが純粹な年少者に對してきはめて効果の顯著であるためこれのみに終始し勝ちである。これは人の感情をねむらせ徒に事大的な思想にのみ走らせるやうである。本課の文旨はこの缺陷を指摘してゐる類で、非常に良き教訓と反省を促すべき大切なものを持つて居る。殊に藝術の鑑賞といふことに於て、それが吾々のやしなひになるやうにする爲めには、吾々自身の周圍にある平凡な美を發見出來ないやうでは全く望めないことにならう。さうしてそれが出來るだけの敏感性を持つやうになつたら、どんなに吾々の日常生活は幸であらう。誰も見逃してゐるなづな如き花を、誰が芭蕉の如く適切に詠んだか。これは芭蕉の發見であり創作であり、一身にとつて幸である。發見とか創作とかを、何か重大なることの如く考へさせるのを止めて、この平凡の眞理へ導いてゆき度いものである。しづかに本課の文を讀み返すことによつて、そのなれどもなく考へられる眞理が、いかに吾々に適切なるものであるかが知られると思ふ。どの課に於ても、教授は抽象的な觀念を植ゑつけるだけではないけなすが、この課の如きは、文章がおとなしく平坦な調であるだけ、さういふ危険があると思はねばなるまい。又思ふに本課に説く趣旨は一には成人の思想であつて、而も年少者に必要なものであることを考へて教授したい。即ち趣旨とする所に教授者のみが共鳴し、生徒に徹せぬ中に効果のあつたやうに思はれ易い。

〔菊〕 キクといへば菊科中クリサンセマム屬の總稱

なるも、菊科といへば一萬一千餘種を管族とする

大きな科で、その中には牛蒡・フキなどの野菜類

から、グリア・矢車草・金盞花・百日草・コスモス・

薊・タンポポ、などの野草類まで含まれてゐるが、

普通は園藝的に栽培されるものを指す。菊はアジヤの原産、支那・日本にその原種とおぼしいものが發見され、十五世紀も昔、既にこの名が記されてゐる。耐久性の宿根植物で、花終れば莖葉は枯れるが根は多年性育して、春暖と共に新芽を出す。

種類萬餘、形状千態、葉は羽狀をなして深い刻みを有し稍縮れてゐる。花は頭狀花序をなしその外圍に數重の鱗片より成る總苞を有つ。花色は白・黄・紅・橙・紫種々大小も一定しない。芳香清雅、所謂四君子の一で花中の王である。

〔タリヤ〕 Dahlia 菊科の多年生草本、テンヂクポタンともいふ。メキシコの原産、最近は到る處で栽培される。地下に塊根を有し莖を地上に伸長して枝を出し夏日頭狀花序に排列した大形の艶麗な花を開く。

〔朝顔〕 ヒルガホ科の一年生草本。夏の朝葉腋から漏斗狀の合瓣花を開き、多くは毎朝一花づつ上へ咲いて行く。葉は通常三つに尖り葉柄は長く莖莖

に互生する。清楚なる姿を特色とする。

〔コスモス〕 Cosmos 菊科一年生草本。高さ一米から三米。種類多數、原産メキシコ。細く分裂した多數の葉はニンジンノ葉に似てゐる花は單瓣、白・淡紅・紅又は黄。栽培容易で、早咲は七月、普通十月頃より咲き初める。花壇植・切花・盛花に適する。

〔薔薇〕 バラ。イバラともいひ、もとカウシンバラを指したが、バラ科イバラ屬灌木の總稱となつてゐる。直立・匍臥・攀緣と種々の形状をとるが、皆刺を有する。葉は互生の奇數羽狀複葉、花は雄蕊・雌蕊を具備した五瓣の兩全花、色は白・黄・蔷薇色又は紅色。頗る美麗なるを以て觀賞用とする外、芳香よく香油・香水の原料ともなる。

〔觀賞用の花〕 所謂花卉の中草花類に當る。之を分類して次の三種とする事が出来る。一二年草は、朝顔・コスモスの如く春發し夏より秋に亘つて開花し晩秋に枯れるもの(一年草)、罌粟の様に秋發して越年し春開花し晩夏に枯れるもの(二年草)、兩者の中間草として春秋何れに蒔いてもよく生育する多くの花があり。多年草一名宿根草は冬季葉

を枯らすものもあり常緑のものもあるが、根は多年生育するもの球根草は多年性草花類に屬するが、特に根部が球根の形をしてゐて取扱法を異にするので別にする習慣である。

〔型にはまつた〕 型は金・土又はその他のものを詰込んで或形に作り出す器。語意は定石通りの、印でおした様な、融通の利かない、自由のない、などを表はす。

〔……描く事その事に……〕 その事はそれ自身と書いてもよい。英語でいへば「*to do*」で、他と切り離して抽象的に論議すれば是非の論はないが、或事を考慮に入れる時、簡単に肯定しかねるといふ様な場合の語法。

〔わけて〕 とりわけ、特に、別して。

〔背戸〕 裏門、裏口。(宇治拾遺「せどの米の散りたる食ふとて雀のをどりありくを」)

〔特に注意しないまでも〕 この注意は意識の意と見てよからう。

〔心を養ひ〕 精神生活の糧となる、即ち兒童の情操がそれによつて日々培はれ育まれること。

〔いふ……段となると〕 いふは人を誘ふ場合、又心

進んで事に就かんとする時の聲。段は段階の意よりところ・場合などを意味する。いよいよ……となるとの意。

〔不満は其所にある〕 其所はいふまでもなくその點。

〔この節の〕 節は季節の意より時、時代の意に用ひられる當世の程の意。善きにつけ悪しきにつけ、老人の自分の若かつた頃と現在の世相とを對比して、過ぎし昔を慕ひなつかしみ、又は徒らに時の變化を慨する。保守頑迷の語でもあれば、永遠なるものに人心をかへさんとす天の聲である場合もある。

〔ろくに知らない〕 普通祿の字を用ふるが陸が正しい陸とは物の形の歪みなく正しい事、轉じて物事が正しく整つてゐること、まじめなどの意。下に打消の語を伴ふが普通。(藤栗毛「うぬがよな野郎はろくでは行くまい。擧句の果には首でも釣るちやろ」)

〔哲人〕 狭く哲學者をも意味し、廣義に思索の人をもいふ。

〔ソナー〕 Henry David Thoreau (1817—1862) 米

國の散文家・詩人。マサチュセッツ州コンコード。(Concord) に鉛筆工場を經營してゐた佛人系統の父の子として生れた。ハーヴァード大學で古典に親しみ、後東洋の研究に興味を覺ゆるに至つた。大學卒業後しばらく教鞭をとつたが、その頃から自然の生活を慕ひ紛雜なる人間俗界よりも天然を友とする孤獨の生活を以て貴しとなし、人間は自由獨立ならんとせば、人生一切の慾望を極度まで節せざるべからずと説き、遂に職を棄て、郷里に隱棲し、一八四六年半ばより次の年末までウォルデン・ポンド (Walden Pond) の池畔に小廬を營み、最少限の簡易生活を試み、日々その衣食に必要なだけの仕事以外は、自然の研究と交友との清語に獻じた。四七年九月には池畔を去つて後述エマソンの許に寄遇したが、四九年以後は家族と共にコンコードに住んだ。彼は其間やはり、植木屋・測量師・大工等の仕事に雇はれてパンの賣を得、餘暇は擧げて自然研究、希・拉・英・佛の古文學の翫味、哲學的思索、旅行、談話に捧げた。彼は三七年以後絶えずその思想を日記に留めてゐたが、今十卷の全集として残つてゐる。就中代表作とも

稱すべきものは「コンコード及びナリマック河上の一週間」(A Week on the Concord and Merrimack Rivers, 1849)・「ウォルデン」(Walden, or the Life in the Woods, 1854)・「逍遙」(Excursions, 1863) などで、何れも新鮮な大氣と日光と草の香土の愉悅に充ちた自分の詩的研究の記録であるが、中にも「ウォルデン」は「森の生活」と別題される通り、前記池畔二年の森林生活の記述であつて自然の生命に通ずる事その比を見ぬ。アメリカ文學中最も獨創的な産物の一とされる。ソローは厭世家・人嫌ひと非難もされるが、その文章と共に思想に於ても獨自の境地を持つる人である。(日本百科大辭典・家庭大百科事業其他英文學史參照。「森林生活」はよく吾國高等專門學校の英語教科書に用ひられ、水島耕一郎氏の譯がある。巻頭山縣五十雄氏の序文亦一讀が便である)

〔エマソン〕 Ralph Waldo Emerson (1803—1882) 普通日本讀みにエマソンで通る。米國の文豪・思想家。ボストンに牧師の子として生れ、ハーヴァード大學卒業後一時牧師となつたが、後信仰上の懷疑から職を辭して歐洲に遊び、當代英國文壇の

雄カーライル (Thomas Carlyle, 1795—1881) 知つて、生涯の友誼を結び、歸來コンコードに著作生活に入つた。徳富蘆花の「自然と人生」にもあるが、世稱して前者をチャルシーの賢、彼をコンコードの哲といふ。彼は時代の唯物思想に對して理想主義の反旗を翻し、汎神論を背景とする個人尊重の暗示的な唯心論を説いた。處女作「自然」(Nature, 1836) を初め「代表的人物論」(Representative Men, 1850) その他多種の論文集を公にし、再三渡歐講演旅行後、八十歳で歿した。

〔芭蕉〕 江戸時代の俳人、蕉風俳諧の始祖。姓は松尾、名は宗房、通稱忠左衛門、俳號を桃青・芭蕉・風羅坊といふ。(一六四四—一六九四)。芭蕉は人格高雅寛容、態度温和平靜、人に敬愛されたが、俳道に於ては極めて嚴格であつた。西行・宗祇の風雅を學び、旅を好んで各地を漂泊吟行し、一生を雅道に殉じて門人の扶助によつて生活した。杜詩を愛しその影響が多い。所謂蕉風の特徴は寂と細味を目標としたが、豪放な趣に於いても獨歩の地位を持つ。特に連句に於けるうつり・響・句・位等の附け方は、すべて趣致・風韻を以てつけるもの

で、その緊密精巧澁後その人を見ない。その俳諧行脚はその俳境に多大の關聯をもつてゐるが、一面各地に蕉風を傳播・隆興せしむる大因となつた。其角以下風を慕ふ者六千。著書は俳諧七部集・更科紀行・奥の細道・嵯峨日記など多数。詳しくは各百科辭書、各國文學史參照。

〔なづな〕 薺。十字花科の一年生又は越年生草本。山野・道端等到處に自生。根生葉は叢生して羽狀に分裂し、その裂片は多く狭い線形で、上側に耳がある。春日一五—三〇種の莖を出し、上部に分岐した各枝から繖狀花序をなして開花。花は小さい白色の十字形をなし、果實は平三角形で、三味線の撥に似てゐるので、一名サミセンダサ・ペンペンダサともいふ。七草の一で、幼草や若葉は食べられる。

〔下土〕 シタツチ。根元の土。

〔何のしなもない〕 しなは品、ひん、人品、品格。打消になると無品・つやなし・愛敬なしの意。

〔風物〕 景色、風景、又その一部をなす物、即ち花鳥風月など。

〔興趣〕 面白味、興味、おもむき。

〔結構〕 ケツカウ。結び構ふ、組立てる事から、見事な・立派なといふ意。否定に先立つ一應の肯定の際によく用ひられる。

〔一莖の草〕 一莖は一本と同意。

〔唯の人〕 無位・無官・無名・平凡・通常の人。

〔春雨〕 ハルサメ。春の季節に降る雨。

〔蓬〕 ヨモギ。艾とも書く。菊科ヨモギ屬の多年生草本。春我國の山野に高さ二三尺に自生。葉は乾して艾の材料とし、又所謂草餅の香しきを作る。

のばすとは生成する事を擬人法にいつた。

〔葦〕 スミレ。スミレ科の多年生草本。原野に自生、ヒルガホの葉に似た小さな葉を根生し、春季

紫又は白色の不整齊な五瓣の小花を開く。花と莖の連なるところ鈎の様に曲る様、愛すべきものがある。

〔何やら〕 何やらの略。何となくとことなく、どこやら。

〔ゆかし〕 何となく慕はしい、知りたく思はれる。おくゆかしい。

〔菰〕 コモ。藨草に同じ、もと水草眞菰を編んで作つたのでこの名があるが、今は多く藨草で作る。句

は花の下むしろをかふつて酔ひつぶれてゐる様、

もしくは花の下に夜を明かす春宵風物を詠じたものか。

四二 春

一 教材研究

1 解題

本課は島崎藤村氏の「千曲川のスケッチ」より採つた。

作者 島崎藤村。第三課題参照。

2 文章

冬ごもり久しい信濃に春の訪れ来る頃の自然のうごきを描写した文。

3 節章

第一節 二月に入つて来る暖雨。(二九八頁十行まで)

第二節 二月末より三月への春來、西南の空に湧く春雲。(三〇〇頁一行まで)

第三節 春の彼岸頃の自然風物。(三〇一頁五行まで)

第四節 信濃のおそい四月の春。(終まで)

1 食物も乏しい頃に来る草餅賣のなつかしさ。

2 四月に入つて徐々に來て一時にさかりになる春。

4 句章

(春の饑渴)

春への渴望、待ちこがれる心である。春の待望とか春の期待とかいふ言葉では足りない。待つて待つて待ち切れない心持である。これは十月すでに冬に入る信濃あたりの、そして空氣の荒い寂寥たる冬に住む人には少しも誇張した言葉ではない。

(堅く縮こまつて居た私の身體もいくらか延び延びとして來た。)

これは暖い雨の到來でさういふ心持がただでなくて實際であらう。自分の息も凍りさうな山の冬にはあついで着物を着てじつところへるので身體もうこかす事がゆるやかでない。それが今「いくらか」のびのびしたのである。一寸のあたゝかさでも長い冬中の寒さにちぢまつた身體にはこのやうにのびのびしさを感ぜさせるそれがなんともいへぬ快さなのである。

(汚れた雪の上に降りそゞ音)

さびしい情景である。とけかゝつて居るとはいへ家かげの古雪などはまだ凍つたまゝである。それにさつさつと音たてゝふる春寒の雨の音をとらへたのは鋭い詩である。

(桑島の桑の根元までも濡らすやうな雨だ)

桑島は勿論枯桑畑である。そこへ雨がふりそゞいでゐる。かたくわだかまつた桑の根、そこ迄浸み込むやうにふる雨。一見濡れさうにもない桑の根にまで滲む雨といふのはじつくりと降る春めいた雨を云つてゐるのであらう。「桑の根元までも」と云つて居る。こまかい心持なのである。

(夕方には黄ばんだ灰色の南の空を望んだ)

春が来さうで中々来ない山國の空は、夕方になるとなほ寒い灰色を漲らせながら一時黄色に染まる。それを云つてゐる。二月の雨でやゝあたゝかさを感じたものゝ本物の春はまだ遠いことだ。本物の春への待遠しさも心の中にあつたことであらう。「南の空を望んだ」とあこがれの心持で書いてゐる。

(北向の雪)

家の北側や山や丘の北向に残つてゐる雪をいふ。北向の場所にとつた雪の意味を「北向の雪」と云つた。かう言葉はよく田舎の人に用ひられるし、又詩人の好んで用ひる簡明でうつくしい言葉である。

(第一の花)

今年の春來の第一の花である。春の魁である。白いこまかななづな、名を知らぬ故に猶あはれな紫の花、いづれも目立たぬ地味な花であるがそれがまたれた春の第一の花なのである。山國の春は斯の如く乏しく淋しくなつかしいものである。

(淡雪の後の道をびしょびしょ歩みながら、「草餅はいりませんか。」と呼んで來る女の聲を聞きつけるのは嬉しい。)

山國と云つてもすでに三月でふる雪も水氣の多い淡雪である。その道をびしょびしょ歩いて草餅賣が來る。淡雪と春の新草で出來た餅、新鮮な感じがあふれてゐる。

(私は斯の春の遅い山の上を見た眼で、武蔵野の名残を汽車の窓から眺めて來ると、「あゝ柔かい雨が降る」と左様思はない譯には行かない。)

「斯の」は前の四行程に説明してゐる武蔵野と比べた山國の春のおそさを指して居る。その眼で武蔵野の名残である土地を汽車でとほるとそこに降る雨は柔かいと思はざるを得ないといふので、こゝは連続した寫生文ではない、かういふことがあるといふ概念的な説明である。そのつもりでよまないといふ「碓氷峠を一つ越せば輕井澤云々」と「武蔵野の名残を云々」とが順序上矛盾することになる。

(短いながらに深い春)

四月半すぎて漸く至る春のさかりはすぐに、早くも初夏にうつつてしまふ。それでこの短い春は短い丈に色々な趣を具へて居て春の心も深いわけである。

二 指導研究

本課は「千曲川のスケッチ」の一節であるが、第一節は「その十二」中にある「暖い雨」第二節は「春の先驅」第三節は「第一の花」第四節は「山上の春」と標題のある各節である。これは内容によつて知ら

れるやうに二月から三月、それから四月半の頃へと山國の春の移りゆく様を描いてゐる。さうしてその行文は作者のいつもの如く地味にかいてある。だから山國の春のおそいやうな地に住まない人々にはたゞごとのやうに聞える個處が多いであらう。けれどよく味ひながらよんでみるとそこには忠實な自然描寫でそれが一々生きて心須欠くべからざる筆致であることが分る。長い間待つた山國の春が雨を先ぶれとしてやつて来る。雪が消え芽が萌える、そして雲が春めく、空があかるくうるほふ、やがて一時の春のさかりとなる。この機微をうかゞはせ度い。そして學ぶべきものは作者が平常にしたしんで居る周圍の自然に對してじつくりと腰をおちつけて眼を注いでゐることである。そこに通り一遍な浮薄さがない。さうして感じをあらはすに

暗い色の土 冬の瓦解 春の饑渴 北向の雪 土塀にうつる樹の影

などのやうに詩情に豊む句を以てして居る。これらが山國の冬の經驗なき人々迄もやはり文の中心に引き入れてゆくやうな趣があつて大變面白いと思ふ。

三 參考資料

以下は「千曲川スケッチ」の自序(大正元年記)の後半である。吉村樹しほといふ若い友人にあてた形で書いて居る。「千曲川スケッチ」は若い讀者にのつもりであると書いてある。そしてどんなに藤村氏が千曲川あたりの自然に身心を浸らせて居たかゞ分る。

「もつと自分を新鮮に、そして簡素にすることはないか。」これは私が都會の空氣の中から脱け出して、あの山國へ行つた時の心であつた。私は信州の百姓の中へ行つて種々なことを學んだ。田舎教師としての私は小諸義塾で町の商人や舊士族やそれから百姓の子弟を教へるのが勤めであつたけれども、一方から言へば私は學校の小使からも生徒の父兄からも學んだ。到頭七年の長い月日をあの山の上で送つた。私の心は詩から小説の形式を擇ぶやうになつた。斯の書の主なる土臺と成つたものは三四年間ばかり地方に黙して居た時の印象である。

樹さん、君のお父さんも最早居ない人だし、私の妻も居ない。私が山から下りて來てから今日までの月日は君や私の生活のさまを變へた。しかし七年間の小諸生活は私に取つて一生忘れることの出來ないものだ。今でも私は千曲川の川上から川下までを生々と眼の前に見ることが出来る。あの淺間の麓の岩石の多い傾斜のところを身を置くやうな氣がする。あの土にはひを嗅ぐやうな氣がする。私の書いたものをよく読んで居て呉れる君は何程私があゝの山の上から深い感化を受けたかを知らるゝであらうと思ふ。斯のスケッチの中で知友神津猛君が住む山村の附近を君に紹介しなかつたのは遺憾である。私はこれまで特に若い讀者のために書いたこともなかつたが、斯の書はいくらかそんなつもりで著した。寂しく地方に住む人達のためにも、斯の書がいくらかの慰めに成らばなぞとも思ふ。

〔速かに〕 ニツかに。速かな様、あはて急ぐこと。

〔單調〕 (一) 單一な調子、一本調子。

(二) 變化のないこと、單一な趣向。

こゝは(一)

〔玉水〕 タマリミヅ。(一) 淨く玉の様な水。水又は瀧

の美稱。伊勢物語に「やましろのゐでの玉水手に

ひすび、たのしみかひもなき世なりけり」と。

(二) 雨垂に同じ。堀河百首「つれづれとながめて

ぞふる春雨のをやまぬそらの軒のたま水」

〔縮こまる〕 縮まると同じ。

〔延び延び〕 ノびノび。(一) 心がゆるやかで體がう

ちくつろぐさま。

(二) 次第に物事の延引するさま。

こゝでは(一)の意。

〔黄ばむ〕 ばむはめく・じみるなどと同じく、その

様子のほのめき現はれ、又その様を帯ぶる意の、

接尾語。枕草子「あやしうかればみたる者の聲」。

〔枯々〕 (一) 草木の枯れんとする様、袂衣「草ども

も皆かれがれになりて。」

(二) 水などの乾くさま。

こゝは(一)

〔柿〕 カキ科の落葉喬木。山中に自生するが又廣く

栽培され、幹高六一〇米に及ぶ。葉は全縁、楕

圓又は卵形で葉柄によつて互生し、秋季美しく紅

葉する。五六月頃新枝の葉腋に淡黄色壺状の花を

開く。黄赤又は朱赤色の漿果を結び、秋期最も普

通美味なる果物を提供する。楕圓・扁圓等種々あ

り大小も一定せず、種類・近似種無數であるが、

我國のものが最も佳良といはれる。

〔李〕 スモ、薔薇科の落葉木本で「さくら」屬の一

種。支那の原産で我國に移植せられ、更に歐米に

渡る。莖高十尺餘、赤褐・平滑・光澤ある枝を有

し、長倒卵形・鈍鋸齒の葉を互生し、花は細長い

花梗を具へたものを三箇宛集生、花冠は白色の五

花瓣である。赤色球形の果實は他の「すも」類

と共に、生食に供せられ味が佳い。ジャム・砂糖

漬・ジュリーともし、果酒をも製し、乾果として

も貯へ得、用途頗る多い。砂礫質又は堅い壤土に

適し、氣候に對する好みが少い。果實の形態から

分類すると桃・杏・梅などと共に核果類(一つの子

房から成り、核は中心にあつて堅い肉質のもの)

に屬する。

〔眼にある〕 眼界に入り來るところの(ものは皆)。

〔木立〕 コダチ。(一) 叢り生えた木。

(二) たち木。

(三) 木ぶり。

こゝは(一)

〔瘦悴顔〕 ネボケガホ。(一) ねぼけた顔付。

(二) ねぼけた時の様なぼんやりした顔付。

〔雀〕 燕雀類に屬する小鳥。美しくはないが鴉カラスと共

に最も人目に觸れ易いので古來人に親しまれてゐ

る。褐色の羽に斑點をもつてゐる。常に人家や耕

作地に群り、頻りに穀粒を啄むので農家からは頗

る有害視されてゐるが、蕃殖期には雛の哺育の爲

に多くの昆蟲を捕食するので、効害の多少必ずし

も速断し得ない。

〔陽氣〕 ヤウキ。(一) 陽の氣、物の動かんとし又發

生せんとする氣運。(陰の氣に對して)

(二) 時候、氣節、氣候。

(三) 人の性質や土地などの時やかに賑かなこと

(陰氣に對す)。

〔四〕 心のおちつかぬ事、心の浮立つ事。

こゝは(三)

〔桑〕 ヤマゲハともいふ。クワ科の落葉喬木。自然

の發育に任すれば喬木となるが、通常年々刈切ら

れるので矮小である。葉は普通心臟形鋸齒を有し、

又種々の缺刻あるものもある。山野に自生するが

多くは栽培せられ、葉は蠶の飼料とし材は器具・

紙に製り又薪炭に供する。困みに養蠶國信州(こ

の文の舞臺は北信佐久平一帯)には特に桑畑が多

い。

〔泥濘〕 デイネイ。ヌカルミ(と訓ましてある)。ぬ

かるみの轉訛。泥が深く歩行困難なこと、又そ

の處。

〔雪解〕 ユキゲ。

〔瓦解〕 グツカイ。瓦の如く碎け散る。

〔柳〕 ヤナギ科植物の總稱。落葉の喬木又は灌木、

高さ三四丈に達し、下垂する細長い枝に披針形・鋸

齒の葉を互生する。生活旺盛で、枝を切つて地中

に挿しても容易に根を生じて生長すると、枝態

の可憐なることによつて、庭木・街路樹として愛

用される。

〔下旬〕 月の二十一日より末日までの稱、下浣・下

澣ともいふ。(旬は十日、轉じて又十年)。

〔櫻〕 薔薇科の櫻屬。約八十種あるがその中眞の櫻、殊に花の美しいものは比較的少い。櫻の本場日本で花が美しい普通のものは山櫻・彼岸櫻・枝垂櫻・里櫻・染井吉野等である。

〔梅〕 同じく薔薇科に屬する。日本と支那の特産であるが我國では眞の野生種は殆んど見當らない。花は早春二・三月頃嫩葉の出る前に開く。一般に香氣が高いのと、他の花に率先して開花するので珍重せられる。

〔灰色な地〕 地をチとよましてある。

〔春雨〕 ハルサメ。春降る雨。

〔紅味〕 アカミ。

〔草屋根〕 クサヤネ。草でふいた屋根。茅葺屋根(茅又は藁を並べ載せたもので、古くから行はれてゐる)をいつたのであらう。

〔青苔〕 アヲゴケ。こけは通俗には地上に生へる矮小植物をいひ、苔類・蘚類の外に菊科のトキンサウや大戟科のニシキサウ、酢漿科のカタバミなどを總稱するがこれは誤りで、植物學上では蘚苔類のみをコケといふ。即ち維管束のない、葉と莖の區別不十分な植物である。

ふ。(一)佛語涅槃の境地、不生不滅。太平記に「群生濟度の船、彼岸に到らすといふことなし」と。

(二)彼岸會の略。

(三)彼岸會を行ふ七日間。春分・秋分を中日と呼びその前後各々三日を合せて七日間。太平記「十六日、彼岸のはじめに」

(四)彼岸櫻の略。

こゝは(三)

〔土地〕 「千曲川のスケッチ」の背景をなす地、即ち淺間山麓より千曲川の盆地一帯、信越線が碓氷のトンネルを抜けて信濃の高原に入つてから一時間程走る地域。著者は當時長野縣北佐久郡小諸町で小諸義塾に教へてゐた。

〔ほつと〕 (一)太く息を吐くさま、ためいきする様。

(二)一安心するさま、一まづ心の落付くさま。

〔溜息〕 憂ひ、嘆き又は安心などの時、ためて後に長くつく息。大息、長大息。義經記「餘りのうれしさに腰をおさへ、空へむかひてためいきついでぞるたりける」。

〔五ヶ月の餘〕 十月末から三月下旬の彼岸までをいつてゐる。高原の冬は長い。

〔先驅〕 センクとよましてある。さきがけ。

〔ぼつと〕 俄かに飛出したり飛込んだりする様。

〔復た〕 マた。「又」は再と更との意を兼ね、多く別段の事を説くに用ひる。「復」は重と再との意を兼ね、下地のあることを反復する義。「還」はめぐり來つてまたの義。

〔展開〕 テンカイ。(一)のび開く、とりひろげる。

(二)目先が一變する。「局面展開」

(三)軍事では、密集部隊が散兵となること。

(四)數學上の術語でもある。

(五)近頃は之を抽象的に用ひて、「果敢なる闘争を展開せんとするものである」(大山郁夫氏の議會處女演説)などと、新人、ことに左翼方面に常用される。

こゝは(一)

〔乳青〕 ニウセイ。乳香の幹から浸出した樹脂の凝固したもの、芳香を有するので薰物とし、又昔は薬用とした。しかしこゝでは乳色の青みがかったのをいつたのではあるまいか。

〔彼岸〕 ヒガン。梵語波羅(Pāra)の譯語。生死の境界を彼岸とし煩惱を中流に譬へたのに對してい

〔櫛〕 カシハ。櫛の誤用。殼斗科カシハ屬の落葉喬木。幹の高さ二三丈。葉は大形倒卵形。波狀の鋸齒あり、裏面に褐色の毛を生じ、短き葉柄あり。

花は單性、雌雄同株、柔荑花序に配列し、四五月頃開く。果實は椗果にして、椗狀の殼斗を有す。我が國各地の山野に自生す。材は薪炭とし、樹皮は染料又は鞣皮用とし、葉は雜用となる。こうこうしは、はかしは、ははそ。

〔石楠花〕 シャクナゲ又はシヤクナギ(著者は後の訓)シヤクナゲ科の常緑灌木。本州の中部及び南部の深山に自生し、高さ一・五米から三米以上になる。葉は大きい長楕圓形で全縁が革質、上面は深綠色で滑かであるが、下面は灰褐色の綿毛を密生し、すべて葉柄で互生してゐる。五月頃枝頭に繖房花序をなして淡紅色又は白色の高雅な美花を簇り開く。

〔學校〕 前出小諸義塾。

〔艶〕 ツヤ。色があざやかで照りあること。美しい光、色のはえ、光澤。源氏「つや・いろもこぼるゝばかりなる御衣に」

〔土塀〕 ドベイ。土で造つた塀、築地。(石塀・板塀

などに對して)

〔映る〕 ウツる。(一)こつちの物の影又は光がむかふにあらはれる。影さす、映す。うつらふ。源氏「赤き紙のうつるばかり色ふかきに」。

(二)色と色とよくあふ。

(三)轉じて趣きが似合ふ、よく配合する。

こつちは(一)

〔林檎〕 イバラ科梨屬の落葉喬木。幹高約三米、葉は楕圓形にて鋸齒を有する。春日白色五瓣の花を繖房花序に排配し、秋大形圓形の果實を結ぶ。味甘酸美味、生食外各種の用途がある。通常人家に栽培されるが特に寒地を好み、我國では青森・北海道を本場とする。信州では北部、殊に長野に産する。

〔樹影〕 コカゲ。

〔化生〕 クッセイ。(一)うまれること、生長すること。太平記「汝天地の中に化生して仁義の外に道造す」

(二)芋蟲の蝶となる如く、生物がその形を變ずること、即ち變態すること。(變態については四課語釋参照。)

〔なづな〕 前課後半部参照。

〔またら〕 (一)曼陀羅(梵語Mandala雜色の義)即ち淨土の實相を描いた圖。

(二)轉じて種々の色のあちこちと入りまじつたもの、ぶち。枕草子「馬は紫のまたらつきたる。」

〔山の上〕 教科書頭註参照。

〔貯へた野菜〕 雪にとざされて畑から野菜を揚げない、寒中の爲に、農家では室などへ野菜を貯蔵しておく。

〔葱〕 ネギ。百合科の多年生草本。シベリヤの原産である。

〔馬鈴薯〕 ジャガイモとよましてある。バレイシヨ英名 Potato。南米の原産で、歐洲に入つたのは十五世紀中葉スペイン人がエクワドルから持歸つたのに始まり、我國へは慶長五年オランダ人が長崎へ輸入した。

〔若布〕 ワカメ。和布・裾帶菜とも書く。褐藻類に屬する食用海藻で、我國各地の海中に自生する。長さ六〇糎内外、葉の中央に扁平稍厚手の一條の中筋があり、その左右に羽狀に缺裂する多數の柔軟な裂片があり、この部分を食用に供する。下部

〔羽蟲〕 ハムシ。(一)脈翅類に屬する昆蟲の一類。

鳥獸の皮膚に寄生し、羽・毛・垢などを食とする。長さ三厘餘、圓形・扁平で體面に毛が多く翅がない。虱シムシに似てゐる。

(二)こゝでは羽のある小蟲をいつたものであらう

〔いたち草〕 又はいたちぐさ。れんげう(連翹)と同じ。木犀科レンゲウ屬の落葉灌木。枝の上部は稍蔓狀、葉は卵形、鋸齒を具へ、葉柄を有して對生。早春四花瓣を開く。觀賞用として庭園に栽培される。いたちはぜ・はたけぐさともいふ。

〔小豆草〕 アヅキサウ。諸辭典に見えず、「三省堂百科」一卷製本中、

〔蓬〕 前課末尾参照。

〔蛇ぐさ〕 諸辭典に見えず。蛇いちぢ、(薔薇科へびいちぢ)屬の多年生草本、各地の原野に自生することか。

〔人蔘草〕 ニンジンサウ。人蔘菜(繖形科に屬する二年生草本。ニンジン・セリニンジンともいひ、各地の園圃に栽培し、根及び嫩葉を食用にする)

〔嫁草〕 ヨメグサ。嫁菜(菊科に屬する多年生草本。多く田家に自生し、嫩葉は食用とされる)

は柱狀の柄となり、之によつて岩礁に附着する。

わかめは生のまゝ酢味噌、三杯酢とし、筍と煮付けるとよく、又乾燥品は味噌汁にも適する。日本では古來食用として又縁喜物として用ひられる。

〔土壁〕 ツチカベ。土塀のこと。

〔青い煙〕 炊事の煙のこと。

〔陽氣〕 こゝでは氣候、氣節。(前出の(二))

〔凍豆腐〕 シミドウフ。豆腐を凍らせて乾燥させたもの。高野山で出來るものを「高野豆腐」といひ古來有名で、凍豆腐の略名となつてゐる。普通にはコウリドウフといはれ、シミは凍りにあたる信州の方言である。油臭いのは元來大豆で作られてゐるからである。

〔やつ〕 やつこ(奴)の略。(一)人や鳥獸を罵つて呼ぶ語。竹取物語「かぐや姫てふ大盜人のやつ」。

(二) 物事を卑めて指すに用ふる語。「そんなやつちや間に合はぬ」など。代物程しろものの氣持。

〔壁に吊され〕 繩でつないで壁などへ吊しておく、日光にあて、乾燥させるのである。

〔うんざり〕 厭きはてるさま。(俚語)

〔びしよびしよ〕 (一)細かな雨の絶間なく降る様。

〔草餅〕 クサモチ。艾即ち所謂餅草を搗きまぜて作る餅。三月末頃から野外に出ると香高き青草を摘み得る。根を除き土を洗つて鍋で煮、軟かくなつた時水氣を絞つてそれを庖刀の背でたたく。それを蒸籠で蒸した上糝粉に搗きまぜて製する。ちぎつて黄粉をつけたり餡を包んだりし、又菱餅の重ねにする。(但し今では古葉を用ひ着色して三月賣出す)

〔汽車〕 東京から小諸へは信越線で来る。

〔上州〕 上野國をいふ。今の群馬縣。

〔碓氷峠〕 ウスヒタフゲ。群馬縣利根川の支流碓氷川の溪谷から長野縣信濃川の支流千曲川(の一支流湯川)の流域に出る間の峠。海拔五五六米。中仙道隨一の關門として、又紅葉の名所として、又近くは二十六箇のトンネル、アプト式軌道を以て有名である。

〔輕井澤〕 カルキサワ。長野縣の東部、佐久平に續く追分原高原の一部をなし、海拔千米、西北に淺間の噴煙を望み、落葉松の丘、白樺の林がくれに赤屋根の洋館やキャムプ小屋が点在し、夏季内外

人の集ふ國際的避暑地として知られてゐる。人口五千。息せき喘いで登つて來た汽車はこゝで五分停車、旅客も打つて變る高原の風物に目を休める。

〔武藏野〕 關東平野の一部、東京の北部、西部に擴がる茫々たる平原、太平記には四方八百里と記されてゐるが、現在のそれは、西は秩父・西多摩の連山を以て限り、南は多摩川、北と東は越邊川・入間川・荒川筋を以て境とする。明治以後は首府東京と共に發展し、日常蔬菜の供給地として又郊外住宅地として、次第に昔の面影を失ひつゝあるが、獨歩の「武藏野」に描かれた様な愛すべきものが各所に殘存してゐる。

〔左様〕 サウとよませてある。

〔小諸〕 コモロ。もと小室とかいた。長野縣北佐久郡の町、上田と輕井澤の間にある。牧野氏一萬五千石の城下で、今懷古園として遺る城趾は千曲川の北に臨み、藤村氏「千曲川古城のほとり」の名句以來特に名高い。追分節には「小諸出て見よ淺間の山にけさも煙が三筋立つ」とある。

〔萌え出す〕 (一)芽さす、芽ぐむ、生ず。萬葉「岩走るたるみの上の早蕨の毛要出春になりけるか

も」

(二)心にきざす、思ひ出す。新勅撰「春くれれば雪の下草したにのみ、もえ出づる戀を知る人ぞなき」こゝは(一)

〔麥〕 禾本科一年生又は二年生草本、大麥・小麥その他がある。共に食用植物。秋蒔くと來年の晩春收穫出來るので普通稻と交互に栽培される。

〔舊葉〕 フルハと訓あり。

〔撞に〕 ホシイママに。欲しきまゝにの音便。縦に、恣に、肆に、皆同音。思ふまゝに、勝手に、欲するがまゝに、自由に、充分に。

〔堪へて〕 コラへて。我慢して。咲きたくて咲きたくてたまらなかつたといふ氣持。

〔杏〕 アンズ。薔薇科に屬する落葉喬木。葉や花は大體梅に似てゐるが、花は梅より遅れ、色は淡紅色で一重咲・八重咲があり、前者は全く梅の様で、たゞ梅よりも大形の實を結び、後者は實がならぬ。果實は夏季成熟し、帯紅黄色、肉と種とが容易に分離する事も梅と異ふ點である。生で食べ、乾杏とし、又アルコール漬・砂糖煮・罐詰とする。

我國では信州北部に多く栽培される。

〔茱萸〕 グミ。胡頹子。灌木の一。枝細長く叢生し葉は楕圓形で、赤い小實を結ぶ。

〔懷古園〕 クワイコエン。前出、頭註にあり。今藤村氏の「千曲川旅情の歌」の碑が立つてゐる。

三 日章旗

一 教材研究

1 解題

本課は「日の丸由來記」より採った。本書は東京日日新聞社の編であつて、昭和三年十月發行の單行本である。即位御大典を壽ぐ意味にて同紙々上に掲載せられたものをまとめたもの、由。

2 文章

北清事變及日清戦役の際、日章旗についての逸話二。乃木大將と日章旗の話。

3 節意

第一節 北清事變の時白石葎江太尉の血染の日章旗（三〇六頁十一行まで）

第二節 乃木さんが村人に日章旗を配布して村人の國旗掲揚の心持を作つたこと（三〇九頁五行まで）

第三節 日清戦争の時朝鮮で天長節を壽いだ折の梅干染の日章旗（終まで）

4 句意

（ぐづくづして居れば、あたら同胞を大死させた事になる。見よ、足もとは同胞の屍が累々と横はつてゐるではないか。）

悲壯な場面である。同胞の屍の折りかさなつた上に日章旗ならぬ英國々旗がひらめいてゐるのである。

これを目堵する日本人にして誰として切齒せぬ者はあるまい。まして白石太尉にとつては魂魄に沁む痛恨である。

（聲も立てずに目を睜つてゐた列國の軍隊）

英國士官の昏倒。白石太尉血染の日章旗、この動作は正に外國兵には目を睜らざるを得ない事實であつたらう。而もこの列國の軍隊で一齊に日本軍の萬歳に和したといふのは實に壯快である。白石太尉の勇敢な行爲が赤日かゞやく日章旗にあらはれて、その氣魄遂に外國人の心を壓伏した。日本人の血によつて染められた日章旗の前に諸人みな心を致したのである。

（元旦、日の出と共に、乃木さんの庭に日の丸が翻翻とひるがへつた。村人はそれと言ふので……）

村のどこからもみえる所に乃木さんの旗があるが、それが元旦の日の出と共に上つた、村人が見てそれと云ふので待ちかまへたやうに日の丸をかゝげた、これは實に氣持のいゝ話である。乃木さんの徳が日の丸によつてたちまち村人全體に及び、而も相率ゐて皇國の精神に従ひ進むところは傍の見る目もすが

すがしいことである。それが朝日にかゞやく日の丸の旗を中心としてゐることが愉快である。

〔有り難うございます〕

國旗を出してある家に向つて、かう云つたといふ乃木さんの心持は床しい。乃木さんの質朴な、謙遜な、篤實無比な心持がよくあらはれて居る。

〔梅子の汁で粗末な半紙の真中に日の丸を描いたもの、細い竹竿の尖には梅漬の紫蘇の葉をまるめた玉がつけてあつた〕

兵站部の兵卒の作りさうな日章旗である。かるいユーモアがあつてそれが戦地での出来事であると思ふと、又泪ぐましい心持もする。陛下の萬歳を唱しながら涙が下つたといふのも、この梅干日章旗のあつた爲めであり、人々の心の中心になるものがそこにあらはされて、はつきりと人々の心が一致し、感激するといふ機微を語つて居る。これが、やがて陛下の御卓の上に三日在つたといふのは、又更に泪ぐましい心持がする。

二 指導研究

わが國旗は萬國に冠絶して居る。この事は今更いふ迄もない。明瞭で爽快で常に前途のあかるさを示して居るやうに思はれる。此日章旗が折を得てもつともその力を發揮する話を三つこゝにあげたのであるが、その根本に流れてゐるものは一である。それはいかにも日章旗は吾々の心を象徴して居りこれを見る度に

何人も心に感ずるものを持つといふことである。白石太尉の勇猛な話にしても、乃木さんの床しい話も、梅干日章旗の泪ぐましい話も、どれもじめじめして居ない。朝日の豊榮のぼる如きあかるさがある。わが日本は常若の國であるのだ。

一つの團體である上には統一がなければ、團體たるの本質を有たない。此統一には團體としての統一精神が必要である。吾國家も一の立派な團體であり、従つて統一精神は炳乎として存在する。日章旗はその象徴である。吾々はこの旗を守り永久に光輝あらしめねばならぬ。國旗をあげこれを拜する風習は今や全國的になりつつある。乃木さんが那須野に於て實行した趣意が、今一般的になつて來てゐるのだ。わが國民精神の象徴を大切にしようといふのは、國民の自覺によるのであつて、非常に著しい現象である。これは益々助長し發展させなければならぬと同時に、物事の一般化には、必ず類型的形式的なものが伴ふ事實を忘れないやうにしなければならぬ。一般化したものに類型、形式の従ふところ、それがたとへ釋迦の御言葉であつても、又無力有害であるといふことは、從來の事實が示して居る。そこで本課にあげたやうな實話はこの一般化より類型化への動脈硬化を防ぐ、一の注射薬であると思ふのである。

三 參考資料

「日の丸由來記」には日の丸旗を國旗として制定したのに就いて左の如き逸話がある。

「幕末、外國との交渉は日々々々はげしくなるが我が國にはまだ國旗といふものがない。薩摩は響、長州、

土佐各々その海軍は自藩の旗を潮風に吹きなびかせてやつて来る。困つたのは相手に廻る外國船で「一體日本の「總印」はどれだ」といふことになつた。

各國とも國旗は船の印からはじまるが日本もその通り。こゝで當時海軍の一番立派に出来てゐた薩摩の藩主島津齊彬公は、嘉永六年ペルリ條約の締結直後、幕府が大船製造の禁をとりため巨船十二艘を製造し、これに異國船と間違はぬやうにと、すでに、幕府の許可を得て、白帆の真ん中に朱で大きな日の丸を書き、別に同じ日の丸の小旗をも用ひてゐたが、それも云はゞほんの假りで、はつきりと定まつてはゐないので、こう云はれると心配し出してまづ水戸の烈公へ相談をかけた。越前の松平春嶽侯、佐賀の鍋島閑叟侯、話は段々に廻つたが、さてお互にいゝ思案が出ない。

「徳川家の三つ葉葵がいゝ」といふ説も出たが齋彬公が「わが國の總印である。天朝の在すを如何にするか」大反對。「然らば天朝の御紋章たる菊又は桐は如何であらう」といふ、これも「菊桐はもつたいたなくも皇室の御紋章であつて、下々までがこれを總印として用ふる事は出来ない」といふ理由で駄目であつた。薩藩の轡にしてはどうだ、いや長州の團子にしてはどうだ、いや土佐のがどうと、甲論乙駁容易に話がかつかないが、その間にも齋彬公は懸命になつてこれを考へつゞけてゐる。或夜廁へ入つてゐるうちにふと總印のことだ、思ひつきがあつたので、ふいと飛び出して来て驚きあわてる小姓に目もくれず、自室へ入ると頻に國旗に關する何事かを書きつゞけたといふ話がある。

やがて總印「日の丸」案は齋彬公から出た。烈公も春嶽侯も閑叟侯も大賛成、この案をふところに安政

元年七月十一日、焼きつくやうな日の中を俄に登城した、齋彬公が時の老中筆頭阿部伊勢守正弘に逢つて「如何でござる」と談じ込んだ。

正弘はこの話をきいて「御尤もでござる、拙者も同意」とはいつたがどうも返事が煮え切らない、だん／＼詰寄せると正弘閉口して「實は私の紋どころは御承知の如く鷹の羽でござるがまた石持にて黒丸をも用ひてゐる、もし日の丸をわが日本の總印とするにおいては、阿部はその身老中筆頭の職にあるを幸として自家の紋をもつてわが國の總印とした、僭越至極無禮千萬との非難を受けねば相成りません、外に名案もござるなれば……」との事である。

日頃正弘とは親交ある仲ではあつたが、これを聞くと齋彬公は面色を變じ「然ることは阿部家の片々たる私事である、總印の事は天下の公事公論である、貴所の困る困らぬなどはこの際口にすべきでは御座るまい」と怒鳴り立てた。

伊勢守「然らば」といふので船舶の總印は忽ち日の丸と決定し、即日御書付を以て下々へこれを示達した。

「大船製造に付而者、異國船に不_レ紛様、日本船總印者、白地日の丸幟相用候様、被_二仰出_一候、且又公儀御船之儀者、白紺布交之吹貫帆中柱へ相建、帆之儀者白地中黒に被_二仰付_一候條、諸家に於ても、白地中黒は不_二相用_一遠方にても見分け候帆印、銘々勝手次第相用可申候、尤帆印其家之船印にても、兼而書出置様可_レ被_レ致候、右大船之儀平常廻米其外運送に相用候儀、勝手次第に候得共、出來の上者、乗組人數並海路乗筋

運漕方等、猶取調可被相伺候、
右之通可被相觸候

一説に御書付の出たのは翌十二日であつたともいふ。

かうして一旦定まつたけれどもまだ一般的にならず、殊に維新の反亂中はかういふ示達も効力がなくて官軍は錦の御旗を、幕軍は葵の旗を押し立て、日章旗は影を消してゐた。これがもつとはつきり國旗として布告されたのは明治三年一月二十七日、太政官布告第五十七號によつてである。

けれども日の丸が國旗とならない前に、すでに用ひられて居たので、後醍醐天皇の御用ひになつたといふのは少し疑があるやうだが、豊臣秀吉の朝鮮征伐や、武田上杉の川中島の戦に兩方ともこれを用ひて居たといふ話や、山田長政のシヤムへゆくとき船の旗幟としたといふことは事實らしい。但今のやうに國旗とされたのは明治になつてからで新しい吾々の標示であることを考へるとこの大改新の時に定まつたものでそこに國民の進取の精神がこもつて居るのももつともなことであると思ふ。

語 釋

〔日露戦争〕 明治三十七八年戦役ともいふ。七年（一九〇四）三月より八年十月に互る世界的にも戦史的にも劃期的な戦役であつた。西歐に良海を持たず、黒海ベルシヤ灣に志をのべ得ざりし東歐の

絶豪ロシヤの東方進出軍の壊滅、極東に於ける新興銳氣の日本の華々しき國際的擡頭を注意すべきであらう。日清戦後の滿鮮問題に端を發して惹つた。

〔廣瀬中佐〕 武夫。大分の人。海軍兵學校卒業後、日清戦争従軍後、命ぜられて露都に駐劄六年、大いに國情に通じ、歸國に當つては獨行雪を衝いてシベリヤを貫き、東清鐵道を窮め來つた。三十七年二月、我海軍旅順港を攻むるや朝日水雷長となり、二十三日有島中佐等と共に決死隊七十餘人を率ゐる五船に分乘し進んで港口に自沈せしめたが効完からず。三月二十六日第二回閉塞隊を指揮し、遂に壯烈な最期を遂げた。作業終了後部下をボートに移したが猶一人を缺くや、三度還つて之を索めた。時に砲丸全身を掠めて僅かに一片の肉を留むるのみであつた。年三十八。東京神田須田町に軍神として英姿を傳へてゐる。

〔閉塞隊〕 ヘインクタイ。旅順港を根據とする露艦が時々出沒して我軍の行動を妨ぐるおそれがあつたので、灣口に朽船を並沈して之を封じ込めようとした。敵砲臺の探海燈の光をあびて壯烈なる作業が行はれた。

〔白石葭江〕 シライシアシエ。頭註参照。

〔北清事變〕 ホクシンジヘン。明治三十三年義和團匪の内亂によつて清國と列國の間に起つた紛争。

日清戦役で今まで眠れる獅子とおそれられてゐた老大國支那は、その弱點を完全に暴露したので、ロシヤは遼東還附の報酬として東清鐵道の敷設權を獲、ついでドイツは宣教師の殺されたのを口實に膠洲灣を租借し、之に對してロシヤは更に旅順・大連を租借する、イギリスも威海衛を、フランスも廣洲灣を租借した。清は拒絶の實力を缺いたのである。茲に外人嫌忌の念は勃然として民間に起り、遂に三十二年五月義和團と稱する暴徒が山東省に起つて外人排斥を企て、後には官兵も加り、翌六月には北京の列國公使館を圍んだ。列國は聯合軍を組織し、日本軍はその中堅となつて、暴徒を被つて北京に入り、漸くにして公使館を救つた。此際我が軍の威力を通じて、新時代日本の聲威の嵩められた事は決して少くない。

〔北京〕 ベキン。今北平といふ。支那本部の北部白河の流域、廣漠たる平野に位する人口百萬の大都會。遠く遼、金、元の時代より常に國都となつた地で、明の永樂帝の時、都を金陵から此處に遷し南京に對して北京と呼び、爾後清を経て最近まで一般にはこの名で呼ばれたが、民國十九年（一九二八）

國民黨政府樹立と共に北平と改稱、市制が布かれた。大國數代の帝都として名勝古蹟に富み、又政治學術の中心をなす。

〔太沽〕 渤海灣に注ぐ白河の河口南岸にある港市天津に入港出來ぬ大汽船はこゝで荷物の荷揚げをする。冬季結氷の憾みはあるが、交通上、軍事上形勝の地を占めてゐる。河を距て、北岸に京奉鐵道の一驛塘沽がある。

〔陸戰隊〕 海軍軍人が一隊を組織して陸上戰闘をなすもの。通常陸軍と協同動作をなす場合のもの。と、單獨動作をなす場合のものに分ける。北清事變に於ける太沽砲臺占領は後者の例。

〔あつけ〕 杲然。意外の事に出あつて驚き呆れるさま。

〔士官〕 陸海軍の少、中、太尉、及びその相當官をいふ。轉じて廣く將校の意に用ひる。

〔颯と〕 サツと。(一)俄かに吹いて來る風の音にいふ。

(二)にはかに。急に。宇治拾遺九「一度にさつとうせぬ」。

こゝは(一)。

つて我を忘るゝ事。毛吹草「月を見る人の心や有頂天」。

〔言ひさま〕 いふなりに同じ。様は云々の動作をなす途端の意。冥途飛脚「忠兵衛が内を出さまにのべ、三折つゝ入れて出て」。

〔體當り〕 タイアタリ。擊劍で飛込みさまに自分の體を以て相手の體を突きとばすこと。

〔薬指〕 小指の隣の指。(この指先に薬をつけて塗つたりするからいふ)。紅指指ともいふ。

〔滾々〕 コンコン。水の盛んに流れるさま。杜甫詩登高「不盡長江滾滾來」。

〔喉咽〕 ノド。

〔大音聲〕 ダイオンジャウ。大聲。大音。平家四、宮御最後「燈籠張り立ち上がり、大音聲を掲げて」。

〔連呼〕 續けさまによぶ。

〔睜る〕 ミツめる。みつめる。目を張つて見る。

〔和す〕 ヲす。調子を合はす。同する。應ずる。一致する。

〔日清戰爭〕 明治二十七八年戰役ともいふ。二十七年(一八九四)七月より八年四月に亙る日本・清國間の戰役。明治十七年京城の變後朝鮮半島に於

〔目ざとし〕 目ばやい。見付ける事が早い。又眠りからさめる事が早い。

〔心頭〕 シントウ。心の上。心。念頭。心中。李山甫詩「更無塵事心頭起、還有詩情象外來」。

〔あたり〕 惜しむべきこと。惜しい。あつたら。萬二〇「秋のぬに露おへる萩をた折らすて、安多良盛かりを過ぐしてむをか」。

〔累々〕 さなるさま。

〔隼〕 ハヤブサ。猛禽類の一鳥。形普通の鷹より小さく、背は蒼黒、胸腹は灰白、稍赤味を帯び、全面に斑紋がある。雁、鳧、鸞等を撃つが雲雀などの小鳥は捕へない。性勇猛なるも胎鳥を襲はず、夜間爪を温める爲に小鳥を攫むが翌朝放ち去らしめるといふ。「隼の如く」といへば、勢猛なる事の形容。

〔翻す〕 ヒルガへす。身を躍らし飛ばす。身をはねかへす。散木集冬「難波瀉蟹のいさりに立つ千鳥幾度磯をひるがへすらん」。

〔有頂天〕 ウチャウテン。(一)梵語阿迦尼吒の譯。九天の中の最上の天。色究竟天。うちやう。

(二)好む事に熱中して他を顧みぬこと。得意にな

ける日本の勢力は一時全く衰へた。二十七年に至り東學黨の亂起るや、清國は天津條約に藉口して大兵を送た。日本も居留民保護の爲出兵、清國と協力韓國の弊政を改革しようとしたが、清國は増兵又増兵、日本を威嚇せんとした。七月豊島沖の海戦ついで成觀の陸戰となり、七月宣戰の布告となつた。この役により老支那は完全にその馬脚を露はし、一方日本は初めて國際的水準に上る事となつた。

〔那須野〕 ナスノ。栃木縣那須郡の殆んど全體を占める廣野。東は黒川、南西は箒川、北は那須山麓に至り、南北二十里、東西約十里に及び、全野第四紀古層の累積より成る。蓋し第三紀末期まではこゝから東京、水戸邊まで一面の海水であつたが、漸次海底隆起し、遂に一大砂礫層を構成したものである。徳川時代以來何回も開拓行はれ、明治十三年那珂川の水を細竹村より分けて西原の西端に至り(工費五萬八千圓)、十八年更に那珂上流を岩崎に分ち、那須東、西の兩岸に流水せしめた(十萬圓)。茲に於て拓殖その緒に就き、開闢雄大なる山麓の原野に牧場、田園開け、戸數千數百戸を數ふ

るに至つた。

〔百姓生活〕 乃木大將（當時中將）は日清戦争後二十九年臺灣總督、三十一年第十一師團長歴任後、三十五年待命となるや、那須野に原野を購つて農事に従ひ、日露戦争で復活出征まで簡易節儉農夫に異なるなき生活を送つた。居所の地名に因んで石林子と號した。

〔日章旗〕 日章の標は、朝廷に於ても日月幢等に行はれ、諸家の旗標としたものも多く秀吉の時御朱印船に日の丸の旗を掲げた事が記録され、又後醍醐帝の御案にかゝる日章旗が傳へられたといふが、古來我國は對外關係が少かつた爲、國旗といふ觀念は頗る漠然たるものであつた。然るに幕末諸外國との交通開け、島津家で新造した船舶の旗標として白帆毎に朱の日の丸を印した事に端を發し、安政元年水戸齋昭の建議によつて日章旗を日本の船標となし、遂に明治三年太政官布告を以て日本の國旗と制定されたものである。正規では大小に拘らず縦は横の三分の二の長さの長方形で、日章はこの長方形の對角線の交叉點を中心として縦の五分の三の直徑を有する正圓といふ事になつ

てゐる。色彩の單純明白にして印象的なる、形状の圓滿、優美なるを象徴する意義の雄大・純潔なる、國旗として最も傑れた要件を具備するものである。

〔だんだら〕 段々と同じ。だんだら縞の意。

〔翻翻〕 ヘンボン。鳥又は旗などのひるがへるにいふ。ひらひら。平家三末「靈鳥天より飛び來つて

白旗の上に翻翻す」。

〔三大節〕 三大祭日即ち、四方拜、紀元節、天長節。

〔那須風〕 那須山脈から吹いて來る風。

〔空つ風〕 カラツカゼ。カラカゼ。乾風とも書く。雨雪を交じへずに吹く強風。小町踊者上「から風

やからわにわくる柳髪」。

〔大館集作〕 オホダテシウサク。

〔石黒軍醫總監〕 子爵、樞密顧問官。石黒忠恵。新潟縣の人。弘化二年平野氏に生れ本家石黒家を繼ぐ。江戸醫學所で外國醫學を學び、維新後大學に

教へた。明治四年陸軍に轉じ進んで軍醫總監となり、久しく陸軍省醫務局長であつた。日清の役に野戰衛生長官として功あり男爵を授けられ、大正

九年子爵に陞つた。又赤十字社々長たりし事もあ

年五十七。功により中佐に昇る。

〔なみなみ〕 波々。波立つまで。あふるゝばかり。

十二分。滿々。狂言水論「隣りの田には水がなみなみとある」。

〔肅然〕 おごそかにとゞのふさま。嚴然。史記封禪書

「時去時來、來則風肅然」。

〔生憎〕 アヒニク。

〔半紙〕 もとは延紙シヤクシを半分にしたもの。今は別にその大きさに製したもので用途の最も廣い日本紙である。

〔即座〕 すぐその場所。即席。

〔機轉〕 キテン。氣轉とも。(一)氣の利いたこと。目先の機敏なこと。謠安宅「唯今の機轉、凡慮より

なすわざにあらず」。

(二)豫め考慮せず、其の時の思ひ付きで物事を爲す事。娥歌加留多五「其日其日のきてんの身す

事」。

こゝは思ひ付程の意。

〔尖サキ〕 先の意。

〔紫蘇〕 シソ。唇形科シソ科の一年生草本。我が國

に

多し。

〔山縣中佐〕 名は俊信トシノブ山口縣の人。維新の際東北に

轉戦西南の役には田原坂の激戦に鬼太尉の名をとどろかした。日清戦争には兵站部司令官として出征、役後屯田兵少佐に轉じ數年後豫備役となる。日露戦争起るや近衛後備歩兵第一聯隊付として出征の命をうけ、三十七年六月十五日陸軍運送船常陸丸に搭乘航海中玄海灘にて敵艦の襲撃を受け、免がるべからざるを察するや自ら割腹して逝く。

り明治の醫界に貢献する處が多い。今は隱居して子忠篤氏が繼いでゐる。軍醫總監は陸軍又は海軍に附屬して醫務に従事する者の長官。

〔佳節〕 嘉節とも。よい時節。祝の日。佳辰。曹植文「千載昌期、一陽嘉節」。

〔兵站部〕 ヘイタンブ。作戰軍の後方にあつて軍需品の輸送又は收容を取扱ふところ。

〔鏡〕 樽の蓋（形が圓いのでいふ）。槍權三上「四斗入りのあき樽中略それ鏡突き抜け」。

〔錫〕 スルメ柔魚又は烏賊イカを乾燥したもので、我國輸出水産物中重要な地位を占めて居る。餘り強くない炭火で炙つて割いたものが一番よい味。よく酒の肴にされる。

〔山縣中佐〕 名は俊信山口縣の人。維新の際東北に轉戦西南の役には田原坂の激戦に鬼太尉の名をとどろかした。日清戦争には兵站部司令官として出征、役後屯田兵少佐に轉じ數年後豫備役となる。日露戦争起るや近衛後備歩兵第一聯隊付として出征の命をうけ、三十七年六月十五日陸軍運送船常陸丸に搭乘航海中玄海灘にて敵艦の襲撃を受け、免がるべからざるを察するや自ら割腹して逝く。

各地に自生。普通草丈一二米。葉は心臟形で鋸齒を有し、對生する。色は赤紫と緑の二種があつて赤紫蘇青紫蘇といひ、葉がちぢれてゐるのを縮細紫蘇といふ。八九月頃唇形の花群をつけ、花は穂狀花序、質紅。果實は無数の小粒をなす。葉も實も食用となる。赤紫蘇は八月頃葉及び嫩梢を採つて梅酢にし、(梅干が赤いのはその爲である。)青

紫蘇は穂を採つて鹽漬にし、又葉は煮たり紫蘇卷にして食べる。
〔大本營〕大森の下におく最高の統帥部。幕僚及び各機關の高等部をおき、參謀總長及び海軍軍令部長は各々その幕僚に長として帷幄の機務に率にし、作戰を參畫し、陸海軍の策應協同を圖る。
〔天機〕天子の御機嫌。

櫻井 驛

一 教材研究

1 解説

作者 松居松翁 マツキ シウヲウ 明治三年仙臺城下鹽釜町に生る。仙臺中學校中途退學。丁稚奉公五年の後上京、専修學校・國民英學會等に學び故イーストレーキ博士につき語學を學び一時同博士の家に寄寓した。坪内逍遙の下に「早稻田文學」の編輯に従事した後中央新聞記者となる。明治二十七年脚本處女作「昇旭朝鮮太平記」を讀賣新聞に掲載し、爾後、先代左團次の爲に數種の脚本を書く。譯著の脚本百四十餘種。上演せられたもの九十餘種に及ぶ。外遊二回、倫敦劇術學校に學び演技法を修め、世界の名優多數と相知つた。劇界の一種威である。本名は眞玄(サネハル)、初め松葉と號し、大正十三年以來松翁と改む。昭和八年七月、病んで東京の自宅に歿した。行年六十四。本文は「補正成」の第二幕攝津國櫻井驛の文を刪修した。

2 文意

櫻井驛に於ける楠氏父子訣別の場を描いた戯曲。正成の決心、父の決心を知る正行のかしこさ、お久の

方の沈着なる態度。

3 節意

第一節 正行とお久の方到着。(三二四頁九行まで)

第二節 訣別に際しての正成の心。(終まで)

4 句意

(其の後に母屋の見ゆる心)

「心」は、躰(テイ)とか雰圍氣とかいふ意味。上演の場合は舞臺の背景の繪に、母屋の屋根を一寸覗かせるのが普通である。

〔何にしても、こゝは庭先云々〕

この水無瀬の詞は、實際のかういふ場合の語としては、簡單すぎる。現實では、もつと種々の詞を以て挨拶すべきである。しかし、さういふ穿鑿をしないで、讀みつゞけて行けば、殆どその不自然なことに氣が付かない。其れは讀者が、此の詞より後の方に展開せらるべき劇的興味の方に、心を惹かれてゐるからである。かやうにして、戯曲の中には現實生活の直寫と異なる點の存すること及び、それでも不自然に感じられないやうな眞實らしさが感ぜられることを説明してやつたらいとと思ふ。

(申し聞きたいこと)

申し聞かせたいことの意。他の動詞の下について敬意を表はす「きこゆ」の連用「きこゆ」の訛つたものか。そして意味の方も轉化したのであらう。

(行々子鳴く)

これは舞臺効果として、幕の後や、天井で擬聲を行ふべきト書きである。こゝは劇の空隙(詞を用ひることの出来ない部分)で、劇で最も大切な觀客の注意力を下手をすれば放散させる危険のある所である。康光夫妻、召仕、武士、皆退場して、楠公父子三人が舞臺に残つた。この三人は戰の隙を見てこの世の最後の對面をするのである。三人は共に感慨無量で、一寸何と言ひ出していゝかわからない。かういふ氣持は言葉では絶體に表はせない。表情や身體の動きでは勿論不可ない。止むを得ず言葉のない何秒かを作る。その沈黙を生かして、前述の三人の氣持を推察すべき効果が必要となる。この効果のために「行々子鳴く」を入れたので、大勢の人々の騒がしく出入してゐる所から、しんみりした訣別の場へと、一座の氣分をよく轉換してゐる。

〔此の度はわざと、お迎へを云々〕

このお久の方の言葉は、右の「行々子鳴く」を説明する際述べたやうな、重要な氣分轉換の後の一言で、最も大切であるが、大へんよく出來てゐる。正行とお久の方が、どうして此處へ來たか、を説明すると同時に、普通のことでは來たのではないことを暗示してゐる。

(お久の方黯然となる)

この卜書きも効果ある説明である。お久の方は、今度もこれが最後の対面であらうことを察したのである。

(その尋ね方は愚か過ぎるぞ)

この前の問答では正成は子に向つて「それは偉いなあ」と云つて居る。そこに父の愛情はあふれて居る。こゝになると語氣があらく嚴然として來た。これも亦父の愛情である。「死を決しておいでに」といふ庄五郎の言葉はこの場合、父の「世を去れる」といふのに對して云つたのだから無理もない。正成はしかしそれをとつてつよく子を教誡した。われ亡き後武士として立つべき覺悟をそれとなくさとして居るのである。

(なぜ今度に限り、わざわざ私どもを………)

お久のこの問は實にもつともな理であつたから正成も今度は庄五郎に對するやうにはゆかなかつた。正成の心理のもつとも大切な重要なところにふれたのである。さう考へるとお久のこの問は讀者にひやりと思はせる所で、従つて笑つて「齡のせゐらしい」と云つた後の正成の長い答が興味深いものに解せられる。それとあらはに云はないが最後の悟に入つた心境を述べて居るのである。

(今度ばかりは安心して御見送り申す事が出来ます。有り難うござりまする。若し神佛の思召に適ひます事ならば、出来ますだけは御身命をお厭ひ遊ばして………)

正成の答ではつきりその心境を知つた上かういふお久はかしこい又女丈夫である。「今度ばかりは安心して」とは血を吐く思ひのことばである。「ありがたいござりまする」は正成に向つて云ふやうで、心はもつと大きなものに向つて祈り伏してゐるやうな氣がする言葉である。たしかにこれは正成の最後の覺悟を見て取つたのである。これなら夫君は丈夫でおかへりになるであらうといふ安心ではあるまい。さういふ意味のありがたいではあるまい。だから次の「若し神佛の」と云つた。立派な覺悟で最後の戦に向ふ夫の心はありがたい、けれど出来ますならば、その上御丈夫に越したことはないといふ、まことに涙をさそはれる切々たる言である。心をひそめて聞くべきである。

(この時上手に陣鐘・太鼓の音聞ゆ)

父子共に言ふべきことは言ひ終り、覺悟はきちんと決つた。其處へすかさず軍兵發足の陣鐘が鳴り渡る。最後まで、何事かで觀客の注意を惹きつけてゆかねばならない戯曲の任務が、完全に果されてゐる。

二 指導研究

1 着眼點

孤忠よく、勢猛なる、賊軍を滅し得ざるを明察してゐる正成は、湊川の戦に出づる前、自ら心安からざるものがあつたが、訣別の爲め引見した妻お久の方と、正行との決心の固いのを見て落ち着いた心に立ち返ることが出來た。自分の決心を理解せしめようと、子にはやさしく又きびしく言ひきかせ、妻には情理

をつくして語つて居る、その間の正成の心理描寫を味ひ度い。

正成、正行の盡忠報國の堅い決心と共に、是非理解させなければならぬのは、夫の尊い仕事をよく了解して、私怨は一つも口にしないお久の方の強い性格、堅い決心である。そして確乎とした決心の中にも、婦人のこまやかな心があふれんとして居る點を見逃してはならない。

2 戯曲の理解

本課は、生徒が初めて觸れる戯曲であるからその形式と、鑑賞法との大體を知らせたいと思ふ。試みに生徒に教授すべき略案を立てて見よう。

1 戯曲の形式。

戯曲は、文字の表現を通じて、音聲（言葉）と運動（動作）の生命を暗示する所に、その特質が存するのであるが、その普通の表現形式は、

(イ) 對話。

(ロ) ト書き。

の二部分から成る。對話は戯曲の主要部分で、或は之を戯曲の全部と見ても差支へない。ト書きは、上演される場合の諸々の効果を説明した部分で、對話を補佐してゐる。對話だけでト書きのない戯曲もあるが、それは上演に當つての諸効果を、上演監督に一任してあるだけで、諸効果を無視したのではな

い。又對話を主要部分、ト書きを補佐の部分と言つても、戯曲の上演さるゝといふ本質から考へて見れば、兩々相俟つて全きをなすものである。

2 戯曲の鑑賞法

戯曲の鑑賞法は、實際には、俳優の演技に依つて表現される所謂芝居として見る場合と、戯曲を読みその上演さるゝ姿を想像して鑑賞する場合との二種があるわけであるが、こゝでは兩種を區別せず、後者を主として説明して見よう。

(イ) 主題は何か。即ち作者が作品の中に言はんとする意圖は何であるかを考へて見ること。本課の主題は着眼點の條に説明したものである。

(ロ) 主題が、その戯曲の人生や人物や事件の中によく溶けこんでゐるかを考へて見ること。

(ハ) 登場人物の性格描寫と心理描寫とが完全に出來てゐるかを見る。一般に登場人物の性格は有り得るものでなければならぬ、その心理は、必然的の展開をしなければならぬと言はれてゐる。

(ニ) 事件の推移展開は論理的であるかどうかを見る。事件といふのは、一定の主題を中心として、一定の人物の醸し出す事件のことである。之を「筋」といつてゐる人もある。

(ホ) 對話の呼吸、言葉の印象（イメージ）が充分に出てゐるかを見る。

大體以上の如き項目を以て手引をしてやれば、戯曲と、小説、隨筆、等他の文學との區別を納得せしめ得るだらうと思ふが、これは單なる項目に過ぎない、かく實際教授に當つては、或一つの戯曲を例

にして、實際に即して説明せらるべきは勿論である。

三 參考資料

〔文學としての演劇〕（日本文學大辭典）

抒情文學・敘事文學と對立し劇文學乃至劇詩と呼ばれる。或る時或る事情の下に或る人物の間に生じた事件を客觀的に、第三者的實在又は架空の人物に假託して、彼等の對話と行動によつて展開せしめるのを、主要目的とする。人生の事件的經過を題材とする點に於ては敘事文學と共通性を有して居るが、後者は事件的經過を専ら過去として取扱ふに反し、前者は經過そのものを現代的に目前に行はれつゝあるものとして展開せしめる。敘事文學はその長さに於て制限を蒙ることは遙かに少いに反し、劇文學は劇場に於ける實演關係からして、時間的經過及び内容の長さを必然的に或る限度まで制限するか、壓縮するかしなければならぬ。この意味に於て劇曲三統一の一つ、時間の統一は或る程度の妥當性を有するものである。また抒情文學も敘事文學も劇文學も、表現手段として言語を用ひるが、その機能は各自の文學形態にありて各々異ならねばならない。原理としては抒情文學の言語は感情の代表であり、敘事文學のそれは主として事柄の代表であり、劇文學の言語は動作の代表である。

語 釋

〔攝津〕 セツ。現大阪府西部に當る。

〔櫻井〕 現大阪府三島郡島本村の大字。山崎街道に沿ひ、古松の下に碑が建つてゐる。曰く「撫子にかゝる涙や楠の露。」蕉翁の句である。

〔兵衛尉康光〕 ヒヤウエノジウヤスマツ。（兵衛尉はもと兵衛府の官名）

〔下手〕 シモチ。（一）しもの方。

（二）下流。

（三）劇場で舞臺の、見物席から見て左手の稱（上手の對）

こゝは（三）

〔母屋〕 オモヤ。（一）家の中央部、即ち庇・廊下などでないところ。

（二）専ら住居にあてる建物。本屋。

こゝは（二）

〔見ゆる心〕 見ゆる體、工合。

〔木振〕 キブリ。立木の様子。狭く枝振程の意にもとれる。

〔菊水〕 紋所の一。一輪の菊花が流水の上に半ば浮び出た形をしたもの。普通楠氏の定紋として置く。

〔天王山〕 チンノウザン。攝津・山城國境の山。二

七〇米。京都府乙訓郡山崎村の西に峙ち、山上に祇園祠山下に聖天堂があつて天王山といふ。京都盆地と淀川及び大阪平野の一部を脚下に瞰て風光がよい。古く山崎山といつて軍事上の要地で、頂上の山崎城址は文明二年山名是豊の築城に係り、山麓は天正十年の山崎の合戦や明治戊辰の役の古戰場。

〔寶積寺〕 ホウシヤクジ。天王山の南腹にある。眞言宗の寺で一名山崎寺、俗名又寶寺。聖武天皇の御願により神龜四年僧行基の建立と傳へる。昔は子院十二宇あつたが今は衰頽した。寺寶中龍神が聖武帝に獻納したといふ打出の小槌がある。寶積寺・寶寺の名起る所以であらう。

〔淀川船〕 ヨドガハブネ。淀川を上下する船の意。淀川は又澱川に造り、近畿地方の大河。琵琶湖の南端に發する瀬田川は大戸川を合せて山城に入り宇治に至つて宇治川となり、西北流して六地藏川を呑み、更に西流、南西流して淀に於て桂川を容れ、橋本に近く木津川、攝津に入つて芥川を併せ、神崎川を分流し、大三角洲をなして大阪灣に注ぐ。古來水運の便がよい。支流數七二、幹流約八十軒、

殆んど全行程行を可能とする。

〔正成〕 マサシゲ。元弘元年後醍醐天皇が鎌倉幕府を滅ぼすべく勤王の士を召し給ふに及び、聖旨を奉じて義兵を擧げ、初め河内の東條城に據り、また赤坂城に敵を防ぎ、更に金剛山千劍破城を築き、屢々出ては賊勢を挫いた。偶々足利尊氏の歸順により形勢好轉先に隱岐に流されし帝も還幸せられ、正成も攝・河・泉三國の守護や記録所寄人に任じた。尊氏叛くに及び、正成は護良親王を扶けて延元元年一時反軍を西國に走らせた。然し次いで同年五月尊氏等は大學東上、正成は新田義貞と共に之を湊川に防ぎ、戦利あらず、弟正季と刺違へて死んだ。年四十三。江戸時代徳川光圀碑を湊川に建て「嗚呼忠臣楠氏之墓」と頌した。明治十三年正一位を贈らる。本課場面は前記湊川出陣の折の事。

〔發足〕 ホツソク。出立。出發。旅立。

〔和子様〕 ワコサマ。若子様と同じ。若様。

〔これへ〕 此處へ。

〔お久の方〕 オヒサのカタ。方は敬稱。特に主人君主の夫人に多く用ひられた。

〔庄五郎〕 正行。正成の長子。よく櫻井の遺訓を守り、一族を率ゐて南朝に盡し、後醍醐帝を奉じて賀名生に入り、河内守となつた。爾後泉・河・紀の南軍に將として尊氏の部將を各地に破つた。こゝに於て尊氏は高師直・師泰をして正行を撃たしめ、正平三年正月五日兩軍四條畷に會戦、正行衆寡敵せず敗れ、弟正時と刺し違へて死んだ。年二十三。

〔鎧櫃〕 ヨロヒビツ。鎧を入れる櫃。(櫃ははこ) 〔忝けない〕 カタジケナイ。(一)はづかしい。面目ない。

(二)勿體ない。恐れ多い。恐縮。

(三)人より恩を受けて悦ばしい。有難い。

こゝは(二)

〔手前共〕 私共。

〔判官殿〕 お久の方に對してその夫正成のことをいつてゐる譯。判官はハンガン、晉便でハウグン。古い官名。次官の下、主典の上に位する。多く檢非違使の尉にいふ。正成は元弘三年に檢非違使尉となつた。

〔あれへ〕 あそこへ。向ふへ。

〔申し聞けたい〕 申し聞かせたい。

らうといはれる。その論ずる處は奇正兼ね至り百代讀兵者の寶典とされ、所謂虛實奇正の論の如き古今の勝負皆之に由らぬはないと傳へいふ、孫武吳王闔廬に見えて用ひられた。王一日後宮の美女百八十人を出して之に戦法を授けさせた。武は之を二軍に分け皆戦を持たせ、王の寵姫を各隊長とした。女軍皆笑ふ。武二隊長を斬り、大いに鼓舞した。女軍邁進、勇退、規矩繩墨になつた。武は將となつて西、強楚を討ち北、齊を滅し兵法十三篇を著したと。我國に於ける孫子の研究は江戸時代が最も盛んであつた。

〔吳子〕 ゴシ。周代、衛の人吳起の撰した兵書。圖國・料敵・治兵・論將・應變・勳士の六篇より成る。起は曾て曾子に學んだので、其の持論正しく、禮儀を貴び教訓を明かにし、王者の兵に近いと稱せられるが、孫子に比しては其の精彩遙かに及ばない。隋志唐志の各一卷がある。或は門人の筆ともいふ。

〔六略〕 リクトウ。周の大公望の遺書と傳へるが、四庫全書提要・古今偽書考等は後人の偽作だとし、てゐる。隋書經籍志より始めて登録せられ、唐宋

〔かうお出でなさりませ〕 かうは斯く、かうしての意で、句はこちらへおいで下さいと案内する言葉。

〔行々子〕 ヨシキリ。剖葦・葦切とも書く。燕雀類に屬する一鳥。形色共に鶯に似てゐるが、尾が長く腹が白い。夏季葦生の中に喧しく鳴く。よしはらすすめ・ぎやうぎやうしなどの異名があり、鶯舌家を「よしきりが囀る様だ」などといふ。

〔せるかの〕 所爲か喃。の爲かなあの意。

〔初陣〕 ウヒジン。(一)始めて出陣すること。

〔黯然〕 アンゼン。黯い貌。心いぶせくやるせない様。又別れを悲しむさま。江淹文別賦「黯然銷魂者、惟別而已矣」

〔將監〕 シャウゲン。近衛府の判官をいふ。頭註参照。

〔孫子〕 ソンシ。支那の古兵法書の名。周代の人、齊の孫武の著。魏の武王之に註し、三卷ある。又史記列傳には武の書十三篇を載せて漢書藝文志には孫子兵法八十二篇・圖九卷を載せてあるといふ。篇數の異同並びに時代に就ては諸説があるが、その文辭の簡嚴奇古なるによつて春秋時代の作であ

らうといはれる。その論ずる處は奇正兼ね至り百代讀兵者の寶典とされ、所謂虛實奇正の論の如き古今の勝負皆之に由らぬはないと傳へいふ、孫武吳王闔廬に見えて用ひられた。王一日後宮の美女百八十人を出して之に戦法を授けさせた。武は之を二軍に分け皆戦を持たせ、王の寵姫を各隊長とした。女軍皆笑ふ。武二隊長を斬り、大いに鼓舞した。女軍邁進、勇退、規矩繩墨になつた。武は將となつて西、強楚を討ち北、齊を滅し兵法十三篇を著したと。我國に於ける孫子の研究は江戸時代が最も盛んであつた。

〔吳子〕 ゴシ。周代、衛の人吳起の撰した兵書。圖國・料敵・治兵・論將・應變・勳士の六篇より成る。起は曾て曾子に學んだので、其の持論正しく、禮儀を貴び教訓を明かにし、王者の兵に近いと稱せられるが、孫子に比しては其の精彩遙かに及ばない。隋志唐志の各一卷がある。或は門人の筆ともいふ。

〔六略〕 リクトウ。周の大公望の遺書と傳へるが、四庫全書提要・古今偽書考等は後人の偽作だとし、てゐる。隋書經籍志より始めて登録せられ、唐宋

らうといはれる。その論ずる處は奇正兼ね至り百代讀兵者の寶典とされ、所謂虛實奇正の論の如き古今の勝負皆之に由らぬはないと傳へいふ、孫武吳王闔廬に見えて用ひられた。王一日後宮の美女百八十人を出して之に戦法を授けさせた。武は之を二軍に分け皆戦を持たせ、王の寵姫を各隊長とした。女軍皆笑ふ。武二隊長を斬り、大いに鼓舞した。女軍邁進、勇退、規矩繩墨になつた。武は將となつて西、強楚を討ち北、齊を滅し兵法十三篇を著したと。我國に於ける孫子の研究は江戸時代が最も盛んであつた。

〔吳子〕 ゴシ。周代、衛の人吳起の撰した兵書。圖國・料敵・治兵・論將・應變・勳士の六篇より成る。起は曾て曾子に學んだので、其の持論正しく、禮儀を貴び教訓を明かにし、王者の兵に近いと稱せられるが、孫子に比しては其の精彩遙かに及ばない。隋志唐志の各一卷がある。或は門人の筆ともいふ。

〔六略〕 リクトウ。周の大公望の遺書と傳へるが、四庫全書提要・古今偽書考等は後人の偽作だとし、てゐる。隋書經籍志より始めて登録せられ、唐宋

らうといはれる。その論ずる處は奇正兼ね至り百代讀兵者の寶典とされ、所謂虛實奇正の論の如き古今の勝負皆之に由らぬはないと傳へいふ、孫武吳王闔廬に見えて用ひられた。王一日後宮の美女百八十人を出して之に戦法を授けさせた。武は之を二軍に分け皆戦を持たせ、王の寵姫を各隊長とした。女軍皆笑ふ。武二隊長を斬り、大いに鼓舞した。女軍邁進、勇退、規矩繩墨になつた。武は將となつて西、強楚を討ち北、齊を滅し兵法十三篇を著したと。我國に於ける孫子の研究は江戸時代が最も盛んであつた。

の諸書等之を載せた。内容は文韜・武韜・龍韜・虎韜・豹韜・犬韜の六篇から成り、各一卷を十篇に分けてゐる。六は陰の數、陰は殺戮を意味する、つまり兵を用ひて無道を殺伐することを教ふる書。

韜は包藏の意、智謀を内に藏して、深密不測、勝を外に決するのは兵の要であるから六韜と名付けられた。日本渡來は宇多天皇前と推定される。已に藤原佐世の日本國見在書目録に見えてゐる。

〔三略〕 サンリヤク。全三卷。上略・中略・下略をいふ。漢の張良が下邳の圯上に於て黄石公より授かつたといふ兵書で、大公望の著と傳承するが、勿論明かでない。

〔鑿ぐ〕 ツグ。繼ぐ。承ける。

〔聲を勵まして〕 たしなめ云ひきかす氣持。

〔千劍破〕 チハヤ。

〔洛中〕 ラクチュウ。京都の市中（洛は永く支那の首都であつた洛陽、轉じて首府のある都）

〔死を必する〕 シをヒツする。生きて歸らぬと覺悟を定める。

〔心得のため〕 納得の行くため。

〔これは〕 今度に限つて呼び寄せたといふもの。

〔ゆふべ〕 昨夜。（迷つて妻子を呼んだ。後―昨夜―孫子を読んで迷ひがとけた。そこへ妻子がついたといふ順序である）

〔猶豫〕 イウヨ。（猶は疑深い性質の一種の獸で、物近づくと思へば豫め木に登つて害を避けようとする。疑深い人にたとへる）（一）ためらつて進退を決しない。躊躇。

（二）時日を延す。遷延。

こゝは（一）

〔三軍〕 サンガン。支那の周代に大諸侯を出だす定めなる上軍・中軍・下軍（各軍一萬二千五百人づゝ）の稱。後轉じて大軍の意に用ふ。

〔狐疑〕 コギ。狐の性疑ひ深く、氷河を渡るに且つ聽き且つ渡るといふ。それより事に臨みて遲疑するにいふ。

〔疾風迅雷耳を掩ふの追なし〕 風や雷の毫末の猶豫もなくやつて來て耳に手をやつてその音を避ける追もないといふ事、轉じて急遽敵の虚を衝くにいふ。

〔杞人が天を憂ひたる〕 杞人の憂、杞憂などといふ。昔支那で杞といふ國の者が、天が落ちて來はしな

てる

こゝは（一）

〔厭ふ〕 （一）忌はしく思ふ。嫌ふ。

（二）世を嫌ふ。憂世の念を起す。

（三）病をいとふ。健康に注意する。自愛する。

〔後醍醐天皇〕 第九十九代。後宇多帝第二皇子。北條氏の權を専らにし、皇位繼承にまで干渉するを不快に思召され、學者を招じて廣く學問を修め、政事を念とせられ、北條氏の人心を失へるを機として、後鳥羽上皇の御志をついで政權を再び朝廷に收めようとす、正中元年勤王の武士を徴されたが、事幕府に聞こえ御企ては破れた。しかも元弘元年再び討伐を宣せられたので幕軍は大兵を發して笠置の行在所を陥れ、皇太子量仁親王を立て、光嚴院と稱し、天皇を隱岐へ遷し奉つた。楠・新田の諸將が勤王の兵を起したのはこの時で、北條氏は敗れて（元弘の亂）天皇は京に還幸され所謂建武の中興となつたが、尊氏鎌倉に組するに及んで中興も東の間であつた。尊氏は間もなく一時西に追はれたが、淡川の戦に正成軍を破つて、光嚴院の御弟光明院を擁立した。こゝに天皇は義貞をし

いかと心配して寢食を忘るゝに至つたといふ故事から、未來の事を想像して氣に病むこと、即ち取込苦勞にいふ。列子天瑞篇「杞國有人憂天崩墜身亡無所寄廢寢食者、又有憂彼之所憂者、因往曉之曰、天積氣耳、奈何憂崩墜乎、其人曰、天果積氣、日月星宿不當墜邪、曉之者曰、日月星宿亦積氣中有光曜者、只使墜、不能有所中傷、其人曰、奈地壤何、曉者曰、地積塊耳、奈何憂其壤、其人舍然大喜、曉之者亦舍然大喜。」より出づ。

〔長閑に〕 こゝでは、安らかに。安心して。安閑と。ゆつたりと。落付いて。

〔天空海闊〕 テンクウカイクツツ。天の空しく海の廣いこと。轉じて度量廣く氣宇大なること、又は胸底何等のわだかまりもない状態にいふ。

〔見立てる〕 （一）見分けて選定する。鑑定。

（二）人の旅立を見送る。送別。萬葉十四「赤駒がかどでをしつつ出でがてにせしを見多氏し家の子らはも」

（三）後見する。世話をする。

（四）そのものに擬す。たぐふ。くらぶ。「花に見立

て皇太子恒良親王を奉じて北國を經營させ、潜かに吉野に行幸されたので、これより所謂南北朝の對立を見るに至つた。天皇は陸奥の北畠顯家を上洛させて京都恢復を企てられたが成らず、義貞亦北國に討死した。よつて更に北畠親房をして護良親王を奉じて陸奥を經營させんとし給ふたが海風の爲め挫折、懷良親王による九州經畧の御志亦成功せず、京恢復の成らぬはいふまでもなく、行在にある事三年、延元四年八月詔を遺して崩御。御壽五十二。

〔萬に一寸〕 一寸。寸毫。
〔自得〕 ジトク。(一)自らさとること。獨り合點すること。
(二)自ら満足して安心すること。太平記一「吾れ無爲の境に優遊して是非の外に自得す」
こゝは(二)の意であらう。

〔治國平天下〕 チコクヘイテンカ。國を治め天下を平かにする、即ち内政經畧にあたること。大學の註に「右傳之十章、釋治國平天下」とある。前の武功に對せしめてゐる。
〔隱岐〕 オキ。現島根縣に屬する。出雲の正北七八

れより、指導、教授の意に轉じ略して指南といふ。

〔王佐〕 ワウサ。帝王の輔佐。
〔心を用ふ〕 用心する氣をゆるさない。
〔足利尊氏〕 足利氏初代の將軍。元弘三年北條高時の命により六波羅を救ふ爲めに西上したが變心して官軍に加り、六波羅を陥れた。名族を以て建武の中興には正三位參議に任じ、後醍醐帝の御諱の一字を賜はり、高氏を尊氏と改めた。しかも彼の大志は鎌倉幕府再興の望となり、中興の政に平かならざる將士の心を收め、護良親王を鎌倉に幽閉し奉り、建武二年北條時行の亂あるや勅許をうけて東下したまふ西遷せず自ら征夷大將軍と稱し、義貞を除くと稱して兵を集めた。以後の南北朝の抗争に於ける行動の大略は前述諸條の如くである。正平十三年九州の官軍漸く勢を得たのを討た

十軒の海中にある四島を合せて隱岐の國とする。

〔砌〕 ミギリ。(水限の義、雨滴が落ちる際故かくいふ)(一)軒下の石など敷いたところ。
(二)轉じて庭。千載序「柴の庭玉の臺、千とせ久しかるべき砌とみがきおき給ひ」
(三)場所。處。盛衰記卅九「彼所は轉妙法輪の跡、佛法長久の砌なり」
(四)時。際。頃。
こゝは(四)

〔そち〕 (一)身から稍離れた方位を指す代名詞。そちち。あちら。
(二)下輩に用ふる對稱代名詞。汝。お前。
〔綸言〕 リンゲン。綸は組糸、天子の言、そのもとは糸の様に細いが、之を下に達する時は綸の様に太くなる義。君主の言。みことのり。西宮記「詔書・勅旨、同是綸言」
〔指南車〕 シナンシャ。支那の周公が始めて作つたといふ一種の車。車上に人形があつて、車が廻轉しても人形の手は常に南を指すやうにしかけたもの。一説に磁針を車上に裝置するともいふ。遠行しても道に迷はぬために用ひる。磁石の一種。そ

うとしたが四月病歿。年五十四。尊氏は器宇宏大、一世の英雄であつたが、利の爲に名分を誤つたのは惜しい。

〔猶い〕 ワルガシコい。
〔子故の闇〕 闇はくらい、道理が分らなくなる。こと。
〔道を以てすれば〕 やり様によつては。手段方法の如何によつては君子も欺かれぬと限らぬとの意。
〔肝に鑢りつく〕 キモにエリつく。心にはりつける。深く心に覺えて決して忘れない。肝に銘すと同じ。
〔陣鐘〕 チンガネ。昔、兵士の進退などの合圖に打鳴らした半鐘。
〔太鼓〕 タイコ。こゝでは陣太鼓。陣中で打鳴らした太鼓、用途前に同じ。戰鼓。

昭和八年十二月十五日發行

昭和八年十二月十日印刷
昭和八年十二月十五日發行

(非賣品)

不許複製

著作者

垣内松三

發行兼印刷者

東京市神田區美土代町二丁目一番地
株式會社文學社
代表者
小林竹雄

發行所

東京市神田區美土代町二丁目一
番地 電話 神田〇三五一
發行所 全日本東京三八七八番

株式會社文學社





